

香川県大川郡津田町

香川県綾歌郡綾歌町

岩崎山第4号古墳・快天山古墳  
発掘調査報告書

2002

津田町教育委員会  
綾歌町教育委員会

## 古墳調査報告書の発刊にあたって

このたび、津田、綾歌両町では合同で、京都大学考古学教室による岩崎山古墳（大川郡津田町）、快天山古墳（綾歌郡綾歌町）の発掘調査の学術報告書を発刊することになりました。これら両古墳の実地調査は、戦後の混乱期をまだ脱しきれていない昭和26年に相前後して行われました。このことは、当時すでに両古墳が学術的に重要な位置づけがなされていた証左がありました。

しかしながら、諸般の事情から調査報告書の刊行には至らず、貴重な記録は埋もれたままになっていました。このことをもっとも憂えたのは、若き日この調査に参加した、元香川県文化財保護委員六車恵一氏되었습니다。今回、調査報告書が刊行されることになりましたのは、多年にわたり、関係者に働きかけてこられた六車氏の陰の力に負うところが大あります。

また、報告書には、樋口隆康京都大学名誉教授による調査当時の詳細な解説論考に加え、広島大学の古瀬清秀教授、香川県歴史博物館渡部明夫課長の、現時点から見た両古墳の評価も収録することができました。

いずれも記して、厚くお礼申し上げます。

本報告書が広く活用され、研究のお役に立てれば、望外の喜びであります。

平成14年3月

津田町教育委員会  
綾歌町教育委員会

香川県大川郡津田町  
岩崎山第4号古墳発掘調査報告書

2002

津田町教育委員会



岩崎山第4号古墳近景（前方部南裾から後円部を望む）



岩崎山第4号古墳出土遺物（銅鏡・石製装身具類）

## 発刊にあたって

津田町の古墳群は、津田川をはさんで南北に分布し、そのいずれもが海を意識して造られています。

このことは、古くから自然の良港である津田湾を拠点とした海上交通のかなめとして、この地域が物や人の往来による賑わいで、経済力旺盛となり、支配圏の拡大もあって豪族の誕生へと結びつき、この豪族の墓が当地における古墳群であることから推察しますと、古墳と海との関わりが見えてきます。

今回の岩崎山古墳の調査を経て、改めてこの地域の豪族が中央政権との強いつながりをもち、中央政権の讃岐への勢力伸長の拠点であったことが再認識され、このようなことからも、「岩崎山古墳は津田町の誇る歴史的記念碑である」との広島大学考古学研究室の古瀬教授の言葉にいにしえのロマンを感じます。

津田町の古墳の一部は民間の開発行為で破壊され、貴重な遺産を守れなかったことは大変残念なことです、今回の調査報告書が津田町の歴史資料として後世に語り継がれ、ふるさとを知る礎（いしづえ）として広く活用されることを期待しています。

この度の岩崎山第4号古墳の発掘調査、報告書の作成に携われました関係者の皆さんに感謝と深甚のお礼を申し上げる次第です。

平成14年3月

津田町長 三 田 文 明

## 序 文

五十年前に発掘調査した古墳の報告書が漸く日の目を見ることになったことは、私にとって感慨深いものがある。

岩崎山古墳はすでに『讀岐国名勝図会』にも載っている著名な古墳で、何回かの調査もなされているが、私の恩師である京都大学の梅原末治教授が特に重要な遺跡として発掘調査を希望され、地元当局の協力を得て実施されたとき、私はお手伝いとして参加した。したがって、この報告書は当然梅原先生が執筆出版されるものであったが、先生から私に調査報告書の原稿を作るよう指示された。

ちょうど同じ頃、京都府椿井大塚山古墳の調査などで多忙であったため、十数年かかるって何とか報告書の原稿を作成したが、梅原先生もすでに亡くなられて、出版の機会を失っていた。

それを今回の出版へこぎつけてくださったのは、ひとえに六車恵一氏のお陰である。六車氏は発掘時には香川大学生として参加され、その後、地元の代表として出版にもいろいろ努力してくださった。この度、広島大学の古瀬教授の手を煩わすことになったのも彼の口利きのお陰である。

今回の出版に当たって原稿は当初のままとし、一切手を加えなかった。今日の調査方法や考察から見れば、不十分な点も多いと思われるが、やはり報告書は調査当時のものが良いと考えたからである。それに加えて、不十分なところは古瀬教授等によって追加調査していただき、現代の知見でその意義を考察していただいた。

この報告書製作の経過を述べるとともに、ご協力いただいた方々のご厚意に深く感謝する次第である。

平成14(2002)年1月22日

泉屋博古館館長(京都大学名誉教授) 樋 口 隆 康

## 凡　　例

1. この報告書は、昭和 26 年に京都大学文学部考古学教室梅原末治教授が実施した、香川県大川郡津田町南羽立に所在する岩崎山古墳群の発掘調査報告書である。
2. 本文（第 1～3 章）の執筆と図版、挿図の作成は京都大学文学部考古学教室 橋口隆康講師（当時）が行った。今回の報告書作成に当たっては、当初の原稿作成時より相当時間が経過しているが、調査当時の雰囲気をそのまま伝えるため、内容にほとんど手を加えずに収録した。ただし、本文中の遺物解説、図版、挿図の一部については、編集者が支障のない範囲で改変を加えている。挿図の縮尺表示等に不備いがみられるのもそのためである。
3. 今回の報告書作成に当たって、編集者と広島大学文学研究科考古学専攻大学院生が、岩崎山古墳群の詳細な地形測量を実施した。また津田湾岸の前期古墳についての歴史的位置づけを、編集者が新たに稿を起こした。それぞれ今回新たに章を設けて収録した。
4. 出土遺物については今回新たに、編集者と広島大学文学研究科考古学専攻大学院生が津田町立郷土資料館に所蔵する銅鏡、鉄器類ほかの資料調査を実施した。
5. 本報告書の編集は広島大学大学院文学研究科古瀬清秀が担当した。図版、挿図の点検と作成は同研究科考古学専攻大学院生打田知之が中心となって行った。

## 目 次

報告書作成に至る経緯	1
第1章 序説	3
1. 古墳の位置・地貌	3
2. 津田町の遺跡	3
3. これまでの調査並びに今回の発掘	6
4. 発掘調査日誌抄	8
第2章 岩崎山第4号古墳	13
1. 墳丘	13
2. 内部構造	15
3. 埋葬の状態	17
4. 遺物概説	21
第3章 岩崎山第1号古墳	35
1. はじめに	35
2. 墳丘	35
3. 内部主体	35
4. 出土遺物	37
付章1 岩崎山古墳群の地形測量	41
付章2 岩崎山古墳群について	44
1. はじめに	44
2. 濑戸内沿岸、島嶼部の古墳の理解	44
3. 津田湾岸の前期古墳の脱地域性	45
4. 火山産石材を用いた削抜き式石棺の導入	47
5. 津田湾岸をめぐる前期古墳の意味	48

## 挿図目次

- 第1図 津田湾周辺の代表的な古墳
- 第2図 岩崎山第4号古墳墳丘測量図  
(昭和26年測)
- 第3図 岩崎山第4号古墳竪穴式石室蓋石第2  
石実測図
- 第4図 岩崎山第4号古墳竪穴式石室と石棺実  
測図
- 第5図 岩崎山第4号古墳石棺実測図
- 第6図 岩崎山第4号古墳石棺内の造り付け石  
枕実測図
- 第7図 岩崎山第4号古墳出土斜縁二神四獸鏡  
断面図
- 第8図 岩崎山第4号古墳出土玉類  
(昭和26年)
- 第9図 岩崎山第4号古墳出土玉類  
(東博収藏品)
- 第10図 岩崎山第4号古墳出土石剣  
(昭和26年)
- 第11図 岩崎山第4号古墳出土石剣  
(東博収藏品)
- 第12図 岩崎山第4号古墳出土貝劍  
(東博収藏品)
- 第13図 岩崎山第4号古墳出土鉄製武器類
- 第14図 岩崎山第4号古墳出土鉄刀子
- 第15図 岩崎山第4号古墳出土銅鏡・銅鏡
- 第16図 岩崎山第4号古墳出土有柄孔鉄板
- 第17図 岩崎山第4号古墳出土鉄鎌
- 第18図 岩崎山第4号古墳出土鉄斧頭類
- 第19図 岩崎山第4号古墳出土鉄製工具類
- 第20図 岩崎山第4号古墳出土埴輪類
- 第21図 岩崎山第1号古墳墳丘測量図  
(昭和26年測)
- 第22図 岩崎山第1号古墳出土鉄製武器類
- 第23図 岩崎山第1号古墳出土鉄製工具類
- 第24図 岩崎山第1号古墳出土滑石製模造品類  
(1~5は東博収藏品)
- 第25図 岩崎山第1号古墳出土有孔帆立貝製品  
(東博収藏品)
- 第26図 岩崎山古墳群の位置(昭和26年当時)
- 第27図 岩崎山第1号古墳墳丘測量図  
(平成14年測)
- 第28図 岩崎山第4号古墳墳丘測量図  
(平成14年測)

## 表目次

- 第1表 岩崎山第4号古墳竪穴式石室天井石計  
測値
- 第2表 岩崎山第4号古墳石棺計測値
- 第3表 岩崎山第4号古墳出土遺物品目
- 第4表 岩崎山第4号古墳出土勾玉計測値
- 第5表 岩崎山第4号古墳出土管玉計測値
- 第6表 岩崎山第4号古墳出土鉄刀・鉄劍・鉄  
槍計測値
- 第7表 岩崎山第4号古墳出土鉄刀子計測値
- 第8表 岩崎山第4号古墳出土銅鏡・銅鏡計測値
- 第9表 岩崎山第4号古墳出土鉄鎌計測値
- 第10表 岩崎山第4号古墳出土鉄手斧計測値
- 第11表 岩崎山第1号古墳出土遺物品目  
(昭和2年出土)
- 第12表 岩崎山第1号古墳出土滑石製刀子計測値
- 第13表 岩崎山第1号古墳出土滑石製鎌計測値

## 図版目次

### 巻頭図版

- 上 岩崎山第4号古墳近景  
(前方部南裾から後円部を望む)  
下 岩崎山第4号古墳出土遺物  
(銅鏡・石製装身具類)

### 図版第1

- 上 岩崎山古墳群の遠景 (第1号古墳から)  
下 岩崎山第4号古墳の全景 (前方部から)

### 図版第2

- 上 岩崎山第4号古墳の竪穴式石室 (北から)  
下 竪穴式石室と石棺の出土状況 (南から)

### 図版第3

- 蓋石除去後の竪穴式石室と石棺 (南から)

### 図版第4

- 上 竪穴式石室と石棺の南半部  
下 竪穴式石室と石棺の北半部

### 図版第5

- 石棺蓋を除去した後の石棺内の状況

### 図版第6

- 上 斜線二神四獸鏡の出土状況  
(竪穴式石室の南端部)  
下 鉄劍・鉄刀の出土状況  
(竪穴式石室の南西隅)

### 図版第7

- 上 石棺内南側の造り付け枕  
下 同上拓影

### 図版第8

- 上 石棺内北側の造り付け枕  
下 同上拓影

### 図版第9

- 上 文化6(1809)年出土の四神四獸鏡図  
下 斜線二神四獸鏡 (昭和26年出土)

### 図版第10

- 上 石棺内出土の硬玉製勾玉など玉類と碧玉  
製石鏡 (昭和26年出土)  
下 石棺内出土の碧玉製管玉・ガラス製小玉  
(東京国立博物館収蔵品)

### 図版第11

- 上 碧玉製石鏡 (東京国立博物館収蔵品)  
下 碧玉製石鏡 (東京国立博物館収蔵品)

### 図版第12

- 上左 碧玉製石鏡 (東京国立博物館収蔵品)  
上右 貝製鏡 (東京国立博物館収蔵品)  
下 銅鏡 (昭和26年出土)

### 図版第13

- 上 石棺外出土の鐵製武器類 (昭和26年出土)  
下 同上鐵刀・鐵劍・鐵槍の茎部

### 図版第14

- 上 鐵製農工具類・鐵鍬・有柄有孔鐵板  
(昭和26年出土)

- 下 鑿・鎌などの鐵製工具類 (昭和26年出土)

### 図版第15

- 上 岩崎山第1号古墳の近景  
(墳頂部から津田湾を望む)  
下 岩崎山第1号古墳の箱式石棺 (左が西棺)

### 図版第16

- 上 岩崎山第1号古墳西棺 (A棺)  
下 岩崎山第1号古墳東棺 (B棺)

### 図版第17

- 上 岩崎山第1号古墳出土帆立貝製有孔貝製品  
(表)

- 下 同上製品 (裏)

### 図版第18

- 上 岩崎山第1号古墳出土滑石製刀子  
下 岩崎山第1号古墳出土滑石製摘錄 (鋸?)  
・鎌

### 図版第19

- 上 岩崎山第1号古墳出土斂・鑿などの鐵製工  
具類  
下 岩崎山第1号古墳出土鍛造鉄斧と小型有袋  
鉄斧

### 図版第20

- 上 岩崎山第1号古墳出土鐵刀  
下 岩崎山第1号古墳出土鐵劍

## 報告書作成に至る経緯

1951(昭和 26)年、京都大学文学部考古学教室の梅原末治教授が津田町岩崎山第 4 号古墳および綾歌町快天山古墳の発掘調査を実施した。前者の現場の発掘は樋口隆康講師が担当して、10月 13 日～21日の延べ 9 日間、後者は主に同教室員の横山浩一氏が担当し、3 月 10 日から短時日間、出土遺物及び遺構の一部の再調査が行われた。この間、地元から調査に参加した、当時香川大学学生であった六車恵一氏(元長尾小校長、大川町在住)は後に、中学校教員として歴史教育に携わるようになり、香川県の文化財調査と研究に取り組むうちに、両古墳の重要さを改めて再認識し、調査後も未刊のままであった調査報告書が一日も早く出版され、発掘調査の詳細な内容や意義付けが公開されることを望むようになった。ちょうど 1960 年ごろになり、樋口助教授(当時)から諸般の事情から刊行に至っていないが、古墳の調査報告書について原稿がほぼ出来上がっていることを知らされた六車氏はこの後、両町教育委員会に発掘調査報告書の刊行を働きかけるところとなった。この六車氏の奔走と両町の理解によって、ようやく刊行の方向に動き出したのが 2000(平成 12)年のことであった。

同年 6 月 27 日、それまでに六車氏から報告書作成について何度か相談を受けていた古瀬清秀(当時、広島大学文学部助教授)は、綾歌町教育長土岐道憲氏、津田町教育長堀井正和氏、津田町教委課長奥田隆司氏 3 名の広島大学考古学研究室への訪問を受け、報告書の編集作業を担当することになった。同時に、香川県の石棺研究の第一人者である渡部明夫氏(香川県立歴史博物館学芸課長)も報告書作成作業に加わることになった。

同年 7 月 4 日に土岐、堀井、奥田、六車、渡辺、古瀬が京都市にある泉屋博古館に樋口館長(京都大学名譽教授)を訪ね、両古墳発掘調査時の図面類、写真類、原稿、その他一括を借用し、本格的に報告書作成に向けての活動を開始することになった。その後、奥田課長が他部署に移動したので、後任の六車正徳課長が古瀬との交渉を担当することとなった。

なお、編集過程で快天山古墳の墳丘測量図が欠失していることがわかり、さらに岩崎山第 4 号古墳についても等高線が 1 m 間隔の測量図だったので、両町から調査費補助を受けて、地形測量の再調査を実施することにした。快天山古墳については徳島文理大学の大久保徹也講師が同大学学生・大学院生とともに、2001(平成 13)年 4 ～ 5 月の延べ 15 日間、岩崎山第 1・4 号古墳については古瀬が広島大学大学院生とともに、2002(平成 14)年 1 月 24 日～2 月 5 日までの延べ 13 日間をかけて、両者とも 25 cm 間隔の等高線で測量を実施した。また、樋口氏原稿の参考とするために、両古墳の出土資料について古瀬と広島大学大学院生が、岩崎山第 4 号古墳関係は津田町立郷土資料館において、快天山古墳関係は香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館において、実測図作成、写真撮影などを実施した。

報告書作成にあたりましては、泉屋博古館樋口隆康館長、津田町堀井正和教育長(現収入役)・

田中繁則現同町教育長・奥田隆司同町教委課長（現商工観光課長）・六車正徳現同町教委課長、綾  
歌町土岐道憲教育長・新居 勉同町教委係長、古墳土地所有者の方々、渡部明夫（香川県立歴史  
博物館学芸課長）、宮谷昌之（香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館館長）・溝淵茂樹同館調査普及課  
長・松岡宏一同館主任技師、大久保徹也（徳島文理大学文学部講師）・同大学学生諸氏、広島大学  
大学院学生檜林啓介・敦賀啓一郎・打田知之・八幡浩二・加藤 徹・唐津彰治・吉川裕幸・六車  
恵一（元長尾小校長）、山本一伸（寒川町教委主事）、阿河銳二（大川地区広域行政振興整備事務  
組合）ほか多くの方々、関係諸機関に大変お世話になりました。記して謝意を表したいと思いま  
す。

# 第1章 序 説

## 1. 古墳の位置・地貌

高松の東方に位置する大川郡は、密集する小地盤によって平野が寸断され、その付近の海岸線は変化に富んだ凹凸を見せている。その一つである津田湾は、北山と雨滝山の2つの山塊と、それを結ぶ低い丘陵によって、背後をやくされ、海岸沿いに細長い砂丘の発達した小平野が存在する。その中央部には、西方の丘陵を横断して津田川が流れ、この低地を灌漑している。

この川の北岸に近く、丘陵の尾根の一つが、羽立と川北の両部落の間に嘴状に張り出しており、この尾根の稜線に沿って、4基の古墳が存在する。この地方の郷土史家は、西方の高所にあるものから順に、第1号古墳、第2号古墳、第3号古墳、第4号古墳と名付けている。この第4号古墳頂に岩崎櫻現と呼ばれている小祠が祀られているので、これらの古墳は岩崎山古墳と名付けられた。

この地塊では花崗岩を基盤とする古い地層で、小田半島の北山はその上に含輝石讃岐岩質安山岩をかぶせたメサ、西南の雨滝山は紫蘇輝石角閃安山岩を産する新しい突起である。

津田湾は東の外海に面したC状に凹んだ格好の入り江で、その中央部、津田川河口の南に、津田町が発達し、その東には白砂青松の景勝地知られた琴林公園がある。

したがって、この津田町はもともと漁村として立ったものであろうが、一方高松から海岸沿いに徳島へ通ずる街村の一つと見なされ、あるいは風待ちの避難港としての役割をも担っていたのかも知れない。

## 2. 津田町の遺跡

この津田町を中心とした小地区は、地形的に見て、特に人文の発達する根據を認めがたいが、岩崎山古墳以外にもなお数ヶ所の遺跡が存在する。大川町に在住して、熱心にこの地区的遺跡調査に当たっておられる六車恵一氏の資料<sup>1)</sup>に基づいて、それらについて略記してみよう。

石器としては、雨滝山東麓の山根付近や、その東南に続く火山の東麓、相地の赤山から石鎚の出土が知られており、津田湾南端の鶴の部山では、石鎚のほかに石斧も出土している。

北方の北山は屋島と同じメサで、山頂の平坦地内の凹地には夥しい石鎚・打製石包丁・柱状片刃石斧・弥生土器片が散布している。高地の遺跡として、西讃の三豊郡託間町紫雲出山と同じ性格のものとして注目される存在である。

琴林公園の裏手(西方)の神野でも柱状片刃石斧が採取されており、その近くの薬師堂からは、地下2mより土師器の杯や壺が出土した。

古墳も、それほど多くないが、北からあげると次のような例がある。

### (1) 吉見弁天山古墳(第1図2)

海岸線に近い古墳で、墳丘上に弁天様を祀る小祠があり、組合せ式石棺の板石が數枚散乱して



第1図 津田湾周辺の代表的な古墳

- |                 |            |            |             |           |
|-----------------|------------|------------|-------------|-----------|
| 1. 岩崎山古墳群       | 2. 古見弁天山古墳 | 3. 吉見福荷山古墳 | 4. 北羽立古墳    | 5. 龍王山古墳  |
| 6. 川古古墳         | 7. 坂子古墳    | 8. 奥古墳群    | 9. 古枝古墳     | 10. 石井古墳群 |
| 11. 天王山古墳群      | 12. 襲神古墳群  | 13. 中尾古墳   | 14. 富田茶臼山古墳 | 15. 川東古墳  |
| 16. 火山 (石棺材産出地) | 17. 赤山古墳   | 18. 鶴の部山古墳 | 19. けば山古墳   | 20. 一つ山古墳 |

おり、明治年間に人骨が出土したと伝えられている。

(2) 吉見稻荷山古墳（第1図3）

配水池のある山より斜面にあり、墳丘は明確ではないが、組合せ式石棺の東と南側壁の直角に交わった部分が露出している。

(3) 北羽立古墳（第1図4）

平野から山丘の羽立峠へ至る道路の西南側にある溜池の西方に位置している。山丘を利用した東向きの前方後円墳で、全長35m、後円部径20m、高さ3.5mの小型である。葺石が裾縁部に残っており、前方部は開墾のため削られて、平坦になっているが、後円部は比較的よく残り、ここの中中心部にあった組合せ式石棺が明治12年に発掘されて、人骨・鉄劍・鏡が出たという。そのうち、鏡は現在、長町与彦氏が所蔵し、径10.5cmの鼈龍鏡の簡単な形式と見られる仿製四神四蟠龍鏡である。

(4) 羽立・龍王山古墳（第1図5）

岩崎山と同じ山塊の、その北方に突き出た尾根の瘤を利用して円墳である。径26mの墳丘には、葺石がよく残り、埴輪円筒片も散乱している。その墳丘の北寄りに、主軸を南北の方向に向けた竪穴式石室がある。板石で壁面を築き、上に天井石を架したもので、南側の半分が現存している。室長6.3m、幅0.8mあり、床には粘土床が設けられていた。出土品として、鏡2面のほか、鉄劍・鉄刀・鐵鎌片などがある。鏡の一つは小片を接合すると、4分の1ばかりになる仿製の内行花文鏡で、内行花文と円座をめぐる素文突帯の間に、細線三重山形文を配したもので、この図文は、綾歌郡綾歌町にある快天山古墳第2号石棺内出土の鏡に似ている。径は推定8.9cmある。もう一つの鏡は鉄鏡で、同じく4分の1ばかりを残し、文様は錆のため、はっきりしない。推定径は15cmくらいである。

(5) 鶴羽相地・赤山古墳（第1図17）

梅原教授が以前に報告<sup>21</sup>した、1面の優れた古鏡を出土した古墳である。鶴羽部落背面の相地の四つ池の中央に位置し、地形を利用して築かれた、南向きの前方後円墳であったともいわれている。今は径30m、高さ3.6mの円形をなす封土が残っており、その上に2つの石棺が直交するよう埋もれている。ともに凝灰岩製の割抜式割竹形石棺で、石枕を1個ずつ造り付けており、内面は朱を塗っている。大きいほうは北にあって、東西に長く置かれ、全長2.6m、蓋高48cm、小さいほうは南にあって、南北に長く、全長2.22m、蓋高38cmを測る。安政2(1855)年(?)頂上よりやや下がったところから、壺に入った玉や鏡が出土したといわれる。その鏡は径23.2cmを測る大型の仿製方格規矩獸文鏡の優品である。

(6) 鶴羽岡の端・鶴の部山古墳（第1図18）

津田湾南端の突角基部にあり、南を向いた前方後円墳の積石塚である。全長30.9m、後円部高2.65m、大正年間に鉄鏡を出したという伝えもあるが、所在不明。

(7) 鶴羽岡の端・けば山古墳（第1図19）

突角の北東縁、海に突き出た丘陵上にある前方後円墳である。全長57m、後円部直径26.3m、同高3.3m、前方部幅15mある。表面に礫が一面に散布し、埴輪円筒も散乱している。後円部頂上の中心よりやや後方に竪穴式石室の天井石らしきものが4個、3.5mにわたって主軸と直角に並んでいるのが見られる。そのうち最端の一石は全体が露出しているが、長2m、幅0.9mの長方形をなし、両端に繩掛突起がついていて、石棺の蓋石を転用したようでもある。凝灰岩製。所伝によれば、内部には7尺くらいの人骨に、勾玉、銅鏡、鉄刀が副葬されてあったという。

(8) 鶴羽岡の端・一つ山古墳（第1図20）

けば山古墳の東方、海に突き出た小丘上の円墳である。径20m、高さ2.7m、周縁に砂利が葺石として使用されている。所伝に、石棺内に朱詰めの人骨があり、その傍らに5寸ばかりの鏡と、他に大刀があったという。

(9) 琴林公園内十三塚

積石塚であったという。

以上のように見てくると、本地域には遺跡の数はさほど多くはないが、そのうちには注目すべきものも存在する。北山遺跡は、弥生時代の集落として、比較的規模の大きなものであり、赤山古墳は2つの石棺をもち、優れた大形の仿製鏡を出土した点で岩崎山古墳に劣らない内容をもっていたと見なすことができる。

この小地域に、比較的大きな勢力が存在したことについては、ただこの地域だけの観察では納得することができない。今西方を限る丘陵の背後を見ると、そこには、富田村、石田村、長尾町の平地がある、それは高松平野が東方へ長く延びた支脈であり、この付近には大きな古墳<sup>3)</sup>も存在し、また高松平野に著しい条里制の地割が、この辺りまで残っている。したがって、津田町は高松平野に付属する衛星集落の一つとしてみなすとき、初めて、このような遺跡の存在した理由が理解せられるのである。

### 3. これまでの調査並びに今回の発掘

岩崎山古墳は早くからその名が知られており、古文献にも遺物出土のことなどが記されている。これらの從来の発掘については、香川県史蹟名勝天然記念物調査会の報告書<sup>4)</sup>に松浦正一氏の詳細な記録がある。また故上原準一氏蔵書の古文献などを参照して、発見の経過を略記しておく。

第一は嘉永6(1853)年冬の序のある『讃岐国名勝図会』の寒川郡二の条に、津田山古墳として記述があり、そこに引いてある「古鏡記」に、文化6(1809)年発掘の様子がかれている。石棺内に一男両女の遺体があり、その傍らに壺があり、鏡を蓋にし、中に勾玉等が入っていたという。挿図として、穿古墳図(図会第7図)がある。5人の百姓のうち手前の1人が土中から取り出しているのは壺であろうか、後の1人は鏡の表に自分の顔を映している。もう1枚の挿図には、鏡の背面の文様と銘文がかれている。

吾作明竟幽練三百續禮道配像萬彌曾年益寿子孫番昌楽未央

この釈文は「百續禮」を「商統德~~序~~」と訂せば十分である。

また、「全讃史」には、岩崎古家と岩崎大権現についての記事に、本墳発掘のことを記しているが、文化十年九月十六日としており、多少『讃岐国名勝図会』にはなかった観察があるが、棺内からの鏡の発見は同一の発掘を意味していると見ることができる。

次に松岡調氏の『新撰讃岐國風土記』や『大川郡史』によれば、明治6(1873)年6月に村人が発掘したとき、名東縣高松市廳の久保秀景なるものが、石棺・石室の図をつくりて、名東縣縣令へ処置について問い合わせている。

以上の記録に出てくる古墳は、4基の古墳のうち第4号古墳に該当する。

次いで、昭和2(1927)年になって、志度商業学校松浦正一氏によって、3度目の発掘がなされた。しかもこのとき、第1号古墳が初めて発見され、また第4号古墳にも手を入れ、多少の遺物を検出した。香川県報告第5冊に載せられた記事は、その時の発掘の結果である。ただその発見の事情などについては、報告書中に具体的な記述がないので、われわれの調査に際し、発掘担当者の松浦正一氏にただしたところ、同氏の記録や当時警察署へ提出した届出書などにより、次の事情が明らかとなった。

昭和2年4月26日、津田町在住の笠井咲一氏が第1号古墳の頂に露出していた石を取り除いたところ、下に石棺(B棺の足部)の埋もれているのを発見、内部から遺物の一部を取り出した。

笠井氏は親族の志度商業学校3年生横山一太郎君をして、出土品のうち石製刀子2個、貝製器具2個を学校に持参して、調査を請わしめた。校長菊池文雄氏は歴史科担当嘱託教諭松浦正一氏と同じ歴史科担当の佃孝夫教諭と相談の結果、実地調査をすることにし、上記遺物は校長の手元に預かった。(後に警察に提出した。)

5月3日午後、菊池校長、松浦、佃の3氏は、地元の笠井、秋元氏、横山生徒らと第1号古墳を発掘した。封土は2寸ないし3寸にして、2つの石棺を出した。東側の石棺(B棺)は笠井氏が発掘したもので、中から次の遺物が見いだされた。大刀・剣は遺骸の両側にあったが、どちらにどれがあったかは明らかでない。數寸に破損し、口数もはっきりしない。足部から月日貝2枚、石製刀子2枚(以上はすでに笠井氏が取り出した分)、石製鎌、石製包丁などがあった。また肩の上、耳の下辺に櫛2個、鉄錐らしいものがあった。うち櫛1個と鉄錐は上原準一氏を経て東京国立博物館に寄贈、櫛1個は上原氏が所蔵している。そなほか斧頭2個を笠井氏がすでに取り出していたが、その出土地点は不明である。このとき、さらにもう1基の石棺(A棺)が、西側から発見

された。棺内には大刀 1 口？が右側にあり、足下に鎧片、石製刀子、貝器などが置かれていた。

第 1 号古墳の発掘を終わって、松浦氏は笠井、秋元氏と第 4 号古墳をも発掘した。頂上の神祠南方を掘ったところ、深さ 50 cm にして天井石が現れた。破損していたその一部を取り除くと、その下に剖抜式石棺があった。棺内は土砂が流入し、南方が厚く約 15 cm 堆積し、北に進むほど薄くなり、棺底には朱が約 1 cm ほどの厚さに敷かれていた。棺の北半部に人骨の上半身が明瞭に残っていたが、頭蓋骨は石枕の下方にずり落ちていた。石釧、貝釧などは東北隅の石枕の下に朱に埋もれており、玉類も朱の中に混在していた。

遺物は警察に届けたもの（県報告に掲載した管玉 22 個、小玉 30 粒、車輪石 1 個、貝釧 3 個、石釧 2 個、埴輪片、朱 950 邪）の他に、鍬形石 1 個、石釧 3 個、硬玉製丁子頭勾玉 1 個（長さ 2.5 cm くらい）、管玉 7、8 個があったが、第 1 号古墳出土の石製刀子 3 個とともに 7 月 15 日ごろ海中に捨てた。

次いで昭和 4 年 2 月 18 日に、松浦氏は岡田唯吉氏と 2 人で第 4 号古墳の石室を実測したが、その際、墳丘南側のくびれ部で、埴輪円筒の埋まっているのを発見、その中央の 1 個は梢円形であった。これはいま坂出市にある鎌田共済会の郷土博物館に保管されている。

以上、これまでの調査によって知られるごとく、本古墳はいわゆる竪穴式石室の内に石枕 2 つを造り付けた珍しい石棺の存在することで、一般によく知られていた。

序説にもふれたごとく、梅原教授は本墳が古式古墳研究の上に極めて重要な資料を提供するものであることを認めていたが、従来の調査には不十分な点が多いため、実地についてその全貌を明らかにしたい希望を多年抱いてきた。幸い、現地津田町役場のご好意によって、その調査の機会が与えられることになったので、昭和 26 年 10 月 13 日から 21 日までの 9 日間、梅原教授と当時京都大学講師であった樋口隆康が現地に赴き発掘調査を実施した。

調査にあたっては、香川県史蹟調査委員の上原準一、福家惣衛、和田正夫の 3 氏、久万玉中学校長大林英雄氏らが随時参加し、香川大学生六車恵一氏や、三本松高等学校生徒岡正義、佐藤文雄君らも発掘作業を手伝ってくれた。

まだ棺内に遺存していた人骨の採集・調査のため、岡山大学医学部解剖学講師中島寿雄、同助手近藤義郎両氏の来援をも仰いだ。

なお地元津田町役場においては、町長田中修三氏をはじめ全職員から本調査期間中、各種のご援助をいただいたことを付記しておきたい。

#### 4. 発掘調査日誌抄

10 月 13 日 曇・風

梅原教授は、東京へ出張用務のため 2、3 日遅れて参加することになり、樋口が単身京都を出发し、岡山経由で四国に向った。台風接近の報が伝わり、宇高連絡船に乗ったころから、次第に雲行きがあやしくなる。高松埠頭で香川県文化財保護委員、福家惣衛氏と落ち合い、同道して、

津田町へ着いたのは夕方の5時頃であった。駅頭で津田町長田中修三氏の迎えをうける。宿舎樂浪荘に荷物を置き、明日からの調査の方針をたてるために、遺跡の下検分に出かける。

津田町の北方に西方から突き出た丘陵の尾根に沿って4基の古墳が並んでいる。上から第1、2、3、4号古墳と呼ばれているが、そのうち第1号古墳と第4号古墳とが前方後円墳、他の2つは円墳とのことである。地形はかなり複雑で、外形の測量などは1人でちょっと困難のようでもあった。

夜、雨が降りだし、風も出てきた。台風が接近しているようで、明日の天気が気づかわれた。

#### 10月14日 雨

やはり台風（ルース）が通過するためか、風雨が激しい。予定の外形実測を中止して、これまで同古墳から出土した遺物を地元の人気がもっていないかを探りに出かける。昭和2年に当時の志度商業学校の助教をしていた松浦正一氏らが実施した発掘は、当局の許可なくして行われたために刑事問題となつたが、当時の古墳所在地の地主であった岩崎毅氏と笠井咲一氏（笠井氏は現在は地主ではない）とを訪ねた。岩崎氏の談によれば、出土品は東京の博物館へ寄贈し、土地の人は何も持っていないが、県の報告書第5冊に載っている以外に勾玉などの玉類が多数出土した。しかし、それらは海へ投げ捨ててしまったということであった。ただ、第3号古墳から出たと伝えられる勾玉3個、管玉2個を今も国方勢助氏が所蔵しているとのことであったので、長町氏に頼んで借り受け、実測する。

#### 10月15日 雨のち晴

朝起きたときは、風がまだ強く、雨も少し降っていたが、台風はすでに通過したとのことで、風向きもかわり、青空も見えてきたので、とにかく調査を開始する。地主の岩崎毅氏、付近の有志、津田高等学校の生徒諸君が手伝いに来てくれる。

八幡宮の神職に依頼してお祓いをしてもらう。外形の測量はまだ風が強くて不可なので、後回しとし、直ちに第4号古墳を掘りはじめる。

墳頂には岩崎権現の小祠があり、その台座石は石室石材の一部のようである。また、その傍らには、封土の斜面に散在していたものを寄せ集めたという埴輪片や塊石が積み上げてあったので、まずそれらを取り除いた。すでに何回かの盗掘にあっているので、墳頂の盛土は攪乱せられていると判断し、ほぼ中央辺を掘り下げると、直ちに天井石の一部が現れた。そこでこの天井石を追って、その全上面を露出し、石室の大きさと方位、並びに石室を納めた土壙の壁面を突き止めることにして掘り広げ、ほぼ全体を覗すことができた。

すなわち、石室は後円部の中央に、封土の長軸に対して直角に、南北に長く営まれている。天井石は4枚、長方形に正しく切ったものを使い、北から第2石が半分欠け、その残石が第3石の上にのしかかっており、欠けた部分には野石が多数放り込まれていて、ここが盗掘坑であったことは一見して認められる。

天井石の周囲にはそれとほぼ同一平面上に粘土が敷かれており、その下には疊の層が続くよう

である。ただ南北の両側面では、いずれもこの粘土層が中央辺りでなくなり、疊石が直接露出しているが、これは盗掘の際に取り除かれたためか、あるいは最初からの構造であるのか、はっきりしない。粘土層の幅は約 80 cm あって、その端が土壤壁になるようである。

夕方近くになって、昭和 2 年に発掘した松浦正一氏が現場に来られたので、早速当時の様子を聞いた。やはり天井第 2 石の半欠部から内部へ入ったとのことで、その石は墳頂にあった岩崎櫻現の台座に使っていたものであるという。また、当時、石棺内には朱が 1 cm くらいの厚さにたまっていたり、遺物は全部とりだしたが、棺外は全く手を付けなかつたといふ。

また、墳形についても、松浦氏に旧状を尋ねると、前方部の両側がいまは削られているが、もとはよく形を残していたといふ。後円部後方裾まわりに帶状にめぐっていたといふ割石敷きの地点も、同氏の指示により確認できたといふ。ただこの葺石は、上方の斜面にはない。

埴輪については、いまは破片が散乱しているだけで、原位置の確かなものをまだつかめなかつた。松浦氏がくびれ部右下方において 3 個の埴輪を検出したという地点も、すでにその痕跡は認められなかつた。

天井石の実測と写真撮影をして本日の作業中止。

夜、大川郡鴨部村東山長福寺の住職が、明治 38 年に本堂改築の際に大甕の中から出土したといふ古銭を持ってきた。古銭は、薬縄を通して甕に入れたらしく、9 貫もあるといふ。開元通宝と、各種の宋銭が主なもので、それと一緒に出たといふ木札があつて、表に「九貫文花敵坊賢秀御房」、裏に「文明一二年三月一九日敬白」と書いた墨書きがあり、室町末 (A.D. 1480) の年号がわかる。

10 月 16 日 晴

梅原は早朝現地に到着した。

樋口は天井石を取り除く作業を担当する。まず、北から第 1 石は原位置のままと思われたので、これを残し、第 2 石の破損した石材と、その隣の第 3 石を除き、内部に詰まっていた土砂を清掃すると、内部の構造が明らかになってきた。明治 6 年の発掘の際に描かれた図面によれば、長持形の石棺が、タイル状の石囲いの中に納められているかのごとくに見えたが、実は割竹形石棺が板石小口積みの石櫛の内に安置せられていることがわかつた。しかし、石棺と石櫛との間隔は極めて狭く、ほとんど石棺に接するように、壁体が積み上げられている。石棺の蓋は中央辺で 2 つに割れ、南半分の中央部がえぐり取られて、大穴が開き、そこに剝ぎ取った棺蓋片を表裏逆に置いて塞いでいた。ここから盗掘者が棺内に侵入したことは明らかである。第 3 天井石をめくったとき、石櫛側壁の上面に朱に染まった土砂の塊があつて、多数の管玉と、2 個の勾玉が検出されたが、これらは盗掘者が棺内から遺物を取り出した際に、遺棄した残骸であると見られる。

一方梅原は三本松高校生 10 名を指揮して、後円部背部の裾部に遺存している葺石の調査を行つた。埴輪円筒片も所々に散在していたが、原位置を確かめうるものはなかつた。

午後、梅原が石櫛両端の棺外空所を探つたところ、南端の床面に鏡 1 面が遺存しているのを確かめた。ここは棺蓋の罫掛突起の真下に当たり、これまでの盗掘者が棺内だけを探つて、棺外

にも遺物の在することに思い至らなかったために、残されたものと推測された。したがって、棺外には他の遺物が現存している希望が持たれることになった。

鏡は石棺の蓋の南端下に隠れているので、それを実測・撮影するために、蓋の南半部を取り除いた。棺内には水が溜まり、粘土が流入しているが、下底には朱が一面にあって、昨日の松浦氏の証言を裏付けている。遺物の残存ははっきりしないが、ほぼ完全な形の頭骨1個が棺内中央部に転がっているので、人骨の処理をしてもらうために、岡山大学医学部の中島寿雄講師に電打して来援を請うことにした。棺底の両端に彫り出されていることが知られていた石枕も、ほとんど破損されないままに残っている。

鏡の出土した石柳南端部は石棺身の中ほどとの高さまでに、砂利石が詰めてあり、その上面に、鉢を上にして鏡が水平に置かれ、その下には一振の鉄劍があり、さらに、後世落下して混入したと思われる埴輪片（家形の千木らしい）が1個上に重なっていた。

すでに夕方近かったので、実測・撮影後、再び、棺蓋南半部を元に戻して、5時半作業を終わる。

夕食後、宿舎樂浪荘で、県下の考古家が参集して、座談会が行われた。参加者は上原準一、福家惣衛、和田正夫、大林英雄、石川巖、田中定次郎、大西正夫、児玉某、氏家喜兵衛、六車恵一、田中四朗、大西順、岡正義、佐藤文繼、浪花勇次郎の諸氏であった。その際、和田正夫氏は平形鉄劍3本の新資料をもってこられた。仲多度郡與北村鉢伏山南麓から出土したもので、3本が交互に重なった状態で出土したという。

#### 10月17日 快晴

8時過ぎ作業開始。樋口が主要部の測量・写真撮影を行った後、北の天井第1石をも取り除き、石柳と石棺との関係を調べる。石柳では北東隅の石積みがよく原形をとどめているが、やや内方に傾いていて、今にも崩れ落ちそうである。地盤は北側が多少高い。

棺の実測完了。

梅原は前方部の葺石と、埴輪列の有無を調べる。前方部端の北東隅に埴輪片や割石が散乱し、その内には、倉庫とおぼしき形象埴輪の破片も含まれていた。

第4号古墳の調査と平行して、梅原は三本松高校生の援助を得て、第1号古墳の主体部を清掃し、2個の箱式棺の相並んだ全貌を明らかにした。

その間午後1時より津田高等学校で、発掘古墳についての講演を行う。

夕方、岡山から中島寿雄氏が近藤義郎氏と同様して到着。一方香川県考古学会の諸氏は大部分帰宅し、上原、福家、和田、大林の4氏が居残った。

#### 10月18日 晴

午前8時作業開始。石棺蓋石を全部取り除くためには、側壁の一部が棺上に覆い重なっているところがあるので、まず南半の蓋石を除き、北半の蓋石を南方にずり寄せて、引き上げる。内部に残っていた頭蓋は、中央からやや北寄りのところに転がっており、完形を存してはいるが、そ

の位置は古い発掘の際に攪乱されているので、直ちに中島・近藤両氏の手によって採集してもらう。棺内には他に遺物は認められなかったので、大林氏が内部を清掃した。

梅原は、和田・六車・福家氏らの援助を受け、主として石棺身の実測に従事し、さらに棺外両側に副葬された遺物の検出を行い、棺身と櫛壁との間から、鉄剣・銅鏡・鉄斧頭などを見いだした。

また、櫛壁上面に遺棄されていた朱の混ざった土塊のうちから、小形の勾玉・管玉・小玉などを検出した。なお石櫛北端の空所からは何も出てこなかった。南端に遺存していた鏡の例から推すと、文化6年に出土したといわれる鏡は、あるいはここに置かれていたのかも知れない。

樋口は三本松高校と津田高校の生徒に手伝ってもらって、第1号古墳の外形実測をはじめた。

10月19日 晴

8時過ぎ作業開始。

午前中、梅原は第4号古墳の石櫛・石棺の実測に従う。

樋口は第1号古墳の外形測量を午前中に完了する。同古墳は福家氏らは前方後円墳ではないかといっていたが、実測の結果では直角の両方向に尾根が延びており、前方部といわれる部分も歪んでいて、正しい形をとらない。盛土も石棺の付近に限られており、円墳と見なしたほうがよさそうである。時間の余裕があれば、トレンチを作って、葺石、埴輪の有無を調べて見る必要がある。

午後は梅原が第4号古墳の石櫛外の設備や、石櫛と封土との関係を調べ終わって棺蓋を元に納め、天井石も北半をかぶせて、この部分の埋め戻しにかかる。

樋口は第4号古墳の外形実測をはじめる。

10月20日 曇後小雨

梅原は長尾町方面へ調査に出かける。

樋口は、福家、和田、大林、佐藤氏らと最後の作業をする。まず、石棺、石櫛、地山との関係を調べるために、石櫛南よりの西側に石櫛と直角の断面を作った。それによると、表土からあまり深くないところに地山があり、その地山を掘って、土壤となし、その土壤の中央をさらにもう一段掘り窪めて、棺を納める場所としている。土壤の最下底には粗質の粘土を敷いて、その上に直接石棺を安置してある。棺身の両側には板石を差し込んで、控えとしているのが注意される。土壤の両側の二層台上には、最下底に粘土を敷き、その上に砂利層があって、板石積みの壁体が築かれている。この壁体の上に天井石を架けているが、天井石に覆われない外周部には、天井石と同じ高さまで砂利を置き、その上に粘土をかぶせて上に盛土したようである。

一方、外形の実測は佐藤君が中心となって、三本松高校生諸君が主として行ってくれた。夕方近く、埋め戻しもほぼ完了し、一応これで調査を打ち切った。

10月21日

朝早く、田中町長をはじめ、地元の人々の見送りをうけて津田町を離れ、高松を経て京都に帰る。

## 第2章 岩崎山第4号古墳

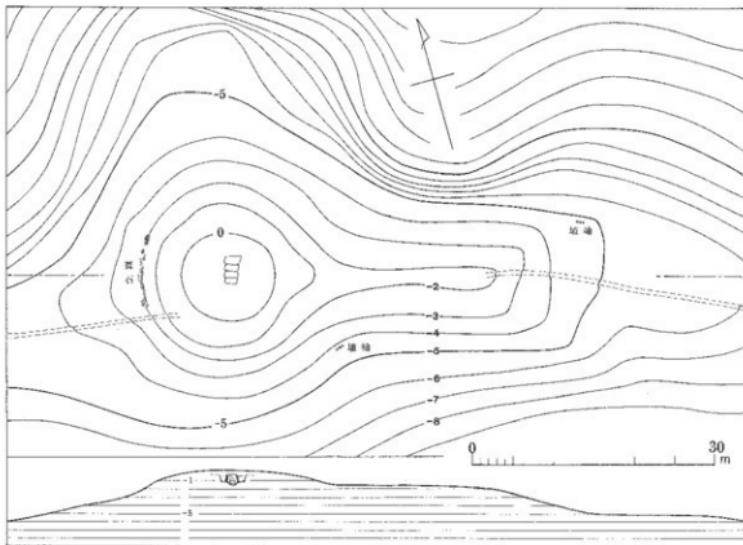
### 1. 墳丘

西方の高地から東の平野に向って、弧状に突き出た尾根の稜線上に並ぶ4基の古墳のうち、第4号古墳はその最先端の下位に位置している。

墳形は東方の海の方に向いた前方後円形である。山上にある古墳の例に漏れず、脊梁の瘤を利用して墳形を整えたものであるが、実際には盛土した部分はさほど多くない。後円部頂下に営まれた主体部のセクションによれば、地山は地表面より、せいぜい40~50cmの深さに現れる。したがって、中央部の石棺を納めた土壤を覆う程度に盛り土されたものと見ることができる。ぐびれ部や前方部はむしろ基盤を多少削って、形を整えたものであろう。

現在、墳丘は後円部頂辺に、松の疎林が残っているが、その他の部分は前方部を含めて開墾されて、甘じょ畑になっているため、多少形は崩されている。しかし、大体の原形を推すことができる。

いま、墳丘の規模を考えてみると、この種の山頂の古墳は墳丘裾縁の界線が明瞭でないのを通例とする。本墳の場合、後円部の後方では、西方の高地へ続く部分が、多少凹んで鞍部をなして



第2図 岩崎山第4号古墳墳丘測量図（昭和26年測）

いるうえ、この裾部をかためた葺石が比較的よく残っているので、大体の縁線をたどることができる。しかしそ他の部分は、それほど明瞭ではない。

ただ、後円部南側は丸い墳形が比較的よく残っており、同じ傾斜面で自然の斜面に続いているので、多少後円部とくびれ部との接合部を削った程度で、地形をそのまま利用していると思われる。

一方、北側では、墳頂より 6 m 下がった辺りから、外方へ張り出している。これは地盤の瘤で、人工的なものではない。したがって墳丘の範囲はその上でとどめるべきで、その高さはちょうど後円部後方の平地面と等しくなる。

また、前方部は、一般的の前方後円墳に見るようなその先端の両側に明瞭な稜線や、正面の直斜面がなく、角が丸みを帯びて、低平である。しかして、前方部の、右くびれ部の近くに、埴輪破片や葺石の一部が遺存しているところがあったので、これを裾縁に近いところと仮定して大体の大きさを推定してみることができる。

以上の諸点を考慮して、その大きさを測ってみると、次のごとくである。

全長	約 60 m
後円部径	33 m
後円部高	5 m (後円部後方との比高)
前方部長	30 m
前方部前端幅	15 m

このうち高さは後円部後方の鞍部からの比高であり、前方部前端の裾部との比高は約 50 cm くらい増すであろう。

以上から見て、本墳は中等位の規模をもつた前方後円墳ということができる。

次に、墳丘の形の上の工夫として、段築、くびれの造り出し、周溝などは全く存在しない。

葺石については既述のごとく、後円部後方の裾部において、比較的原形をとどめた部分が確認されていた。それは盛り土の基底部の斜面に沿って、4、5列に割石を敷いたもので、その幅は約 70~80 cm あり、十数 m 続いている。後円部両側の開墾された部分でも、開墾の際に多数の割石や埴輪を見いだしたと言われており、墳丘の裾部を鉢巻きのように繞っていたことが推測される。この割石の用材は、近くの津田川で採れる花崗岩質のものである。

ただ、この葺石の間に、埴輪円筒片が混じって出土していたが、網まわりに並んでいた円筒列の名残りであろう。しかしいずれも散乱した破片だけで、元の位置を示すものはなく、葺石と埴輪列との関係を確かめることができなかった。

また、前方部においては、北東隅の裾近くに、埴輪の原位置とおぼしき痕跡を認めたが、はっきりしない。前方部正面の松林中には割石が散布しており、その間にも埴輪片が検出され、うちに倉庫の一部らしきものも存した。

しかし最も確実なのは、昭和4年に松浦氏が見いだしたもので、南側のくびれ部の裾縁の近くに、埴輪基底部だけが3個、12cmの間隔をおいて並んでいたという。そのうちの中央の1個は梢円形であったともいわれる。

以上の事実から推測すると、封土の基底に沿って、葺石の帯と埴輪列が存在したことは確かである。

墳丘上面の埴輪列については、現状に何らの痕跡を認めることができない。ところが、大正年間に、長町彰氏が調査した際には、方形の埴輪列があったようである<sup>5)</sup>。ただその説明には、棺の基石の前面に、49個の埴輪を並べて方陣を作っていたとあるが、具体的にどのような配置をしていたかは、この文章からは理解しにくい。ただその埴輪が底のない菱形であったという点は最近、埴輪のプロトタイプとして壺形土器列の存在が各地で注意されている<sup>6)</sup>のと対照して、興味が持たれるのである。

## 2. 内部構造

主体部は後円部の墳頂中央下に掘られた土壙のうちに營まれた石槨と、その内部に安置せられた割竹形石棺である。その方向は墳丘の主軸線と直角に、南北に向いている。

### 土壙

地山は現墳頂下40~50cmの所にあり、土壙は南北5m、東西3.30mの長方形をなし、2段に掘り込まれている。第1段は深さ90cmくらいに掘ったもので、周壁は底に向ってやや傾斜しているので、下底では、幅が2.80mに縮まっている。さらにその中央部に棺身を安置させるためにもう1段掘り下げてある。それは幅1m、深さ中央で35cmくらいの櫛状の溝槽である。

この土壙の南端部は2段にならず、この櫛状の溝の下底の深さのまで、掘り込みが南方へ続いているので、土壙は南方の方へ開いていて、山の斜面まで地山を削り取っていたものと考えられる。このような工作は、石棺や石槨を築くための石材を土壙内に運び込むための通路として、特に工夫せられたものと見なすことができる。

土壙の床面には、粘土が一面に敷いてある。中央の櫛状の溝槽内では、粘土の厚さが15cmあり、その上に石棺身を直接置いてある。さらに、棺身の両側では、突帯のすぐ下辺りに、板石を棺と粘土の間に挿入して、左右への動搖を止めているのが注意される。

### 石槨

土壙の第1段の床面(第2層上)では粘土の厚さは10cm足らずで、周縁に向って薄くなり、その上面を水平にし、その上に砂利を10cmの厚さに敷き、さらにその上に石槨の壁体をなす板石を積んである。すなわち、中央の棺を入れる部分を残して、土壙一杯に板石を並べて壁体を築いているが、その積み方は粗く、整正でない。壁体の高さは約60cmあり、石棺を納める空所は、床面で南北の長さ3.20m、東西1.00mの大きさがあり、上方に向って次第にすぼまっている。今ここに石棺を入れた場合、ほとんど周囲に隙間を残さず、その上口においては棺の最広幅よりも壁面が内方にみ出していることが特に注意せられる。上に天井石を横に架しているが、天井石と

棺蓋頂との間は、中央辺で 15 cm くらい離れていたようである。

#### 天井石

南北に長い石櫛に対して、4 枚の天井石が横に架け渡して並んでいるが、すでに何回かの盗掘にあってるので、石の配列は乱れている。

いま 1 石ずつ現状を見ると、北から第 1 石はやや南にずれて傾いているが、櫛室の北端部をうまく覆っており、しかも側面に当たる詰め石がうまく収まっているので、この石はほぼ現位置のままで、移動していないと思われる。第 2 石は第 3 石の上に半分のしかかり、欠けた空所には、別の野石を当てて塞いでいる。第 3 石と第 4 石はともに北下がりに傾いていて、多少現位置から移動したことが認められ、第 3 石と第 4 石との境目には、

板石の断片を数個当てて塞ぎ、第 4 石の南側にも同じような板石片を当てている。

第 2 石の失われた半分は、墳頂に祀られている岩崎櫻現の小祠の台石として使用されているものである。この石と第 2 石とは、ともに幅が 85 cm、厚さが 22 cm あって相等しく、両者を接合すると長さが 155 cm となって、第 4 石の長さとほぼ一致する。

これらの石はいずれも凝灰岩で、ほぼ長方形に切っているが、形は必ずしも整っていない。いまこれらの各石の寸法を示すと上表のごとくになる。したがって、これらから天井石の被覆していたものとの長さを推定すると、3.5 m 前後はあったと見ることができよう。

#### 櫛上方の覆土

土壇の周辺は同じ高さまで、板石積みの櫛体の上に砂利を詰め、その厚さ約 20 cm、さらにその上方に、厚さ 10 cm ほどの粘土をおいて、覆っている。その粘土の上面はちょうど土壇の上口辺りに達している。この粘土が天井石の上までおよび、主体の全体を覆っていたと思われるが、この部分の覆土が、何回かの盗掘の際に搅乱されてしまっているのははっきりしない。

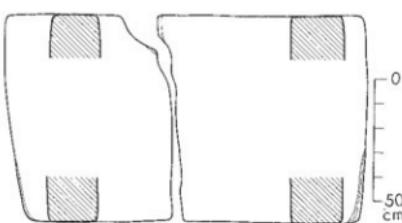
さらに、その上に盛土をしたが、現在は厚さ 50 cm ほどの被覆しかないが、本来はもっと高かつたであろう。

以上の実績から推される石櫛は、床面が棺の床面よりも上方にあり、また、壁面の上は棺の周囲よりも内方に張り出しているなどして、これがいわゆる石棺を納めるためにあらかじめ築かれた石室ではなく、棺の安置後にその上方を被覆するために築かれた覆い、すなわち石櫛であるこ

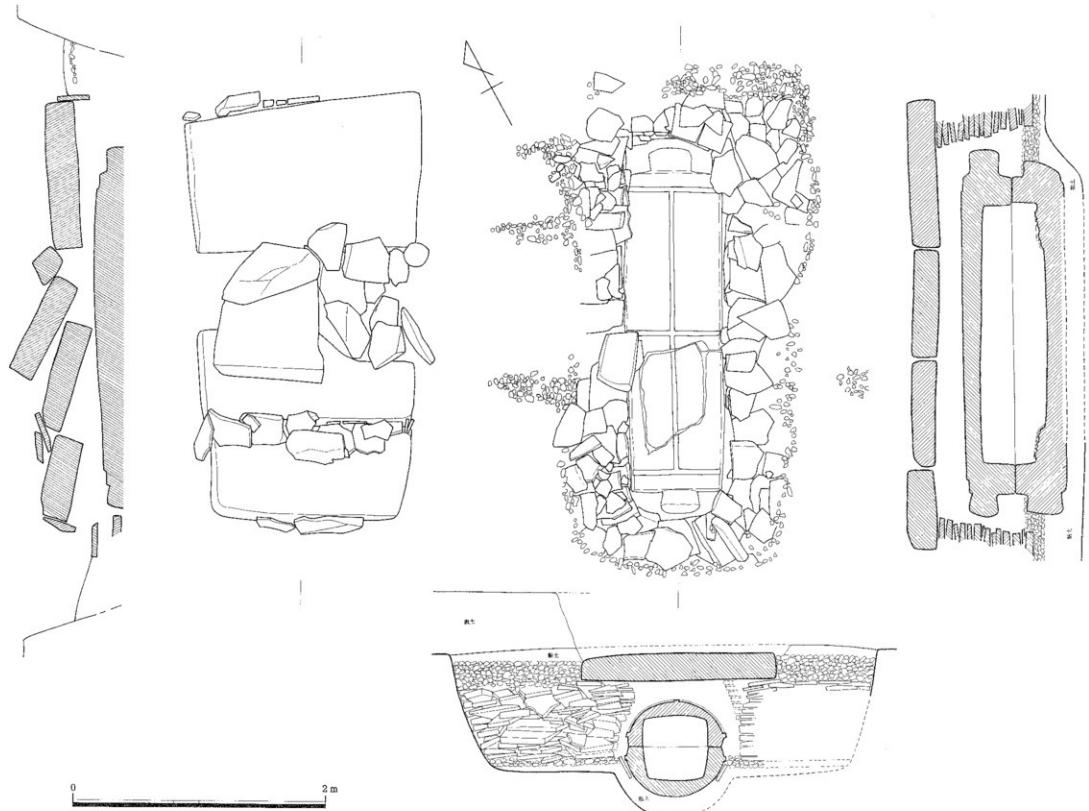
第 1 表 岩崎山第 4 号古墳竪穴式石室天井石計測値

	中央長	中央幅	厚
第 1 石	180	115	24
第 2 石	155	85	22
第 3 石	170	85	20
第 4 石	150	63	23

(単位 cm)



第 3 図 岩崎山第 4 号古墳竪穴式石室蓋石  
第 2 石実測図



第4図 岩崎山第4号古墳竪穴式石室と石棺実測図

とが特にはっきりしている。

なお、郴壁に使用せられた板石は含輝石古銅讃岐岩質安山岩で、この古墳の所在地より、北方約1kmの北山に産するといわれている。

### 石棺

凝灰岩製の、刳抜式剖竹形石棺（以下、石棺とのみ表記する場合は、この形式の石棺をさす。）である。形は比較的よく整い、身・蓋とも前後の両端に大きな繩掛突起を1つずつ造り出している。内面には所々に削った鱗の痕が残っているが、表面はよく磨かれている。

大きさは右表のごとくで南端が少し幅狭くなり、低く据えてある。内面はほぼ長方形に割り込んでいるが、縁厚は、南北の短側が厚く、東西の長側は薄い。

蓋には突起が彫り出している。長軸に沿った中央の頂線と両側に1本ずつの縦線が走り、それと直交する横線は、中央と両端に近い所に1本ずつある。横線はいずれも両側の縦線に接して止まり、中央の縦線は両端の横線に接して止まっているが、両側線は蓋の下から8cmばかり上方にあって、蓋の両端にまで及んでいる。両端の側面には突起はない。

棺身では両側にそれぞれ1本ずつの縦線があるだけで、中心下の縦線と、横線は認められない。

身の内面には、その両端に造り付けの石枕が1個ずつある。すなわち、棺内の両隅は、床面

より1段高くなり、そこに石枕が彫り出されているが、南枕は中心からやや東によりあり、北枕は西よりにあって、2つの遺骸がうまく棺内に納まるように配慮している。この石枕は両者とも相似した形をなし、中央に頭を置くための窪みを彫り、その周縁に馬蹄形の突線を二重に繞らせ、首筋のところはまた溝になって、肩の納まる床面へ続いている。ただ両者の相違点としては、南枕では外側の突起に鋸歯文、内側の突線に刻目を施しているが、北枕では内側の突線に刻目を入れただけで、外側の突線は素面のままである。

この棺材の凝灰岩（紫蘇輝石角閃安山岩）は俗称白粉石と呼ばれるもので、本墳の南東約2.3kmの火山の東側斜面一帯に産するという。

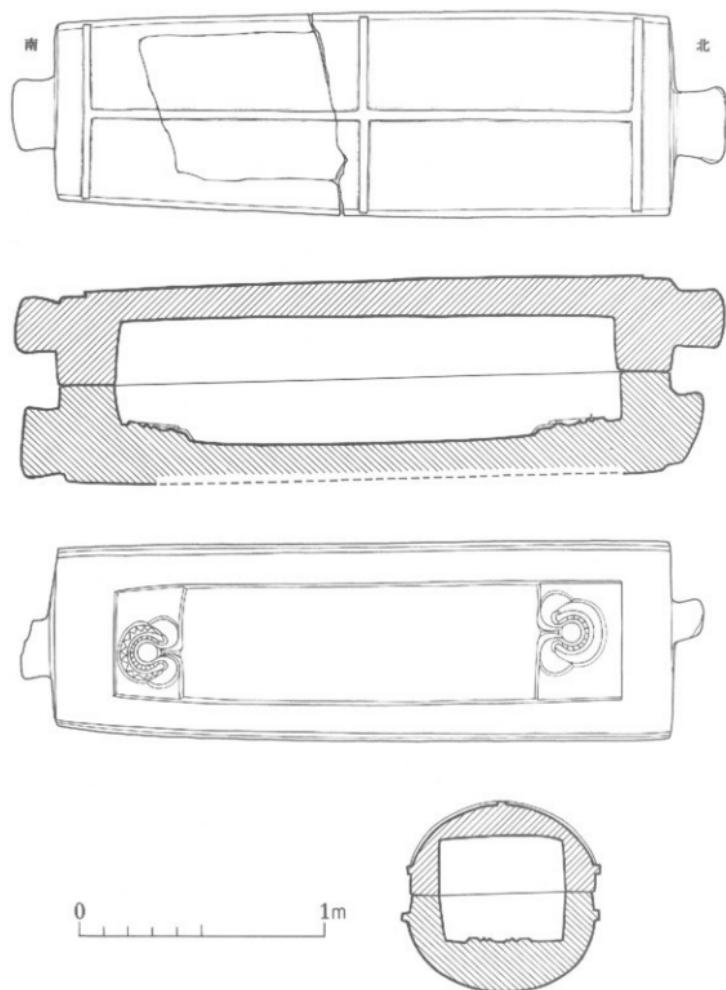
### 3. 埋葬の状態

上述の遺構内に、遺骸並びに副葬品がどのように埋葬せられていたのかという点については、

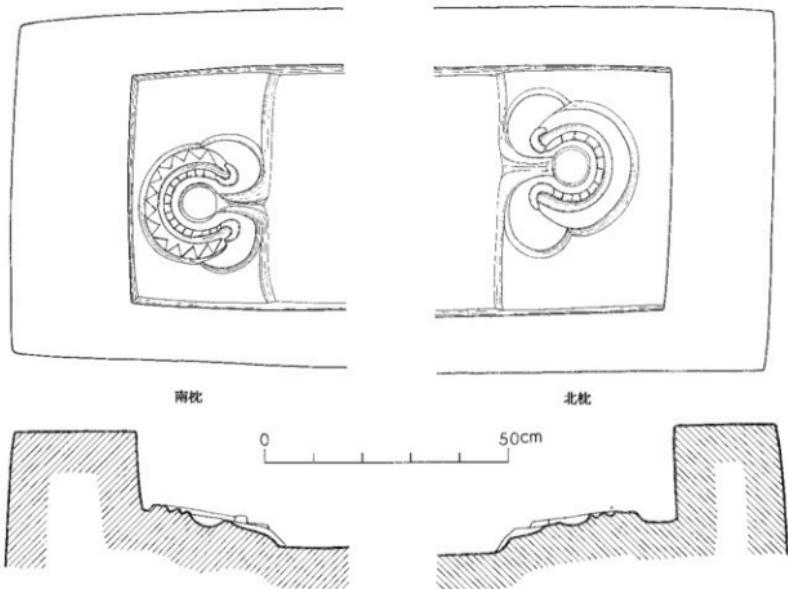
第2表 岩崎山第4号古墳石棺計測値

	棺蓋	棺身
長さ	255	252
幅	北端 82	82
	中央 85	82
	南端 73	72
高さ	北端 40	43
	南端 37	40
縁高	北側 23	21
	南側 25	25
	東側 12	12
	西側 12	12
刳込	長さ 205	206
	幅 北 50	50
		48
深さ	25	25

(単位cm)



第5図 岩崎山第4号古墳石棺実測図



第6図 岩崎山第4号古墳石棺内の造り付け石枕実測図

本墳はすでに数回の盗掘にあっているので、現状だけからは推すことができず、過去の発掘記録を参照して考察しなければならない。

#### 被葬者遺骨

今回われわれが調査したときは、遺骸は頭骨1個が棺底の中央からやや北寄りに転がっているだけであったが、石棺の構造から見れば、棺内の両端に石枕が1個ずつ設けられており、少なくとも2体を埋葬する意図の存在したことが窺われる。

ところが、文化6年の発掘の事を記した『讃岐國名勝図会』には、「棺内には女二人殉死したる姿残りありといへり、初て其傍に壺ありて曲玉を入れふたに漢鏡のわたり一尺計りなるを置り」とあり、「古鏡記」には「其(棺)中ニ一男ニ、両女挟ミテ以テ殉レ之ニ、其ノ側ニ有リ一壺ニ、蓋スルニ以テ此鏡ニ、壺中ニ必ニ有リ曲玉等。」とある。

また『全譜史』には文化十年十六口の発現として、次のような文章がある。

有リ石櫛ニ以テ瓦ニ蓋レ之ヲ、以テ朱ニ充テ其縫ニ、開ケ之則有リ骸三軸ニ、  
一ノ則大ニシテ而北ニシテ首ヲ、二ノ則小ニシテ而南ニシテ首ヲ、  
蓋レ大ナルモノハ則主人ニシテ而小ナルモノハ則愛媛或イハ侍童之殉者也。

これらの記述からすれば、人骨はもと、3体あったらしく、そのうち、北枕の方を主な被葬者と見なしているのは、石棺の北端が南端より大きく、且つ上位にある現状から見ても、一応うなづかれるところである。

昭和2年の調査の際には、北枕の辺に頭蓋骨と、他に肢骨らしきものが2、3本あったとあるので、このときにはすでに2体が失われていたことになる。

#### 棺内の副葬

昭和2年の発掘の際に、棺内の東北隅に石剣、車輪石、貝剣、管玉、小玉などがあったといわれている。その時すべての遺物を取り出したとみて、今次の発掘にあたっては、棺内には先の人の頭骨以外には何らの遺物も残っていないかった。ただ石櫛の石積み上面にあった朱に染まった土砂の中から、勾玉2個、管玉・小玉若干、石剣片2個を採集したが、これらは前回棺内から取り出されて、遺棄されたものとみることができる。

文化6年に出土した遺物について、上述の記録には人骨の傍らに1個の壺があり、その上に鏡が蓋としておかれ、中に勾玉が入っていたとあるが、その状態は、棺内副葬品の通例からみれば、はなはだ特殊である。もしこれが当時の事実を示しているとすれば、文化6年以前にも発掘がなされて、その時に出土の遺物を再埋葬して、置き換えたとしても考えるほかには、判断のしようがないようである。今回の調査に当たって、後述のごとく、別の鏡が棺外の南側に置かれており、反対の北側の空所には、一物の残っていないかった事実と照合すれば、文化6年出土の鏡は、原初には、棺外北側に置かれていたと考えることも可能である。もっとも棺内に鏡が置かれることは、多くの例があるので、この場合いはずれとも断定しかねる。

棺内に朱があったことは、これまでの調査にもたびたび報告されており、昭和2年に発掘された松浦氏の証言でも厚さ1cmばかりに堆積していたといい、われわれもその痕跡を認めることができた。しかも、棺内だけでなく棺の外面にも朱が塗られていたようである。

#### 棺外の副葬

従来の調査では、棺外にも副葬品の存する事が知られなかったためか、この点に関して全く報告がない。昭和2年に発掘された松浦氏も当時、棺外は調べなかったといっておられるので、今回のわれわれの調査によって、初めて明らかになったとみることができる。

すなわち、棺外の遺物は棺身と櫛壁との空所にあり、棺身の上口から15cmばかり低い砂利敷きの上面に置かれている。まず南側では、棺身の繩掛突起が砂利層にほとんど埋まっている、その上に鏡(M1)が鉢を上に置かれ、その下に鉄劍1振が切先を西に向けてあった。鏡の横の劍の上には埴輪小片がのっていたが、これは後世に陥入したものと考えられる。また、棺の南縁西隅に接して、鉄鑿1本(T4)が出土した。

次に東側では、棺の北側に接して直刀1振(W1)と鉄槍身1本(W9)が平行に並び、その上に鉄鎌3個(Q1、Q2、Q3)、刀子(V3)、短冊形斧(T1)各1個などがあり、直刀の南には石剣(D1)の破片が1個だけ落ちていた。棺の南端部に接しても、鉄劍2振(W2、W4)、鉄槍身1本(W10)と銅鎌3本(Z1、Z2、Z3)、鉄鎌1本(Z6)があった。

棺の西側では、北端に接して大・小の鉄剣2本(W3、W6)が並び、南端には同じく大小の鉄剣1本(W7)、鉄槍身1本(W8)と、鉄斧頭2個(T2、T3)、刀子2本(V1、V2)、鉈などがあり、中央辺に銅鑓2本(Z4、Z5)、鉄鑓1本(Z7)があった。

北側には、いま1片の遺物も見当たらない。しかし、他の3側面にはいずれも副葬品が置かれている事実から推すと、ここに遺物が最初からなかったと断定することはできない。

以上の副葬状態のうち、棺の外側四隅に大小2振ずつの鉄剣を置き、しかもいずれもが、切先を互いに違えている点が特に注意されるようである。

#### 4. 遺物概説

数度にわたる発掘の度に、一部ずつ副葬品が取り出され、その内のあるものは破棄されたりしたため、遺物の正確な実数を推す事はできないが、幸いにもそれぞれの記録がある、大体の様子を窺うことは可能である。いまこれまでの出土品を表示すれば、別表のようになる。

このうち文化6年の出土品のうち、鏡は図面があって、よくその実態を理解することができる

第3表 岩崎山第4号古墳出土遺物品目

出土年次		文化6年	明治6年	昭和2年	昭和26年		計
出土場所		棺 内			棺外	その他	
品 目							
1. 装身具 鏡		1			1		2
勾玉	あり		1			2	3以上
管玉			22			14	36
小玉			31	8		若干	39以上
石釧			4			破片1	5
貝釧			{ 完形4 破片4~5 }				約10
2. 武器 刀					1		1
剣					6		6
槍					3		3
刀子					3		3
鉄鑓					2		2
銅鑓					5		5
有柄有孔鉄板					3		3
3. 農工具 鎌					3		3
斧頭					3		3
鑿					1		1
錐					1		1
鉈					十数本		十数本
4. その他 壺	1					◎	
	埴輪片						

が、それが蓋をなしていたという壺と、その中に入っていた勾玉については、はっきりしない。この出土状態の疑わしい事は既述の通りである。明治6年出土の石鉢については、石棺図の下に挿図があり、よくその実態を伝えている。

昭和2年の出土品は、一部が海中に失われなどしたが、他の大部分は現在、東京国立博物館に保管されている。したがって、今回の出土品と合わせてこれらも解説しておこう。

### 1. 装身具

#### 斜縁二神四獸鏡（M 1） 径 17.8 cm

縁は三角縁ほど著しくないが、割り形に立ち上がっており、それに続く厚い外区には二重の鋸歯文帯の間に複線波文帯を置く。1段低い内区には最外周の櫛目文帯の次に銘帯があり、時計まわりに次の銘文がある。

吾作明竟、幽凜三商、競徳序道、配象萬彌、曾年益寿、宣子

主文帯には、6個の乳を等間隔に配し、その間に半肉刻で表現した二神四獸を対置せしめている。神像はともに脇侍1人を伴い、七三に正面を向いた座像であるが、冠が1人の三山形、他のは双角形をなしている。獸形は2匹が乳を挟んで向い合っておかれ、それぞれの首の表現が違っている。中心の円錐のまわりには有節重弧文帯がある。表面の半分は緑銹に覆われているが、白銅質の精良な作りである。

この鏡は大きさや、鏡体の断面、図文の配置、銘式などからみて、いわゆる小型二神二獸鏡の類に属するが、主文様が一般には四乳の間に二神二獸を配しているのに対し、本鏡のごとく、6乳の間に二神四獸を配するものを異例と見なすことができよう。宮内庁の所蔵する藤井寺陵墓参考地出土鏡（宮内庁72）と同型か。

#### 重層式四神四獸鏡（M 2）

文化6年に出土したものにして、実物は現存しないが、「讃岐國名勝図会」に背文の図をのせ、銘を解説している。それによると径5寸8分、内外両区に分れ、外区は鋸歯文帯があり、内区は錐の周囲に有節重弧文帯、主区は四乳によって四分され、各乳には、それを繞る蟠螭を配している。すなわち中央上段には座像の神人と、その上方に飛翔せる2神仙を配し、左右には七三に内方を向いた神像各1を置き、中央下には正面向きの正座の神像がある。四字句の銘文は時計まわりに置かれている。

吾作明竟、幽凜三商、統徳序道、配象萬彌、曾年益寿、子孫昌、楽未央

この鏡は一見特殊なものに見えるが、図の割り付け、銘式、鏡体、大きさなどから推して、今回出土の鏡とともに、小型二神二獸鏡の類にもっとも近い。ただ主文が半肉刻の神獸像ではあるけれども、その図形や配置は三角縁神獸鏡のあるものと共通したところがあり、両鏡式の混合形とも考えられる。

#### 勾玉 2個

ともに棺外に持ち出された朱を含む土塊内から検出された。滴るごとき翠緑色を呈した半透明の良質の硬玉製である。J1は朱が有機質に混じって、表面に着色しているが、J2は美しく磨かれた面をよく残している。弧状に曲がった胸部の形は両者ともよく似ているが、J1の頭部がやや扁平であるのに対し、J2のそれは厚く、3本の刻線がある、いわゆる丁子頭をなしている。孔は内面まで同じ大きさで貫通しているが、J2の孔の両縁辺はやや摩滅している。

第4表 岩崎山第4号古墳出土勾玉計測値

	J1	J2
全長	18.5	17
厚	5	5.5

(単位cm)

この他に文化6年と昭和2年にも勾玉が出土しているが、現存しない。

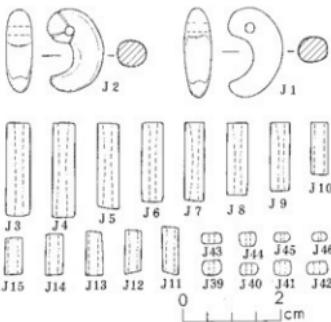
#### 管玉 36個

昭和2年発掘の際に出土した22個(J17~J38)と、今次採集した14個(J3~J16)、合わせて36個がある。今次のものは、勾玉とともに遺棄せら

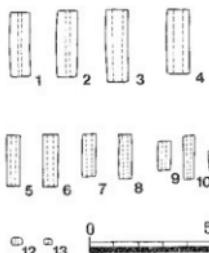
第5表 岩崎山第4号古墳出土管玉計測値

	径	長	昭和2年出土	昭和26年出土
第1類	10~9	30~26	4個 (J17~20)	
第2類	6	20~18	4個 (J21~24)	
第3類	4.8	17~10	8個	7個
第4類	3.5	10~7	6個	7個

(単位mm)



第8図 岩崎山第4号古墳出土玉類  
(昭和26年)



第9図 岩崎山第4号古墳出土玉類  
(東博収藏品)

れた朱を混えた土塊中から検出したものである。いずれも青緑色の碧玉製で、面はよく磨かれて滑澤であるうえ、手なれしている。一部には有機質を伴った朱が付着していること、勾玉の場合と共にしており、埋葬遺体に直接佩用されていたと認められるものである。その径の大小によって、これを4類に分かつことができる。

孔は一般に大きく、両方の向きより穿ち、あるものにはその一端を穿孔後、さらに抉った痕が見られる。

昭和2年出土品は大形が多く、今回のものは小型に限られているのは、後者が遺棄せられたものだからであろう。

#### 小玉 39個

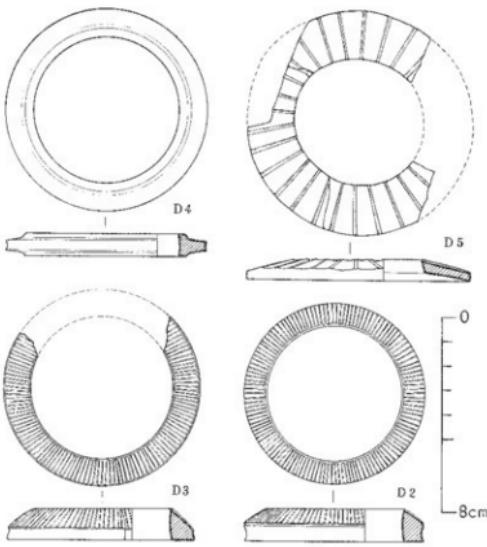
東京国立博物館収蔵の31個と、今次出土の8個を合わせて、全部で39個ある。全て淡青色を呈したガラス製で、表面には同じく水銀朱と粘土が付着している。径は4mm内外、厚さは3mmから1.5mmのものが色々ある。

#### 石鉤 5個

今回出土の1個体分(3片)のほかに、東京国立博物館に収蔵のもの4個がある。

D1:3片を接合すると、1個体の3分の2を存している。うち2片は内部より掘り上げた土塊のうちより採集され、他の1片は

棺外東側に残存していた。環体は身幅が狭く厚式で、外径7.2cm、身幅0.8cm、厚さ1.3cm、灰緑のあまり質の良くない碧玉製で、風化の程度は比較的少ないが、表面はあまり磨かれていない。一部には有機質を伴った水銀朱が付着している点から見ると、もと棺内にあったことが確



第10図 岩崎山第4号古墳出土  
土石鉤(昭和26年)

第11図 岩崎山第4号古墳出土石鉤(東博収蔵品)

実視される。上半の斜面に密に刻まれた条線は、やや摩滅しているようである。外側の垂直面は中央の突帯1本を挟んで、その上下両面は削られて匙面をなし、内側面と底部は素面のままである。

D2(東博20135)：D1とほぼ同形、同大の完形品である。外径7.4cm、身幅0.9cm、高さ1.5cm。

D3(東博20136)：破片2個で、合わせれば器形の3分の2を存している。同じ型式のものであるが、やや大きい。上半斜面の条線は細密な刻みで、作りが丁寧である。外径7.8cm、身幅1cm、高さ1.36cm。

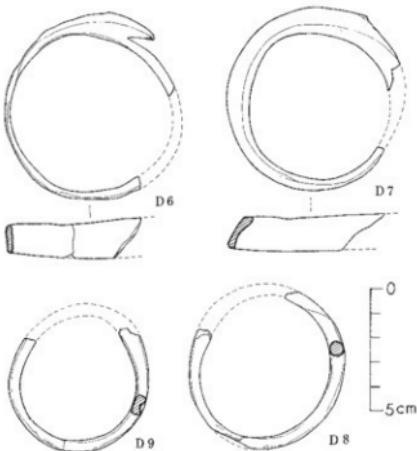
D4(東博20134)：碧玉製であるが、一般の石鉈とは少し型式を異にする。すなわち、低い筒状正円形の環体の外側中央に鈎状の突帯を繞らせた式で、石鉈に通有の条線もない素文である。全面に極めて鮮やかな水銀朱が付着し、一部に有機質のものもついている。外径8.3cm、身幅1.1cm、高さ1cm、突帯幅0.6cm、厚さ0.45cm、内側はわずかに内湾している。先の3例が、貝輪を原形とした式であるのに対し、これは中国の玉環中に原形を求められるものようである。発掘者松浦氏から聞いたところでは、本器の周囲に、小玉が接続された状態で見出されたという。

D5(東博20137)：県の報告書に、石棺の東北隅にあったと記しているもので、朱と粘土とが付着し、出土のままの状況を残している。現在の破片3個を接合すると、全体の約4分の3を存していることが知られる。黒みがかった碧玉製である。身幅が広く、薄手で、表面の条線の間隔がまばらであるのは、一般に車輪石といわれるものの範疇に入るといえる。ただ車輪石のティピカルなものは形が卵形をなすが、これは正円形である。車輪石という名称はもともとその形の類似から来たもので、実は石鉈であることはいうまでもない。

表の斜面に放射状に配した条線は単線で、現存23本を数えるが、欠損部を推定すると、全部で27、8本あったことになる。条線と条線との間は匙面に抉ってある。表面は中央の内縁が高く、外縁が低くなるが、素面のままの裏面は内縁に向って削ってあるので、外・内両側の厚みの差はそれほど著しくない。内縁の径は表面側が裏面側に比べてやや小さい。外径9.3cm、内径表面部で5.2cm、環幅は2.1cm、環厚は内側で0.6cm、外側で0.4cmである。

#### 貝輪

県の報告書には、石棺の東北隅にあり、完全なるもの3、破片一括と記している。いま東京国立博物館の収蔵品(東博20140~20142)を見ると、全形の3分の2以上を残しているものが4個あり、その他の中破片は4、5個分になるので、もと10



第12図 岩崎山第4号古墳出土貝輪(東博収蔵品)

個近くあったと推定できる。いずれもイモガイ？を輪切りにした正円形に近いものであるが、ほぼ形の見られるものは2個(D6、D7)があり、外径7.5cm、内径6cm、体幅1.5cm位で、環体の断面は偏長方形となる。うち1つ(D6)は、巻貝の外端が残っている。他の破片中にも同じ類が1つある。環体の幅が小さい類も、また2個ある。D8が外径6.5cm、身の断面が円形を呈するのに対し、D9は、外径5.8cm、断面は外側の凹んだ隅丸長方形をなしている。

## 2. 武器

### 鉄刀 1本

W1：全体錆化が著しいために、細部の作りは不明だが、比較的厚みのある平造りの直刀である。刃は多少内反りの傾向が認められ、鋒はふくらのついた式である。刃身の全面に木質が接着しているので、鞘に収めて埋置したと思われる。茎は太く、厚く、関から5.6cmのところに目釘穴らしき痕跡を認めるが、はっきりしない。茎にも木質が付着しているが、金属製の柄えはない。

### 鉄剣 6本

うち2本は長剣、4本は短剣である。

W2：長大な剣である。身の全体に木鞘の痕を残している。茎は、関の部分で両幅を半減し、同じ幅で茎尻まで続く平直な造りである。把木の痕跡があり、目釘穴は錆のため不明である。

W3：前者と同じ造りの剣であるが、やや短く、身幅も関の辺りは広いが鋒に向って多少狭くなっている。茎部の把木の痕跡はよく残っているのに対し、刃身部に木質の付着痕が乏しいのは、木鞘に収めなかつたためかと思われる。関から刃身の方へ2.5cmにかけて木質がよく残り、その端が直ちに切れているのは、把木がここまで覆っていたと解すべきであろうか。

W4：細身の短剣である。鎧があって、身の断面は扁菱形をなし、茎は細く、それに木質がよく残り、関部で直線状に切られた把木の状態が見られる。身部には木質がわずかに接着するだけで、木鞘の痕跡があるのは別の木質が付着したかはっきりしない。目釘穴も不明である。

W5：同じく細身の短剣であるが、茎はやや幅広い。いま茎尻を欠損している。全面に木質が付着し、木鞘と把木を装着していたことがよくわかる。目釘穴は関から3.5cmのところに1つあるようである。

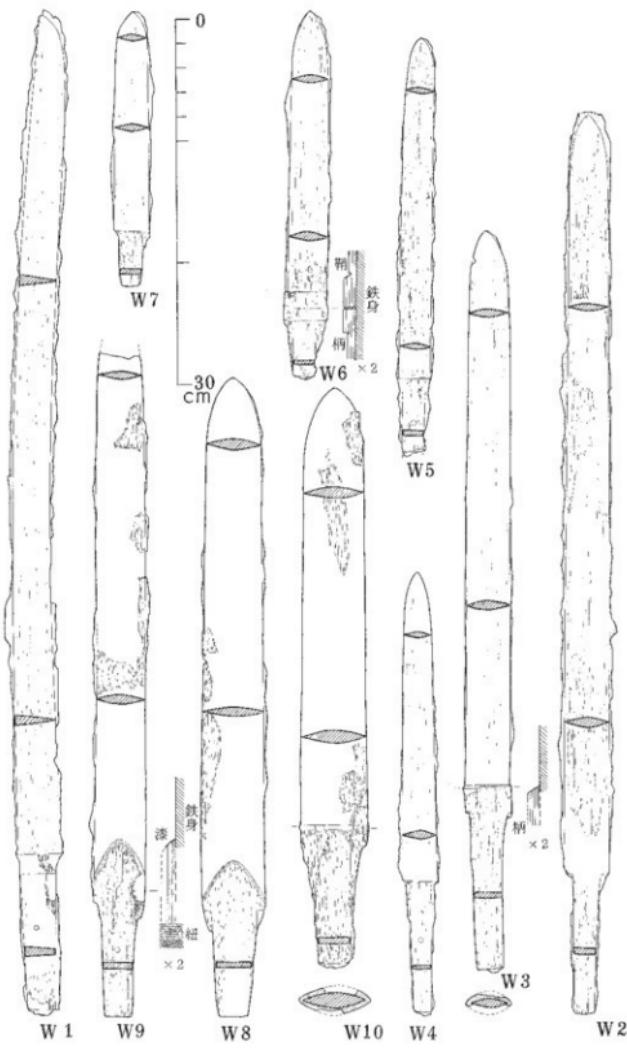
W6：太身の短剣である。茎も幅広く、短い。全面に木質が付着しており、木鞘と把木の境は、直線をなしている。

W7：同式の短剣である。木質痕は茎部によく残り、身部は僅少である。茎は短く、目釘穴もはつきりしない。

### 鉄槍身 3口

W8：太型剣に近い形をなし、長大である。身の断面は扁菱形、木鞘の痕を付着している。茎は短く、関から刃身の方向に向って舌状に延びた把木の先端の形が特徴的で、両面とも同じである。

W9：鋒を欠いているが、同じ造りで、やや細長い。木鞘の痕もあるが、把木の関部の柄えが比較的よく残っている。すなわち刃身へ向って舌状に延びた把木の先端は、縁を斜めに削って面を



第13図 岩崎山第4号古墳出土鉄製武器類

取り、表面に漆を塗っており、特に関部の辺りでは、木質の上に太さ1mmの捩りのある麻糸を密に巻き、その上に漆を塗っている。

W 10：太身の劍形をしている。身に木鞘痕を有する。茎は両関式で、把木は関部より身の方へ約1.7cmばかりかぶさっており、端は直線的で、舌状をなさず、突帶1本を縁に付けている。表面には漆膜がある。目釘穴は茎尻から7.5cmのところに一穴ある。

この種の槍身は劍形をしているが、これを槍身と断定したのは小林行雄氏で、福岡県糸島郡鋤子塚古墳出土品中に類例があり、しかも比較的長く木柄を残していたものでは、その断面が円形をなすところから、槍と判断されたものである。

第6表 岩崎山第4号古墳出土鉄刀・鉄劍・鉄槍計測値

	全長	身			茎	
		身長	幅	厚	長	幅
鉄刀 W1	84	71	3.6	1.3	13	3.1
剣 W2	74	62.5	4.0		11.5	2.0
W3	61	48	3.9			
W4	36.5	25.5	3.0		11	1.7
W5	△34.5	28	2.9		△6.5	2.0
W6	30	25.5	3.7		4.5	2.0
W7	22.7	18.3	3.2		4.4	1.8
槍 W8	52.3	43	4.7		8.0	3.0
W9	△54	△44.5	4.3		9.5	2.5
W10	45	35	5.3		10.0	3

(単位cm)

#### 鉄刀子 3本

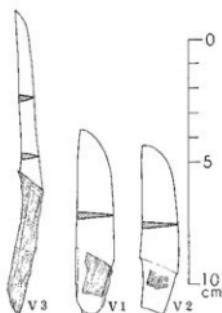
2本(V1、V2)は同じ型式である。ともに短身、幅広の式で、身は片関式、平棟、平造りである。茎も短く、太く、一部に木片が付着している。関は身に対して斜めになっている。

V3は異形で、細長い身に、細長い柄がつく。刃身は基部から先端に向って次第に幅を狭め、尖っている。柄は刃身に対して背側に折れて斜めにつき、関部は背と刃との位置がずれている。柄に

第7表 岩崎山第4号古墳出土鉄刀子計測値

	全長	身長	身幅	背厚
V1	7.5	5	1.5	0.5
V2	7	4.7	1.5	0.5
V3	12.5	6.5	0.7	0.25

(単位cm)



第14図 岩崎山第4号古墳出土鉄刀子

は木質が残っていて、茎の構造は不明である。

#### 銅鑑 5本

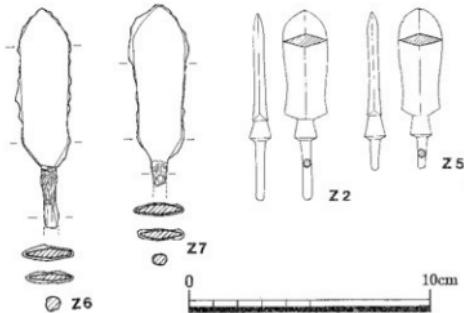
全て同じ造りの柳葉範被式である。

身は割合に扁平にして、中央に鏽があり、面は綠銹化している。茎は断面円形、1本 (Z 5) だけが短く、他の4本は同大である。

茎に柄（籠）の装着した名残の明白なものは1つもない。出土の位置と合わせ考えると、柄をつけないで埋葬したかと考えられる。

#### 鉄鑑 2本

同じ柳葉形であるが、身も茎も長い。範被はなかったようである。Z 6、Z 7ともに茎が欠損しているが、籠の木質の上に、さらに糸巻きの痕跡が付着している。



第15図 岩崎山第4号古墳出土鐵鑑 (Z 6・Z 7)・銅鑑 (Z 2・Z 5)

第8表 岩崎山第4号古墳出土銅鑑・鐵鑑計測値

		全長	身		範被		茎	
			長	厚	長	径	長	径
銅 鑑	Z 1	7.7	4.5	0.4	0.9		2.3	0.55
	2	7.7	4.5	0.4	0.8	1.0	2.4	0.5
	4	7.6	4.4	0.5	0.9		2.3	
鐵 鑑	3	7.6	4.4	0.4	0.85		2.3	
	5	6.5	4.4	0.5	0.8	0.9	1.3	0.5
鐵 鑑	Z 6	9.0	6.5	0.6			現 2.5	
	7	7.5	6.6	0.6			現 0.9	0.6

(単位 cm)

#### 有柄有孔鉄板 3個

破片が3個ある。用途不明で、形態的には儀仗的な武器形品の可能性もある。

T 6：幅2.5 cm、現存長4.5 cm、厚さ0.25 cmの長方形の鉄板に、T 10の棒柄が接着している。銹のため細部は明らかではないが、柄と反対の上辺は突湾しており、刃のように薄くなっているが、刃かどうかは不明。長方鉄板四隅近くに小孔が1つずつ開いている。木質の付着は認められないが、両面に布の付着痕があり、特に片面と刃部が顕著である。柄部は末端が欠けているが、現存長約16 cmあり、基部は断面方形、末端は円形となる。木質は付着していない。

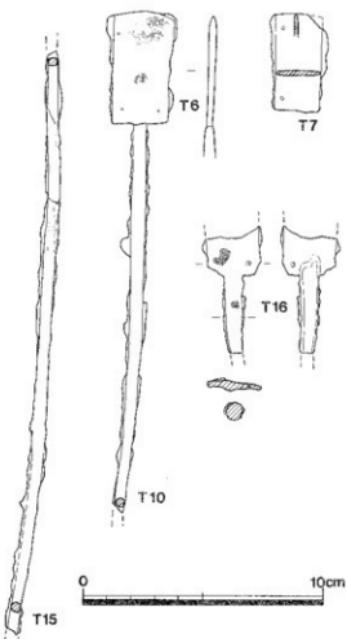
T 7：長方形の部分だけが残る。下幅1.9 cm、現存長4 cm、厚さ0.2 cmで、上縁は少し幅広く扇

形となるが、上縁の一隅が欠けている。小孔が下縁の両側と上縁の一側に見られるが、もとは四隅にあったようである。すると、上縁を刃とすることに疑問が湧く。下縁の中央には柄のついた痕がある。

T 16：長方板の下部と柄の一部が残っている。同じ造りで、下縁の隅に小孔があり、一面には布の付着が見られる。

T 10 : T 6 の柄である。現長 15.9 cm で、鉄板に接着する部分は幅 0.6 cm、厚さ 0.3 cm の断面方形をなすが、すぐに径 0.5 cm ほどの円棒となり、末端に向って次第に細くなる。

T 15 : 棒状品であるが、一端が欠け、現長 21.5 cm ある。全体に断面は円形で、末端も尖っていない。木質が付着していない点も同じである。これも有柄有孔鉄板の柄であろう。



第 16 図 岩崎山第 4 号古墳出土有柄有孔鉄板

### 3. 農工具

#### 鎌 3 個

一部末端が欠けているが、ほぼ完形で、ともに同型式である。小型で身長が短く、直刃で、柄が直角につくのを特徴としている。長方形の鉄板の長の 1 辺を刃、他を背とし、短側の一端を軽く折り曲げて身に直角についた柄を固定させた式である。身の先端は平直で、幅は基部から先端に向って次第に狭まる。柄は身の両面に幅 1.5 cm の間に木質が付着しているので、両面から鉄身を挟んだようである。ただ、Q 2 では木質の付着が背部に沿ってさらに 1.3 cm ばかり延びていて、

第 9 表 岩崎山第 4 号古墳出土鉄鎌計測値

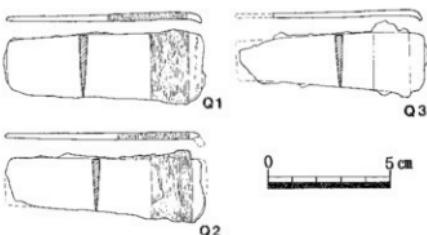
	全 長	基 幅	先 幅	背 厚
Q 1	8.2	2.9	2.0	0.3
Q 2	8.3	2.6	2.0	0.25
Q 3	7.7	2.5	1.7	0.2

(単位 cm)

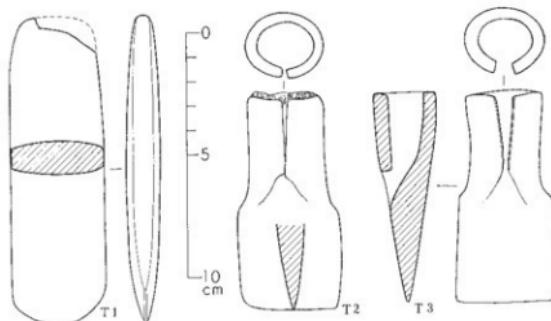
木柄の鉄身への接着面は鍵形をなして  
いたのかも知れない。

#### 鉄斧頭 1個

石斧に似た器で、長方形の鉄板の一  
端は蛤形刃をなし、反対の背部は一部  
欠けているが、隅丸で幅がわずかに狭  
い。中央部は幅がもっとも広く、中心  
線に沿って膨らんでいる。両側は直に  
面取があって、鼓脣形をなしている。



第17図 岩崎山第4号古墳出土鐵鎌



第18図 岩崎山第4号古墳出土鐵斧頭類

第10表 岩崎山第4号古墳出土鐵手斧計測値

	全長	刃 部		袋 部		
		長	幅	長	幅	厚
T 2	8.7	4.4	4	4.3	3	2.7
T 3	9	4.3	4.2	5	3	2.7

(単位 cm)

長さ 12.5 cm、幅 4 cm、厚さ 1.4 cm ある。いわゆる短冊形鉄斧に似ているが、中央が膨らみ隅丸である点が異なる。

#### 鉄手斧 2個

袋部は鉄板の両側を折り曲げて合わせた造りであるが、有肩式の刃部は刃幅よりも長さがわずかに長い。一器には袋部内に木柄の一部が接着して残っている。

#### 鉄鑿 1本

T 4：長さ 11 cm、幅 1 cm、厚さ 0.5 cm の長方形鉄棒の一端に両刃をつけた式で、基部は幅が少

し広くなる。いま茎部は残存長 1.5 cm あり、末端は欠損していて本来の長さははっきりしないが、木質に覆われている。

#### 鉄錐 1本

T 5：折損しているが、現長 9.5 cm、厚さ 0.5 cm の断面方形の錐である。一面には木質が付着し、先端部には布痕が認められるが、木質には木目が鉄身に対して斜めに走っているので、この錐に付属するものとは思われない。また布はこの木質の上に被っているので、この錐と、他の木柄のついた器物を合せ包んだものようである。

#### 鉄刀子様品

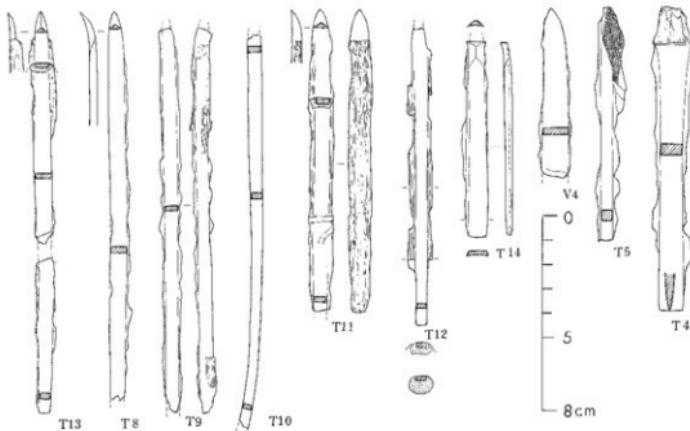
V 4：刀子の折れ片であろうか。現存長 6.8 cm、幅 1 cm、厚さ 0.3 cm あり、細身であるが、V 3 よりも幅広い。銹のため細部の造りは不明であるが、中央辺りの側面に布の付着しているのが認められる。

#### 鉄鎌

破片もあるが、接合すると 7、8 本あったようである。

T 8：茎端が欠けているが、ほぼ完存している。幅 0.7 cm、厚さ 0.2 cm の長方形の鉄棒の一端を両側から削って刃部を造り、やや上反りに仕上げられている。刃と茎との境がなく、したがって、刃部は細長く、刃部の裏面が透かれていないので、断面は三角形を呈している。茎部に木柄や布巻きの痕跡は認められない。現存長 16 cm。

T 9：刃の先端と茎の末端が欠けているが、ほぼ現長に近いと思われる。刃は T 8 と同じ造りであるが、茎部には木質が付着しており、それは裏および側面にのみ残り、上面には認められない。



第19図 岩崎山第4号古墳出土鉄製工具類

ので、木柄の上面の溝に長方形の茎をはめ込んだ式と思われる。現存長15.8cm、茎幅0.6cm、厚さ0.2cm。

T 11：やや刃幅が広いが、T 8と同じ造りのようである。刃部の断面三角形、上反りがある、基部は木質がよく残り、やはり上面ではなく、裏面と両側のみを包んだもので、さらにその上に布を巻いたらしく、その一部が付着している。茎の末端は欠けているが、そこから4cm辺りのところに、細い鉄鎧のようなものが癒着している。これは別の器物に属するものであろうか。現存長12.3cm、茎幅0.6cm、厚さ0.25cm、木柄の幅1cmである。

T 12：茎端は残っているが、刃部が欠けている。現存長12cm、幅0.5cm、厚さ0.2cmの茎は断面円形の木柄の上面に抉られた溝にはめ込まれ、その上をさらに布で巻いている。木柄は茎身の全体を被ってなく、茎端から2.7cmのところで終わっており、また刃部に近いところに始まる木柄の上端も残っているので、木柄の長さは8.5cmの間を包んでいたことがわかる。木柄の幅1cm、厚さ0.8cm。

T 13：茎の中間が一部欠けているが、刃部と茎端が残っている。全長16.5cm、刃部長1.1cm、断面三角形で、表に鎧があり、裏面に透きがなく、刃先の反りはあまり著しくない。茎は幅0.7cm、厚さ0.2cmで、木質は裏面と両側に付着しており、同じ造りであったことを推察しめる。

T 14：刃部端を欠くが、他例より幅広の小型品である。現存長8.1cm、幅0.8cm、厚さ0.15cmで、刃部は丸く凹んだ裏透きをもち、茎部も断面長方形の造りとはやや異なり、下面全体が少し凹んだ上面中高の造りとなっている。

#### 4. その他

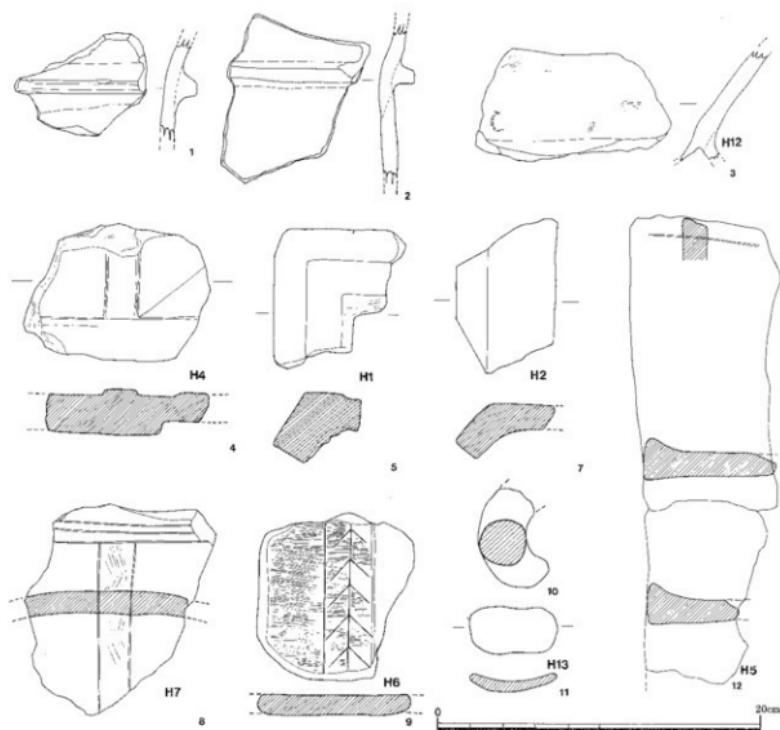
##### 埴輪

埴輪列の存在したことは、すでに松浦氏の発掘の際にくびれ部南側において、3個の円筒の基部が原位置に埋まっていたのを確かめ（県報告書参照）ていたが、それによると、円筒は径30cm大のもので、うち1つは横円形をなしており、円筒の間隔は12cmあったという。今回の調査では、原位置の知られるものは検出されなかったが、墳丘上に散乱している破片を採集した。それによると、円筒のほかに形象埴輪として、家形の存在したことは明らかで、床H1や屋根勝尾木らしき破片が認められる。鎧かと思われるものもある。また勾玉様に曲った破片は人物埴輪の一部（腕）のようである。いずれも赤褐色混砂層である。H6は平板状で綾形文があり、表面に朱彩痕が認められる。

##### 陶餅

H 13：石棺身南縁掛突起の下より出土した。

黄褐色の泥質陶製（細泥質）で、中央部が多少くびれた長楕円形をなし、全体が弧状に曲り、表は膨らみ裏面は凹んでいて、もと、別の体に接着していたおもむきである。一見人物埴輪の頭についていた結髪のように思われるが明らかでない。



第20図 岩崎山第4号古墳出土埴輪類

## 第3章 岩崎山第1号古墳

### 1. はじめに

第1号古墳は岩崎山古墳群4基のうち最高所にあり、昭和2年4月26日に笠井咲一氏が一部露出していった蓋石を動かして、偶然石棺の存在を知り、翌27日と5月3日に発掘して、遺物を採集した。われわれの第4号古墳調査に際して、本墳の石棺を再発掘し、その構造を調べたので、ここに説明しておこう。

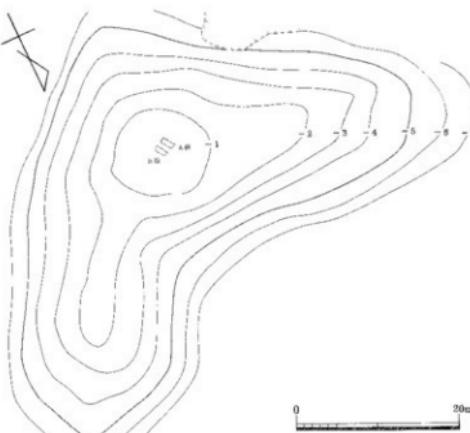
### 2. 墳丘

尾根の瘤を利用して築いたもので、頂上の径10mばかりが平坦面をなし、はげ山になっているが、その周辺には小松が繁茂している。頂上から北東方に尾根の稜線が延びて、20mばかり細長い平坦面があり、その基部がくびれているので、一見前方後円墳かと思われるが、北西方にも尾根の分岐が延びて、そこにも13~14mばかりの平坦部があり、ここも後円部の側面から区画する何らの工作がなされていない。これら2つの尾根平坦部では、葺石や埴輪の存在も全く知られてないので、墳頂だけの円墳と見なしたほうがよさそうである。

墳丘の基底は丘陵上に営まれた古墳の通例として、山野斜面との区別が付けにくく、特に東と西の斜面は直線的で、それが墳丘の南側で直交しているので一見、方墳のようでもある。しかし、眞の墳丘はここまで下がらず、北東方と北西方の両平坦面に接する線で取れば、墳頂から1.5m下がった等高線で分れる範囲にあり、径は約15m位となる。

### 3. 内部主体

墳丘内には、2基の箱式棺が相平行しておかれている。両者の間隔は65cmあり<sup>7)</sup>、ともに主軸を北北西方に向けている。棺の外周囲は粘土をあてて固めてあるが、両棺は当初から併置するご



第21図 岩崎山第1号古墳墳丘測量図（昭和26年測）

とく計画されたらしく、地山に大きな土壙を掘って、その中に両棺を安置し、空所を全て粘土によって詰めたものであろう。土壙の壁は石棺の壁側から 20~30 cm 離れたところに認められるので、その大きさは約 2 m 前後の正方形に近いプランであった。しかし、その深さは約 30 cm ほどである。石棺は 2 つとも同じ造りである。

#### 東棺（県報告書の B 棺）

この方が小さく、東西の両長側は板石を 2 枚、南北の両短側は板石 1 枚で囲っている。両長側の 2 枚の板石は縦ぎ目をわずかに重ね合わせ、その外方に短い板石 1 枚をあてて控えとしている。棺の内法は長さ 1.32 m、幅は南端部 47 cm、北端部が狭くて 35 cm ある。内部の床面には長手の板石を 2 列に敷いていたらしく、いま北端の 2 枚と中央の 1 枚が残っているが、もとは全体に敷き詰めたようである。この床面からの棺壁の高さは 23 cm ある。蓋石は同じ板石数枚を並べたらしく、その一部が残っていた。

棺内の遺物出土状態については、県報告書に記述と略図がある。それによると、人骨 1 体が頭を南にして仰臥し、四肢を伸展した姿勢で安置されていた。副葬品として、その頭骨の左側に櫛 2 枚、足下に石製刀子 1 個、貝製品 2 枚があり、人体の両側には鉄刀と鉄剣が 1 振ずつあったが、これは調査以前に取り出されていたため、いずれが刀で、いずれが剣であったかは不明であるという。また足部の粘土内より石製鎌 1 個が出、そのほかに鉄斧頭、鉄錐、不明鉄器などが出ているが、いずれも調査以前の出土のため、原位置は不明である。

#### 西棺（県報告書の A 棺）

同じ造りのやや大きい箱式棺である。両短側は板石 1 枚であるが、両長側は 3 枚ずつの板石を横に立てて囲っており、内法は長さ 1.5 m、幅は両端ともほぼ等しく 54 cm ある。床には板石を敷くが、いま大型の 2 枚が残り、北端部 30 cm のところだけが無くなっている。床面からの壁高は 30 cm である。蓋石は失われていたが、東棺同様板石をかぶせたものであろう。

棺内には、東棺同様人骨 1 体が頭を南にして仰臥していたが、首は西に向かって、下肢を屈折していたという。その脚部の北の空所には、鎧 1 頭、石製刀子 3 個、貝製品破片 3 枚があり、大刀 1 振が人骨の右側に置かれていた。

なお、石棺に使用された石材は古銅安山岩（含輝石讃岐岩質安山



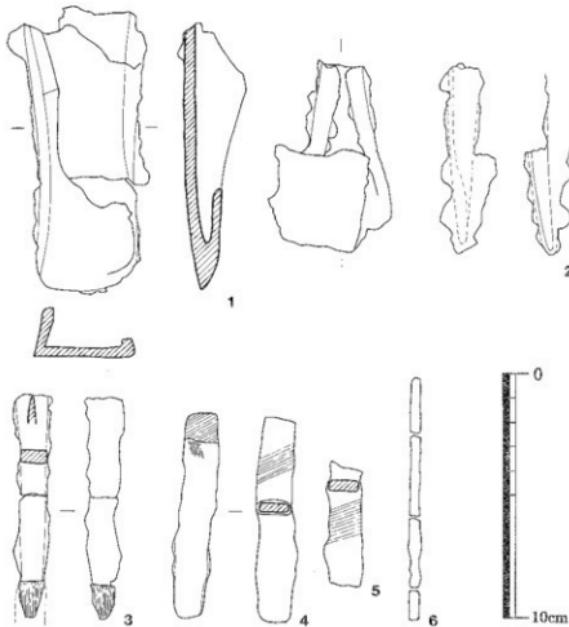
第 22 図 岩崎山第 1 号古墳  
出土鉄製武器類

岩)で、近くでは津田湾北方の小田村北山に産する。

#### 4. 出土遺物

調査品は全て棺内から出土したもので、いま東京国立博物館に収蔵されている。ただし、これらは第4号古墳出土を含めて岩崎山古墳遺物として一括されているので、博物館記録からは、いずれが

	東棺 (B)	西棺 (A)	東博収藏品番号
大刀	1	1	○
剣	1		○
鎧		1領	○
石製刀子	1	2	20143、20144、20145
石製鎌	2		20146、20147
櫛	2		20121
貝製品	2	2 (残欠)	20138、20139 2個のみ
鉄鑿	1		
斧頭	2		
石製手斧			



第23図 岩崎山第1号古墳出土鉄製工具類

第1号古墳のどちらの棺から出土したものであるかを断定することはできない。したがって、県報告書中に掲載された挿図を参照して、整理してみると第11表のようになるであろう。

#### 鉄器類

このうち県報告書にB棺(すなわち東棺)から出た不明鉄器とあるもののうち、1つは有袋式鉄斧頭であるが、これは通有のものと異なり、鋳鉄製品である。また鉄錐かとされたもの他に鉄鑿がある。有袋式鉄斧に癒着したもう1個の不明鉄器は実体が明らかでない。

#### 石製刀子 3個

東棺から1個、西棺から2個でいる。いずれも滑石製で、造りはあまり精良ではない。

東棺出土の1個(東博20144)と西棺の1個(東博20143)は

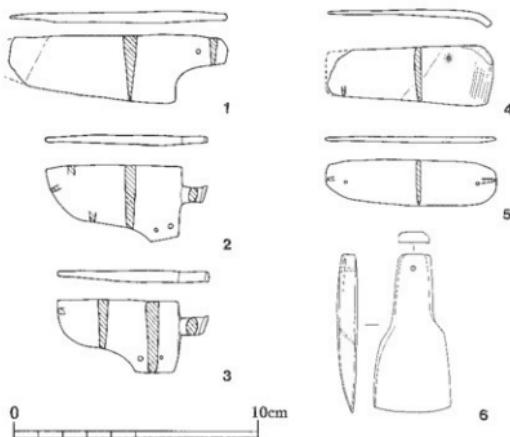
同形で、長さが短く、革製の鞘に入れられた形を模したものである。鞘の部分は鞘口部の幅が広く、その刃側に平行な突出部があつて、そこに紐穴2個を穿っている。刃側は鞘口に近い突出部から鞘尻に向ってS形に湾曲させている。背は直線的で厚さは背・刃ほぼ同厚である。把は小さくて関の中ほどからわずかに上方につき、端を斜めに切って、突帯を繞らせている。

西棺出土の他の1個(東博20145)は、前二者に比べて長く、鞘に入れない裸身の形を表している。把は太くて背と一直線に続き、中央に目釘穴1孔がある。鋒は欠けているが、ほぼ完形に近い。身の断面は背が厚く直に切ってあり、刃部は尖っている。

#### 石製鎌 2個

ともに東棺の足部粘土中より出土したといふ。滑石製である。

1(東博20147)はいま2片に割れているが、



第24図 岩崎山第1号古墳出土滑石製模造品類  
(1~5 東博収蔵品)

第12表 岩崎山第1号古墳出土滑石製刀子計測値

	全長	身長	身幅	背厚	把長
20143	6.2	5.0	3.0	0.6	1.2
20144	6.6	5.5	2.9	0.6	1.1
20145	9.0	6.9	2.7	0.7	2.1

(単位 cm)

第13表 岩崎山第1号古墳出土滑石製鎌計測値

	全長	幅	中央厚
20147	6.7	2.3	0.45
20146	6.8	1.8	0.35

(単位 cm)

合わせば1個体となる。鉄鎌の柄を接着する部分の折り曲げ部と同じおもむきである。端から2cmの背よりのところに1孔あり、他端はやや幅を狭めて、丸い尖端をなす。断面は上面は平面にして、背面は中膨らみであり、刃部は厚みを小さくしているが、尖っていない。表面はよく磨かれ、滑澤である。

2(東博20146)は同じような形であるが、短側の一辺の折返しがなく、2孔あってそれぞれ、端から1cmのところの中央辺にある。断面は中膨らみで、一長側は刃をなして尖っている。先端に近い背面に1条溝がある。摘鎌あるいは鋸を模造したものかもしれない。

#### 石製手斧

これは村人が採集したもので、出土状態がはっきりしない。滑石製であるが、全面鉄質混じりの土銹に覆われている。扁平な板を有肩式の手斧形に作ったもので、裏面は平直であるが、表面は中ほどをわずかに膨らませ、刃部に向って厚みを削っている。柄部は細長く、端に近いところに小孔があり、上面より一方向に貫通している。全長6.5cm、刃幅3.2cm、柄端幅1.4cm、最厚部0.8cmある。

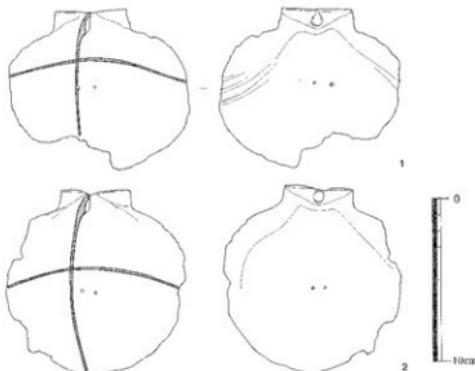
#### 有孔貝製品

東棺より完形に近いもの2個、西棺より残欠2片が出土しているといわれるが、現在東京国立博物館には完品2個と破片1個がある。

いずれも帆立貝製であるが、第1(東博20138)は、縦11.5cm、横11.3cmあって、周縁の一部に欠けたところがあるが、ほぼ完形に近く、中央に径3~4mmの小孔が5mmの間隔で穿たれている。第2(東博20139)は、周縁の欠損部がやや大きく、縦10cm、横11.6cmあって、中央の2孔はほぼ同じ大きさであるが、間隔は10mmである。背面に酸化鉄分の朱と有機物質が付着している。

この種の類品はあまり多くない。古く山口県吉敷郡山口町(現・山口市)赤妻古墳<sup>8)</sup>から、3個の貝製品と、その破片8個がでており、挿図によれば、ともに2孔を有しているが、その形は蛤に似ている。昭和23年、群馬県太田市鶴山古墳<sup>9)</sup>からでた8個は月日貝製で、縦の長さ11.7~10.5cmほどあり、中心に2孔あり、本墳出土例にもっとも近い。

帆立貝形に似た碧玉製品がこれまでに数例知られている。静岡県庵原郡(現・清水市)三池平古墳<sup>10)</sup>から出土の4個は、全長6.7cmのもので、円形の体の上に台形の突起があって、帆立貝に類似した形



第25図 岩崎山第1号古墳出土有孔帆立貝製品  
(東博収蔵品)

を呈している。片面は平直であるが、表は中高の凸面で、中央に小孔1個を設けている。

奈良県日葉醉媛陵出土品は現存1個があり、全長7.2cmの同じ造りであるが、台形突起が2段になっており、中央円孔から突起部にかけて1条の隆起線帯が走っている。この種の遺品が古墳から出土したことについて、太田市鶴山古墳の報告者尾崎喜左雄氏はじめ鏡の代用品かといわれていたが、そのご再考により盾の表面に置かれていた様子が窺えるので、漆盾の装飾と見なしている。

## 櫛 2個

東棺から出土したものは、1つは東京国立博物館に収蔵(20121)されているが、破損が著しい。

他の1つは故上原準一氏の所蔵である。数条の竹の細材を束ねて、U字形に曲げ、半円形の頭部の基を、幅0.9cmほどに糸で巻き固め、全面を黒漆で塗り仕上げたものである。いま歯部は欠けているが、半円形の頭部だけが残っている。幅3.3cm、残高2.2cmあり、基部に朱の付着した痕跡をとどめている。また、三池平古墳の報告者は呪術的護符をして埋葬されたものかと推定している。

## 参考文献

梅原末治『古式古墳觀』大和文化叢書 昭和36年

## 註

- 1) 津田町の遺跡は、六車恵一氏の調査によるところが多く、参考資料の多くは同氏の提供せられたものである。なお、長町与彦『津田町史』昭和2年 参照。
- 2) 梅原末治『讃岐出土の一古墳』『考古学』6—8 昭和10年
- 3) 富田村にある全長130m前後の前方後円墳、富田茶臼山古墳がその筆頭である。
- 4) 香川県史蹟名勝天然記念物調査報告第5冊 昭和5年
- 5) 長町彰『讃岐国大川郡津田町岩崎山古墳』考古学雑誌7—3 大正5年
- 6) 中村晴彦・上田宏範『桜井茶臼山古墳』昭和36年
- 7) 両石棺の間隔について、報告書には78cmとあり、両棺が多少前後にずれているように描かれている点が今回の調査の実情と違う。
- 8) 弘津史文『周防国赤坂古墳・茶臼山古墳(1)』考古学雑誌18—4 昭和3年
- 9) 尾崎喜左雄『群馬県太田市鶴山古墳』日本考古学年報一 昭和26年
- 10) 内藤晃・大塚初重『三池平古墳』庵原村教育委員会 昭和36年

## 付章1 岩崎山古墳群の地形測量

古瀬清秀

昭和26年の京都大学調査時に第1号および第4号古墳の地形測量が実施されていたが、地形図の等高線の間隔が1m単位でなされていてことや、その後の地形の改変があったりしたので、今回の報告書刊行に合わせ、平成14年1月24日から2月5日までの延べ13日間、改めて25cm間隔の等高線で縮尺1/2000の地形測量を実施した。このうち実質的な現地調査は10日間程度で、期間中に津田町立郷土資料館に収蔵されている岩崎山古墳群関係の考古資料についても実測、写真撮影等を実施した。調査は津田町教育委員会の全面的な支援の元に、広島大学大学院文学研究科考古学専攻大学院生8名が実施した。その間、多くの方々から物心両面にわたる応援をいただいた。

今回の測量調査結果は、両古墳とも基本的には昭和26年作成の測量図と大きな差異は認められないが、墳丘各部の微地形について細かく観察できたので、その結果を中心に述べてみる。

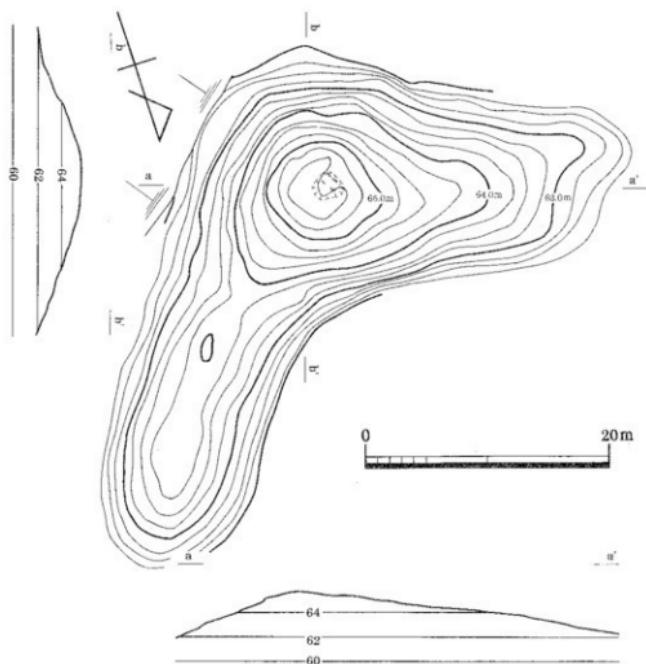
### 第1号古墳

まず、第1号古墳であるが、昭和26年の墳丘観察では、墳丘を中心北東および北西方向に延びる尾根筋があり、特に海に面した北東尾根の墳丘裾が若干くびれていることから前方後円墳の可能性も考えられたが、葺石、埴輪も見られないので前方後円墳を否定し、墳頂から1.5m下がった等高線が墳丘と自然山丘を区切るラインを見て、直径約15mの円墳としている。今回の測量では2つの尾根筋と墳丘の関係を重点的に測量した。その結果、海に面し、前方部状の平坦面が形成された北東に延びる尾根は、墳丘中心から11~12m、墳頂から高さ約1.5m下位の地点がくびれており、ここに溝が形成され、尾根筋と墳丘が切り離されている状況が窺えた。したがって、この尾根は全くの自然尾根と見てよいようである。尾根先端は海を望み、古墳築成には絶好の地点であるが、地山が露頭し、この第1号古墳以外に古墳は存在しない。

一方、北西方向に延びる尾根であるが、北東尾根側の墳丘裾は標高64mのラインと見られるから、北西尾根側にこのラインを追っていくと、幅5m、長さ4~5mに平坦に張り出した地形が観察できる。この張り出しの裾は標高63mのライン辺りまで見られ、後は自然傾斜面に連続する。この張り出しは中央の円丘部との接続部に北東尾根で見られた溝ではなく、幅10m、長さ12



第26図 岩崎山古墳群の位置（昭和26年当時）



第27図 岩崎山第1号古墳墳丘測量図(平成14年測)

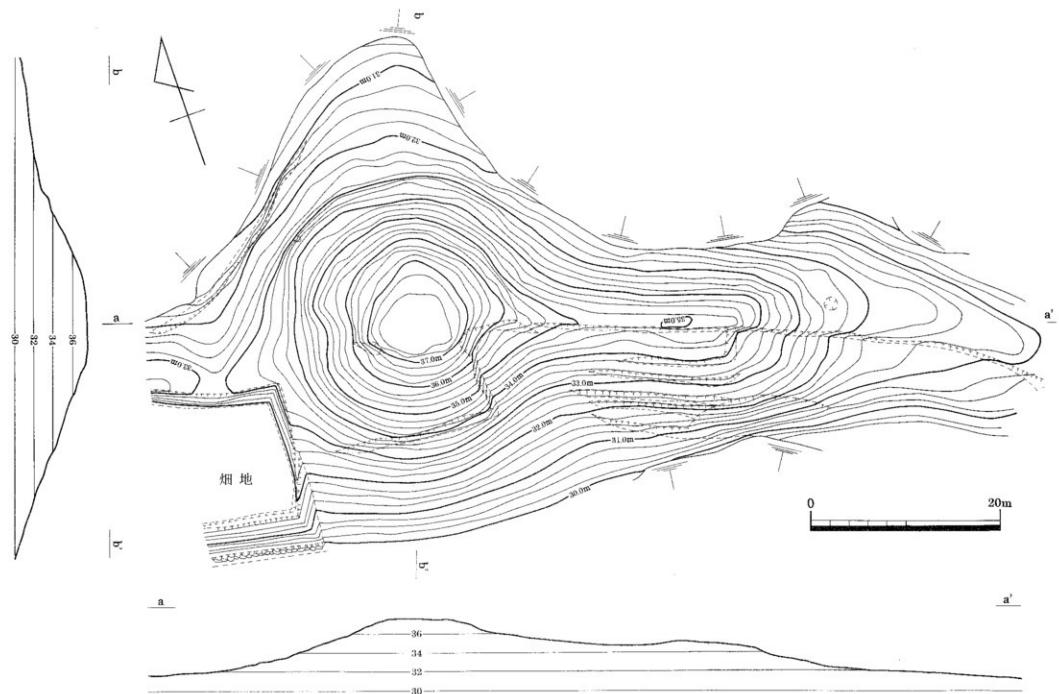
mにわたって、墳丘と一体の形で張り出している。

以上のように両尾根のあり方は全く異なり、北西側尾根は前方部そのものと見てよかろう。したがって、第1号古墳は北西方向に前方部を向けた、墳長約26m、後円部径約14m・高さ1.5m、前方部長12m・幅約10m・高さ約1mの前方後円墳とみてよかろう。墳丘の裾は前方部前面が後円部東側より約1m低く、墳丘の基底がゆるやかに西に傾斜していることになる。

なお、中央の円丘部は、津田川に面した南側は墳丘の傾斜がそのまま墳頂から2.5m下位の標高63mあたりまで連続し、自然傾斜面との区分が困難である。そのため、南から仰ぎ見た後円部は見かけ上ずいぶん大きく見えることになる。一方、北側は急角度の自然傾斜面に続き、墳丘裾は直線的で円形をなしていない。このことから墳丘は津田川方向を意識した造りとなっており、古墳の正面がこの方向にあった可能性を指摘できる。

#### 第4号古墳

昭和26年の調査当時は写真から判断する限り、大きな立ち木もなく、墳丘の観察は容易であつ



第28図 岩崎山第4号古墳墳丘測量図(平成14年測 1/400)

たようだ、等高線1m間隔の地形図とはいえ、今回の測量結果と大きな差異もなく、的確な情報が示されている。しかし、微地形測量によって確認できたいいくつかの結果についても述べておこう。まず、昭和26年当時と地形が異なるのは後円部西側が削平され、畠地として開墾されたこと、墳丘北側の山腹が弧状をなして崖状に崩れていること、さらに松や竹が繁茂して見通しが悪くなっていることである。

さて、後円部西側の裾は、やせ尾根の小さな高まりと幅6m前後の溝で切り離されている。後円部西裾から北側裾は標高32.75mを基底として、高さ約1mの基壇状石積みが良好な状態で遺存しており、比較的容易に墳丘裾を確定できる。墳丘はほぼ平坦な基盤上に構築されており、墳丘の裾もほぼ水平に巡るようであるが、ただ津田川に面した裾は自然傾斜面に連続する形となっており、明確に決めがたい。地形測量から観察できた数値を示すと、墳長約58m、後円部は、直径約31m・高さ約5m・墳頂平坦面の直径7~8m。くびれ部幅は約15m。前方部は、長さ約27m・前端幅約15m・高さ2.5mとなる。

この地域における前期前方後円墳はバチ形を呈する前方部が特徴であるが、岩崎山第4号古墳の前方部は、くびれ部から前方部前端までほぼ同じ幅の柄鏡形となっており、在地形と異なる形状となっている。第4号古墳は後円部径と前方部長がほぼ同じで、前方部の長さは後円部を8等分したときの7ないしは8区画分となっていて、7区型あるいは8区型の前方後円墳とすることができる。また、前方部の幅は後円部径のほぼ2分の1で、非常に整美な形態の前方後円墳といえる。

## 付章2 岩崎山古墳群について

古瀬清秀

### 1. はじめに

本報告書に収録するのは、昭和26年の京都大学の発掘調査後に樋口隆康氏によって纏められた調査成果の詳細な報告である。それ以来半世紀近く経って、岩崎山古墳群も含めて瀬戸内海沿岸や島嶼部で海に面して立地する特異な古墳について、多くの様々な視点に基づく研究がなされ、興味深い問題点が指摘されてきている。ここでは樋口氏の調査報告書に示された成果に、その後の研究成果を加味する形で、岩崎山古墳群の今日的評価と課題について少し考察を加えてみる。

岩崎山古墳群の中では特に、第4号古墳は江戸時代にその内容が知られて以来、複数の中国鏡や多種類の碧玉製腕飾り類の出土から香川県における代表的な前期古墳としての評価がなされてきた。さらに昭和26年の京都大学の詳細な調査で、一層その価値が高められた。通常、香川県における前期古墳は中国鏡1面、玉類及び少量の鉄器類といった組合せが多い。こうした中で、岩崎山第4号古墳の副葬品目はひときわ目立ち、異質な存在といえよう。このような古墳がなぜ東讃の津田地域に築造されることになったのか、この現象について、津田湾のもつ地政学的な意味を含めてどのような説明が可能であるか、少し述べてみよう。

### 2. 瀬戸内沿岸、島嶼部の古墳の理解

これまでの研究では、特に海との関係が重視されたものとなっている。津田湾を巡る古墳群は他の瀬戸内海地域の同様な古墳群との比較において、たとえば、岡山県牛窓湾岸の古墳、山口県平生湾岸の古墳群などがその対象としてとりあげられて、その性格づけがなされている。

まず第一に昭和31年に、近藤義郎氏が牛窓湾岸の古墳について論述した<sup>1)</sup>。そこでは、墳長90mの天神山古墳を始めとする、50mを超える前方後円墳5基が年代を追って順次、平野の僅少な牛窓湾岸に築造されるのは、「倭政権」による対朝鮮半島交渉のための内海航路上の港湾拠点形成に関連づけられるもので、「倭政権」からの要請を受けた、吉備国邑久の豪族が重要な根拠地を設けたと指摘する。短編の研究ノートであるが、瀬戸内沿岸に築造された特異な古墳の在り方について最初に歴史的位置づけを与えたものとして、その後の研究の指標となるものであった。

次いで昭和41年に、岩崎山古墳群の発掘調査に参加した穴車恵一氏は、広い平野部をもたず、長さ3.5kmにわたって半月形に形成された津田湾岸に展開する前半期古墳について、牛窓湾岸と同様な環境にある津田湾岸には、岩崎山第4号古墳など前方後円墳5基を含む前半期古墳が集中して築造されており、その被葬者として海運、港湾泊地、水産等の海を背景とした首長層の存在を積極的に想定した<sup>2)</sup>。そして瀬戸内海には古くより2つの航路があり、津田湾をその四国側ルートの拠点に位置づけた。

戦後日本における考古学研究の集大成として企画された河出書房新社の『日本の考古学』シリ

一では、昭和 45 年に刊行された第 IV 卷には地域ごとに古墳文化の変遷がまとめられ、六車氏らは「瀬戸内」地域ではその全域の沿岸部や島嶼部における古墳の在り方から、それらの古墳を瀬戸内海沿岸における拠点の形成という視点で捉え、その共通する意味を瀬戸内海航路上の中継基地とし、「倭政権」の朝鮮半島侵略の事業とともに盛衰をみたと指摘する<sup>3)</sup>。津田湾岸の古墳も香川県沿岸の諸拠点の一つで、難波津から西行し、芸予諸島で北岸航路に合流する瀬戸内海航路の一環と捉えた。

相次いで角川書店が戦後の考古学・古代学研究の成果として刊行した『古代の日本』シリーズでも、間壁忠彦氏が瀬戸内海北岸と南岸に立地する古墳の在り方について、牛窓湾や津田湾、山口県平生湾といった地域ごとに概観して、その築造年代が前期後半から中期前半という限定された時期に納まる例が多いことから、「大和政権」の朝鮮半島侵出に大きく関係した内海沿岸勢力の性格を物語っているとした<sup>4)</sup>。津田湾岸の古墳については 4 世紀後葉から 5 世紀にかけての所産とし、讃岐東部の海上に強い意欲をもった首長墓として特に注目されるものと評価している。

こうして津田湾岸の一連の古墳はその歴史的意義として、倭王権の対外交渉における瀬戸内海航路の大拠点を示すものとして位置づけられていった。この後、香川県内の古墳研究が進展し、その地域性の中で津田湾岸の古墳がもつ特性についての理解もなされてきた。

昭和 57 年に玉木一枝氏が、香川県は狭い県域に限定されながらも、100 基前後という多くの前方後円墳が築造された地域として特徴的で、それも墳長 40 m 前後の小型前方後円墳が大半で、前期に限れば、前方部の形態がバチ形を呈するという大きな地域的特徴があることを指摘した<sup>5)</sup>。さらに昭和 60 年には、香川県における前期古墳の特質として、墳長 30~40 m にピークをもつ小型の前方後円墳の多いことに合わせて、それらには盛土古墳と横石古墳があり、埋葬施設の主軸方向が東西指向の強いことをあげる。その一方で、津田湾岸の代表的な古墳、岩崎山第 4 号古墳、龍王山古墳の竪穴式石室は南北方向を向くことや、この地域に剖抜き式石棺が導入されることなどをあげ、津田湾岸の古墳が香川県内においては極めて特異な存在であることを指摘した<sup>6)</sup>。

### 3. 津田湾岸の前期古墳の脱地域性

以上のように、瀬戸内海沿岸、島嶼部に点在する古墳について、半世紀近くにわたる研究が積み重ねられ、それらの地域が倭王権の対外交渉を担う、瀬戸内海航路上の港湾泊地としての性格を強く示す地域拠点であることが明確にされていった。そういった検討の過程で、津田湾岸の古墳が香川県における前期古墳の地域性とはかなり異なった性格をもつものということも判明してきた。

ここで、倭王権の地域拠点という意味について少し検討してみる必要がありそうだ。つまり、津田湾岸が単に航路上の港湾泊地だけの意味合いで捉えられるのか、あるいはその特定の地域の歴史変遷の中においても特別の意味をもっていたのかについて検討してみよう。

検討材料としてまず第一に、狭い平野部しかもたない津田湾岸に墳長 50 m 以上の前期前方後円墳が 3 基も集中して築造されることである。そして第二にそれらの埋葬施設に地元の火山産凝

灰岩製の削抜き式石棺などが使用されていることがあげられる。これらについてそれぞれ、以下に検討してみよう。

第一の点であるが、内容の判明している岩崎山第4号古墳、赤山古墳についてみると、いずれも墳長60m近い規模で、前者では中国鏡2面、碧玉製腕飾り類5個以上、硬玉勾玉を含む多数の玉類、豊富な鉄器類、後者では大型倭鏡2面、多量の玉類、多数の碧玉製腕飾り類といった副葬品目は共通して他を圧倒する。この地域で前期の前方後円墳は古枝古墳、奥第3号、13号、14号古墳、中代古墳などがあるが、いずれも墳長30m前後の小型であり、副葬品目は中国鏡1面、玉類、少量の鉄器類といった組合せが大半である。

ところで、昭和48(1973)年には津田湾岸から山一つ内陸側で奥古墳群の発掘調査が実施された。これによって、奥第10~12号弥生時代後期墳丘墓および前方後円墳の奥第3、13、14号古墳の内容が明らかになり、この地域の弥生時代後期から古墳出現期の様相がかなり明確となったのである。この結果、津田湾岸の前期古墳を含めた、この地域の古墳の変遷過程がより確実なものとなつた<sup>7)</sup>。

津田湾は、標高200m前後の衝立状に連続する山並みで周囲を取り囲まれ、内陸部と遮られているが、その山並みの中で津田湾のすぐ西にそびえる雨滝山の西側山麓に、西に広がる長尾平野に面する形で奥古墳群が立地している。雨滝山西麓には内陸側の右井地区から深く狭い谷が津田湾側に向って延びており、奥第3号古墳と第13、14号古墳はこの谷を挟んでそれぞれ丘陵尾根頂部上に立地するが、奥第10号ほかの弥生墳丘墓群は内陸側のやや低い位置に、やはりこの谷筋沿いを見おろすように立地している。この谷筋は津田川を除けば唯一、津田湾と内陸側が通じる部分で、つい先年まで両地区を連絡する生活道路として機能していたようである。そして奥古墳群のどの墳墓も津田湾を遠望できる位置に築造されていたのである。つまり、奥古墳群は内陸の平野部だけでなく、津田湾をも意識した立地であったのである。

そしてさらに重要なことは、奥古墳群は津田湾の前期古墳より先行する時期に形成され、そこに葬られた首長たちはいずれも頭部を西に向けて東西方向に埋葬され、墳丘の前方部はいずれもバチ形に近い形態をもつ。埴輪類はもっていない。これらの特徴はいずれも玉木氏が指摘したように、讃岐の前期古墳の典型であり、在地性の強い在り方を示しているといえるのである。

一方、津田湾岸の古墳をみると、岩崎山第4号古墳は柄鏡形の細長く延びる前方部をもち、南北方向に埋葬されていた。これはすぐ北側にある直径約30mの円墳、龍王山古墳でも同様で、この地域では特異な、狭長で全長6mに及ぶ長大な竪穴式石室が南北に長く埋設されていたのである。また円筒埴輪のほか多彩な形象埴輪類が検出されている。これらの特徴からはあまり在地色を窺うことはできない。むしろ畿内地方の首長墓の在り方に共通する内容といえる。

この相対する在り方は一見、津田湾岸の古墳と内陸部の古墳が異質なものと捉えられるかも知れない。しかし、この地域の古墳の築造変遷をみると、積石塚の川東古墳、さらに奥第3号古墳の築造に始まり、奥第14号古墳、古枝古墳、奥第13号古墳、赤山古墳、岩崎山第4号古墳、ければ山古墳といった順番で繼起的に築造され続けた可能性が強い。したがって、双方の首長たちは

この地域で互いに孤立することなく、むしろ互いに関連し続けていたのである。その意味はおそらく、地域の首長たちの後ろ盾としての倭王権との関わり方如何によるものと考えられる。つまり、倭王権へのペクトルが大きいほど古墳形態に在地性を減少させる様相が強く反映されたようだ。

ところで、雨滝山とその東隣に連続してそびえる火山の南側の内陸部は大川町域をなしているが、高松平野から連続する広い平野部の最東端に当たり、いわば袋小路となる。この地点に、しかもちょうど津田湾に大型の古墳が築造されなくなる時期に合わせるような形で、四国最大の前方後円墳、富田茶臼山古墳が周囲を威圧するように築造されている。この時期は、玉木氏指摘の在地性豊かな讃岐の古墳がその地域を急激に失っていく時期でもあった。おそらく、津田湾岸に畿内色豊かな古墳を築造し、地域にその威光を示し続ける意味がなくなったことをも意味するのであろう。つまり、倭王権にとって四国経営上非常に重要な地域であった讃岐東部に、親畿内的な勢力によって霸権が確立された結果、富田茶臼山古墳が出現することになるといえる。

以上のような推測が許されるならば、津田湾が完結した地域ではなく、内陸部と一体のものと理解する必要があろう。確かに津田湾岸は周囲を衝立状の山並みで遮られ、東西に細く延びる孤立した空間とはいえ、ただこの津田湾を隔離された単一の地域と限定して捉えることは誤りであろう。

#### 4. 火山産石材を用いた剝抜き式石棺の導入

もう一つの特徴である剝抜き式石棺の導入についてみてみよう。香川県では中讃の綾歌郡国分寺町鷲ノ山産の石材（石英安山岩質凝灰岩）と津田町火山産の石材（非晶質凝灰岩）が古墳時代前半期の石棺材などに利用されている<sup>9)</sup>。火山産の凝灰岩は津田湾のすぐ背後にそびえる火山が主要な原産地で、地元では白粉（しらこ）石と呼ばれ、白っぽい色調で肉眼での識別も容易である。津田湾岸ではこの火山石が使われ、岩崎山第4号古墳の石棺、赤山古墳の2基あるいは3基の石棺、けば山古墳の石室蓋石が知られている。

ところで最近の調査研究で、この火山産石棺が広域にもたらされていることが分かってきた。岡山県東部吉井川流域の代表的な前期古墳、備前市鶴山丸山古墳の特徴的な形態の大型石棺<sup>9)</sup>、徳島県鳴門市大代古墳の舟形石棺<sup>10)</sup>、大阪府岸和田市久米田貝吹山古墳の突帯をもつ石棺<sup>11)</sup>などが確認されている。いずれも地域を代表する古墳で、前方後円墳あるいは大型円墳である。まず、鶴山丸山古墳は前述した牛窓湾から吉井川を10数km北に遡った地域にあり、直径約55mの大型円墳で、大型の家形石棺を納めた竪穴式石室がある。石棺の周囲から大、中型後鏡30面以上、碧玉製品などが出土している。石棺の形態から判断すれば、岩崎山第4号古墳より少し新しい時期の築造である。この地域には先行する花光寺山古墳、新庄天神山古墳といった大型前方後円墳や大型円墳があり、石材に加工を施した組合せ式石棺および剝抜き式石棺を埋葬施設にもつ。花光寺山古墳は墳長100mと大型であるが、柄鏡形の前方部をもち、岩崎山第4号古墳に相似した形態の墳形である。石棺を南北方向に埋置し、埴輪を立て並べるのも、津田湾岸の古墳の在り方

とよく似ている。牛窓湾岸の古墳と合わせたこれら一連の古墳が集中する吉井川東岸流域は、古代吉備世界の中において、特殊器台形埴輪を共有し、前方後方墳系列から始まる備中地域とは、古墳文化の展開が異質である。吉井川流域の東岸域は畿内地方の古墳文化の展開に近い内容を色濃く示している。

さて、大代古墳は鳴門海峡を遠望する丘陵上にある墳長54mの前方後円墳で、柄鏡形の前方部をもつ墳丘形態は、岩崎山第4号古墳に規模、形ともほぼ相似する。後円部に南北方向に主軸をもつ竪穴式石室があり、ここに火山石製の舟形石棺が埋置されている。岩崎山第4号古墳と比較すると、副葬品の組合せから時期的には若干新しくなる。この古墳と後述する久米田貝吹山古墳の存在は注目すべきもので、まさに津田湾岸の前期古墳と火山、紀伊水道の四国側（大代古墳）、紀伊水道の畿内側を連結するものである。

久米田貝吹山古墳は大阪南部の、大阪湾を遠望できる標高35mの低丘陵上にある。墳長約130mの大型前方後円墳であり、埋葬施設は竪穴式石室で、火山石製削抜き式石棺が納置されていたが、盗掘のため碎片を残すのみである。石棺片には突帯状の彫刻をもつものもあり、時期的には岩崎山第4号古墳に相前後するものであろう。石室石材には徳島県吉野川流域産の紅簾石片岩が使用されており、これは大代古墳と共に通る様相である。石室用材まで石棺とともに遠距離運搬する行為は、両地域の首長間、さらには津田湾岸の首長層とともに何らかの結びつきのあることを考慮せざるを得ない。

## 5. 津田湾岸をめぐる前期古墳の意味

ここで、津田湾岸の古墳に戻ろう。香川県の前期古墳を見てみると、墳形では前方部がバチ形に開く形態、埋葬施設の主軸が東西方向を指向、埴輪をもたない場合が多いといった特徴を示す。これに対して、津田湾岸の古墳を見てみると、岩崎山第4号古墳は前方部が細長く延び、埋葬施設の石棺は南北方向を向く。こうしたことは近在する龍王山古墳にも指摘できることである。したがって、津田湾岸の前期古墳は在地的な在り方より、畿内的な在り方を強く示しているといってよい。これは前述してきた通り、火山石製石棺等を搬入した地域にいずれも共通する様相である。つまり、吉井川流域東岸の備前を代表する前期古墳は畿内地方とは強い連関性があり、両者をつなぐ橋頭堡として牛窓湾があり、同様に讃岐内陸部と畿内地方を結ぶ橋頭堡として津田湾があったわけである。前者は吉備中枢の備中勢力への牽制、後者は積石塚と埋葬施設の東西指向に代表される強力な在地勢力への牽制がもっとも重要な役割と想定でき、いずれも畿内勢力の地方への進出と勢力拡大政策の窓口であったと考えられる。そして畿内勢力が地方における権力の確立に成功したとき、つまりその地域が地政学的の意味を失ったとき、それはその地域における特異な古墳の築造が停止されたときであったと解釈できる。それは讃岐地方に限れば、その独自性を強力に表現した地城色が消滅することにつながるのである。津田湾岸の首長は単に水産、航海術、港湾泊地等の実権を掌握したから優勢を示したのでなく、強権をもって脱地域性を促進する政治力を行使しうる立場が与えられていたからこそ、地域で最優勢を維持できたのである。

津田湾岸の古墳は畿内勢力の讃岐地方への勢力進出の橋頭堡であり、したがって内陸部の古墳とも連動した動きを見せたのである。バチ形を呈した前方部をもつ在地の前方後円墳の築造の流れの中に、極めて外来的な様相を示す前方後円墳の築造が赤山古墳、岩崎山第4号古墳、けば山古墳まで連続と、4世紀中葉から5世紀初頭まで連続して築造され続けた。それは在地の首長の造墓規模が墳長40m前後であったのに対し、一回り大きい50~60m規模であったことにも示されている。津田湾岸の首長たちの努力が報われ、その役割を終えたとき、その直後、在地色を一掃した富田茶臼山古墳が悠然とその姿を現すのである。そして単なる港湾泊地としての性格づけのなされた津田湾に、二度と大型古墳が築造されることはない。

津田湾岸の前期古墳の被葬者については、親畿内勢力の在地首長が特別に優遇されたのか、あるいは畿内地方から派遣された首長であったのかは現状では不明とせざるを得ない。

#### 引用・参考文献

- 1) 近藤義郎「牛窓湾をめぐる古墳と古墳群」『私たちの考古学』10 1956(昭和31)年
- 2) 六車恵一「讃岐津田湾をめぐる四、五世紀ごろの謎」『文化財協会報特別号』香川県文化財保護協会 1965(昭和40)年
- 3) 西川宏・今井亮・是川長・高橋護・六車恵一・潮見浩「瀬戸内」『日本の考古学』IV 河出書房新社 1966(昭和41)年
- 4) 間壁忠彦「沿岸古墳と海上の道」『古代の日本』4 角川書店 1970(昭和45)年
- 5) 玉木一枝「讃岐地方における前方後円墳の墳形と築造時期についての一考察」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ I 1982(昭和57)年
- 6) 玉木一枝「讃岐地方の前期古墳をめぐる二、三の問題」『末永先生米寿記念獻呈論文集』乾 1985(昭和60)年
- 7) 古瀬清秀「原始・古代の寒川町」『寒川町史』香川県寒川町 1985(昭和60)年
- 8) 渡部明夫「四国の刳抜式石棺」『古代文化』46 1994(平成6)年
- 9) 四国史編纂委員会編『四国史』第18巻 考古資料 1986(昭和61)年
- 10) 幸泉満夫「大代古墳」『阿讃山脈東南縁の古墳群』(財)徳島県埋蔵文化財センター 2001(平成13)年
- 11) 吉井秀夫編『久米田貝吹山古墳 第1~4次調査概報』立命館大学文学部 1998(平成10)年



# 図版





岩崎山古墳群の遠景（第1号古墳から）



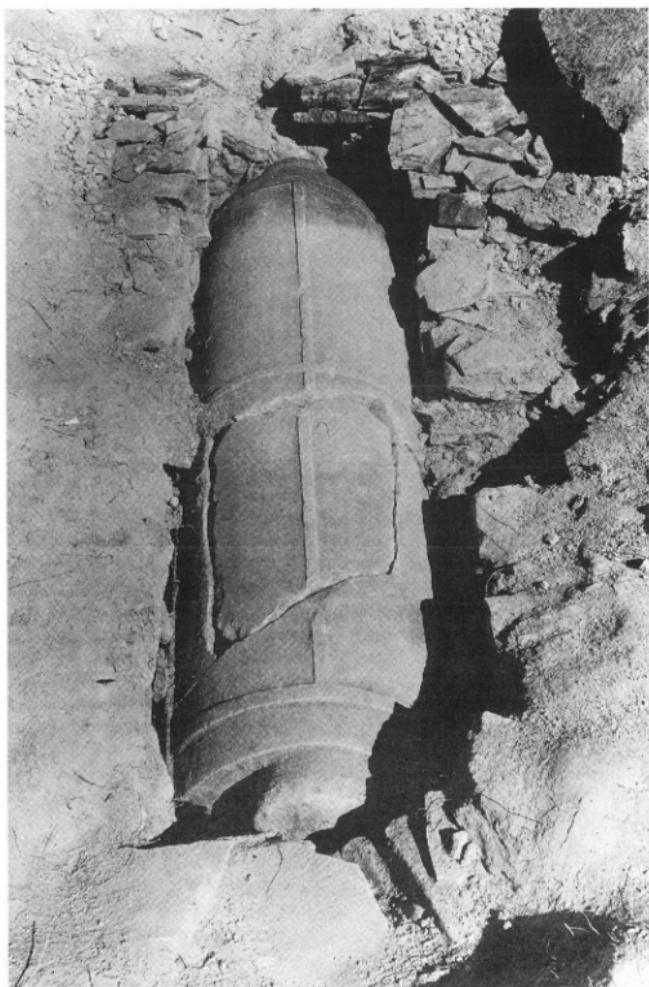
岩崎山第4号古墳の全景（前方部から）



岩崎山第4号古墳の竪穴式石室（北から）



竪穴式石室と石棺の出土状況（南から）



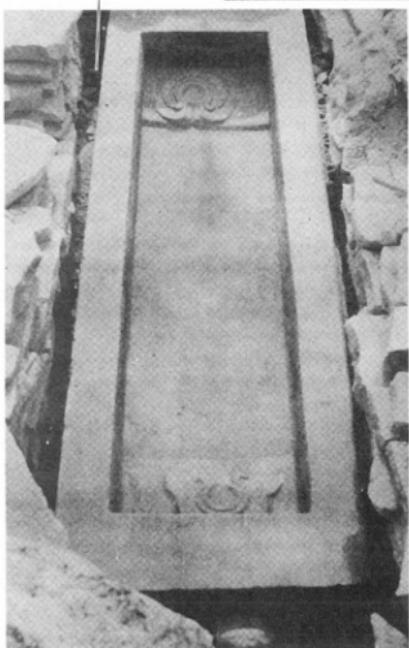
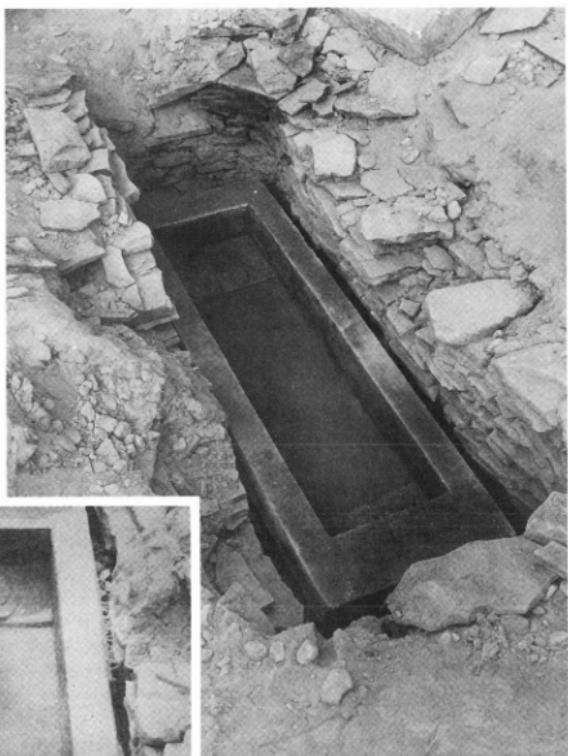
蓋石除去後の竪穴式石室と石棺（南から）



堅穴式石室と石棺の南半部



堅穴式石室と石棺の北半部



石棺蓋を除去した後の石棺内の状況

上 南から

下 北から



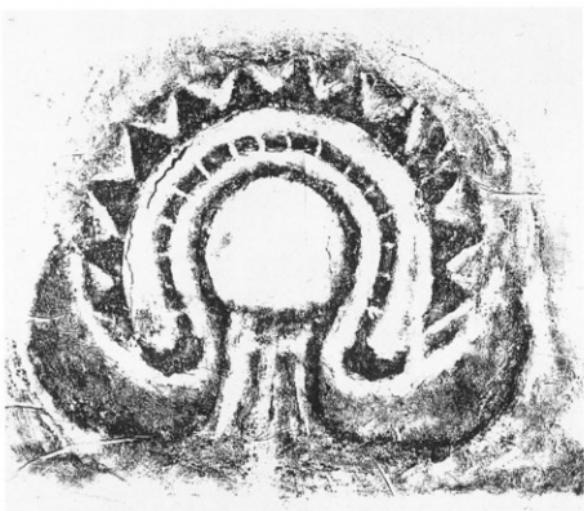
斜線二神四獸鏡の出土状況（竪穴式石室の南端部）



鉄劍・鉄刀の出土状況（竪穴式石室の南西隅）



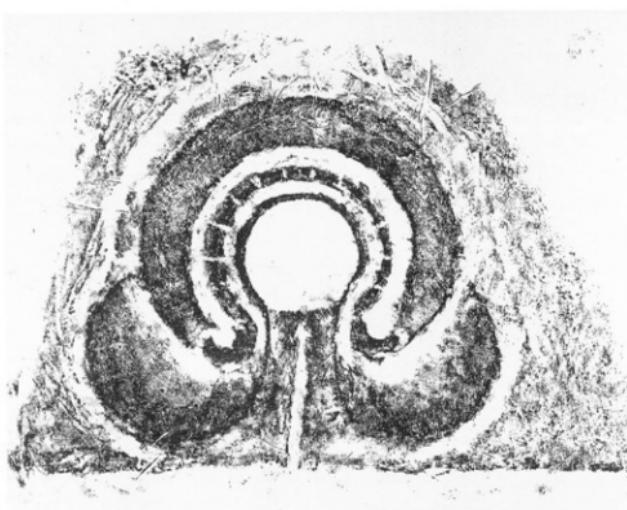
石棺内南側の造り付け枕



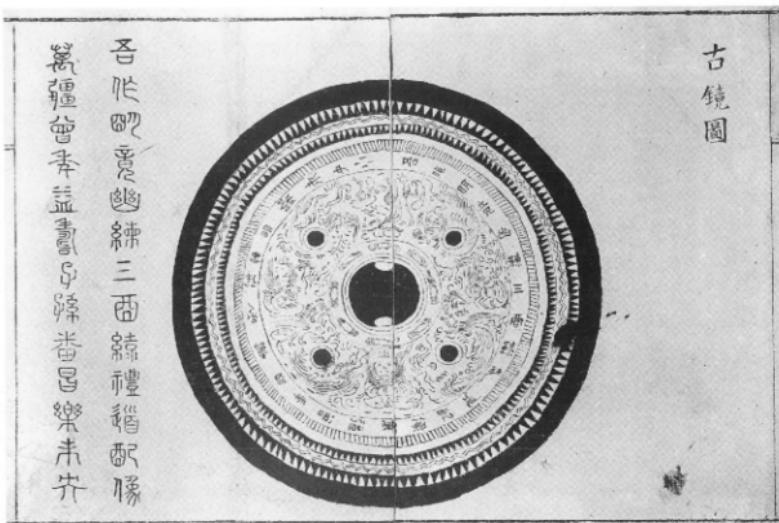
同上拓影



石棺内北側の造り付け枕



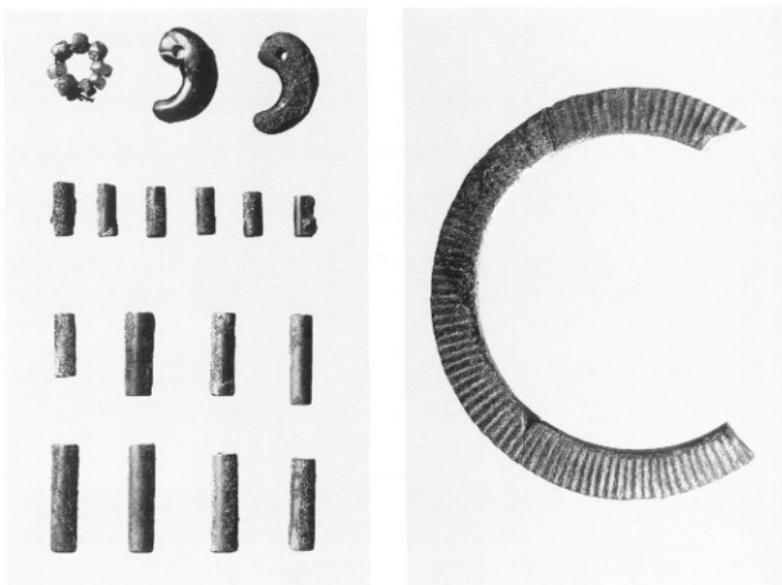
同上拓影



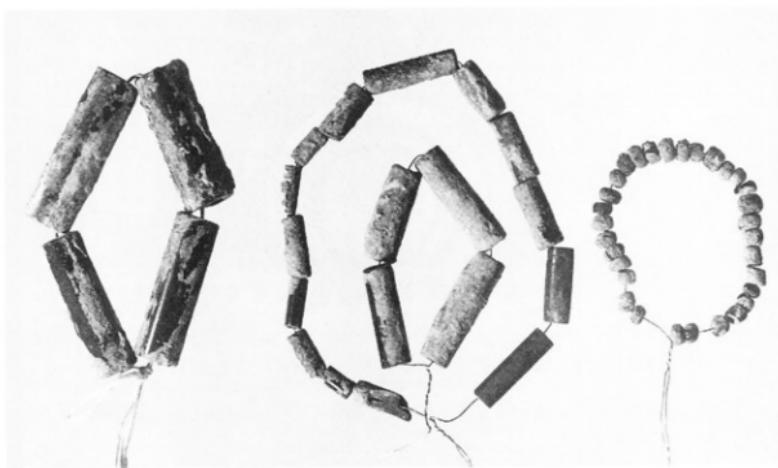
文化6(1809)年出土の四神四獸鏡図



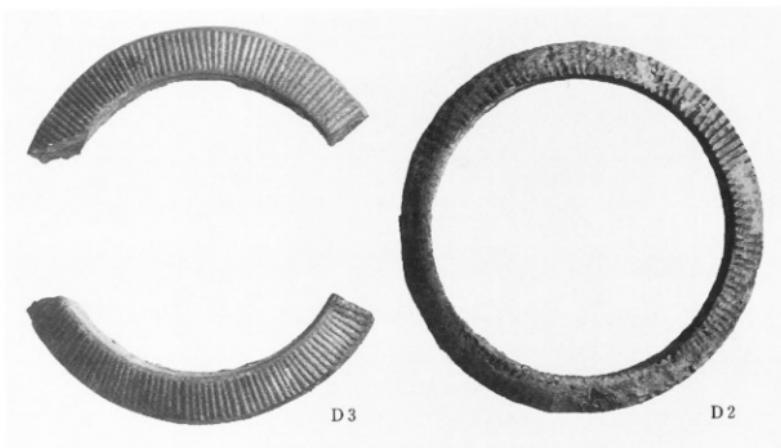
斜線二神四獸鏡(昭和26年出土)



石棺内出土の硬玉製勾玉など玉類と碧玉製石鉤（昭和 26 年出土）



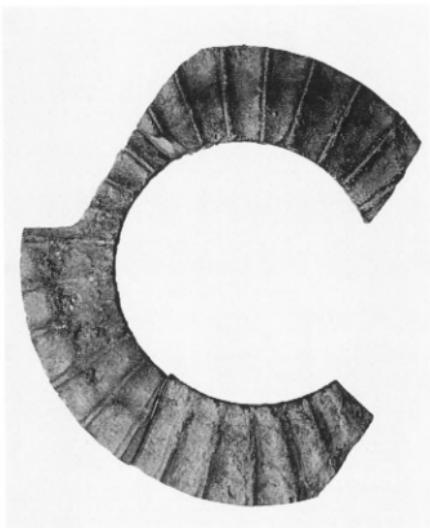
石棺内出土の碧玉製管玉・ガラス製小玉（東京国立博物館収藏品）



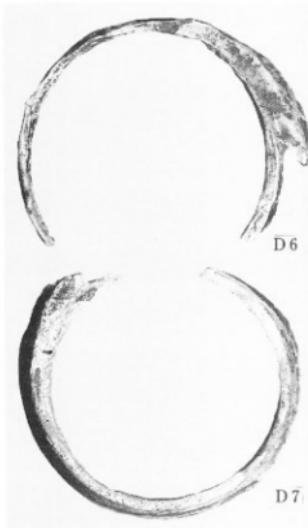
碧玉製石鉗（東京国立博物館収藏品）



碧玉製石鉗（東京国立博物館収藏品）



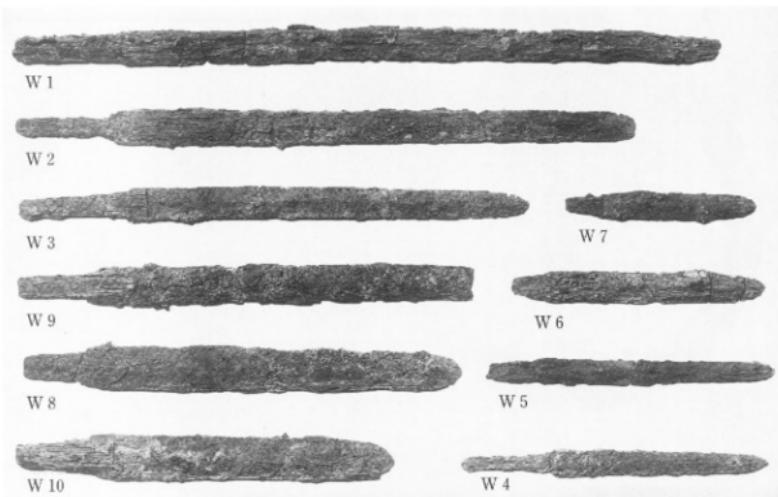
碧玉製石鏡（東京国立博物館収藏品）



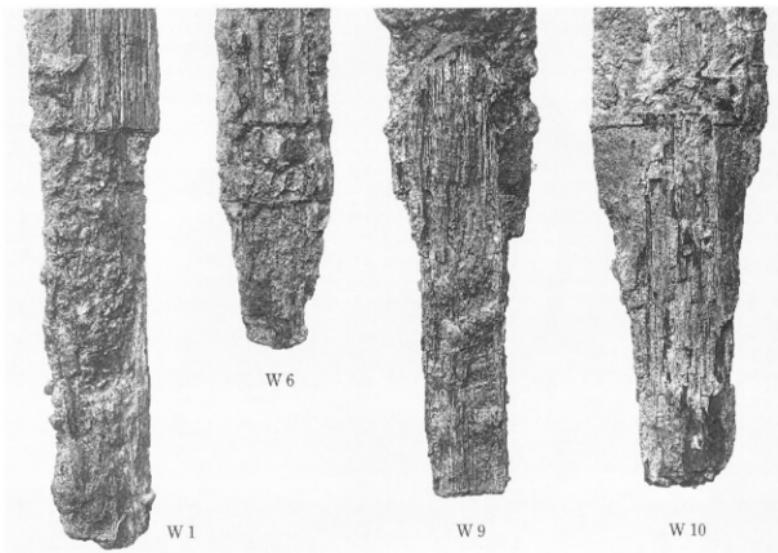
貝製鏡（東京国立博物館収藏品）



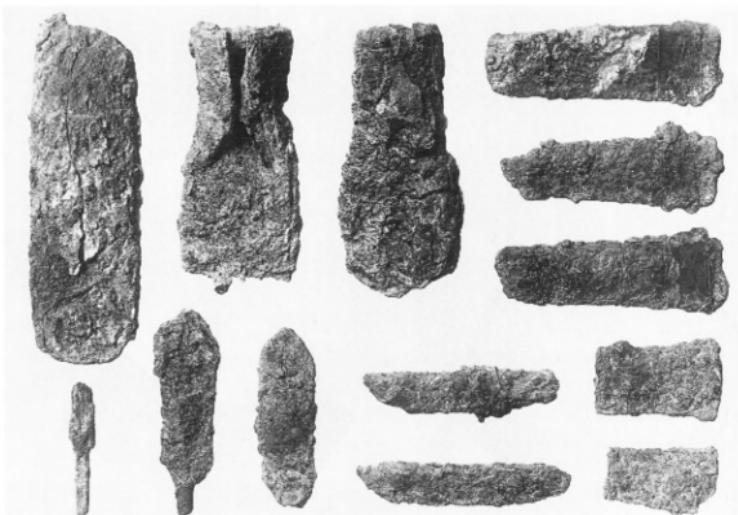
銅鏡（昭和 26 年出土）



石棺外出土の鉄製武器類（昭和 26 年出土）



同上鉄刀・鉄剣・鉄槍の茎部



鉄製農工具類・鉄鎌・有柄有孔鐵板（昭和 26 年出土）



鑿・鏟などの鉄製工具類（昭和 26 年出土）



岩崎山第 1 号古墳の近景（墳頂部から津田湾を望む）



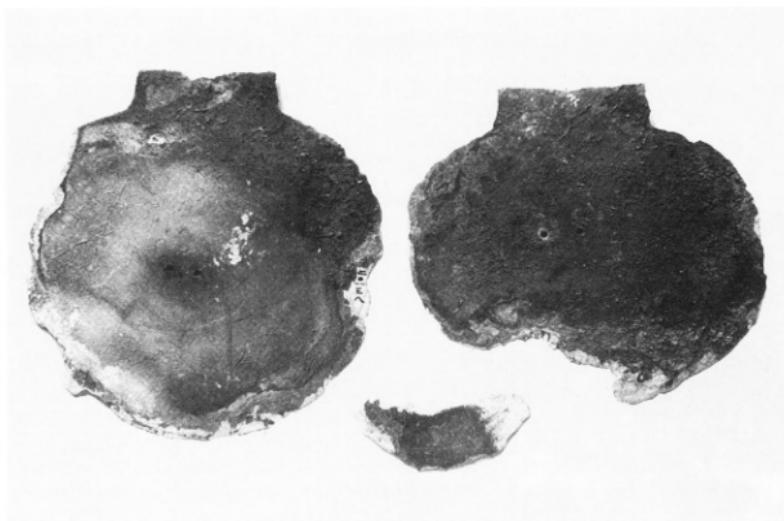
岩崎山第 1 号古墳の箱式石棺（左が西棺）



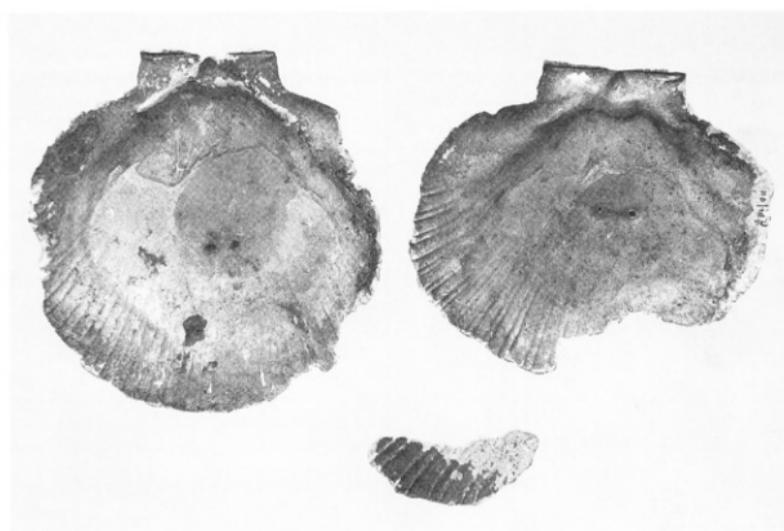
岩崎山第 1 号古墳西棺（A 棺）



岩崎山第 1 号古墳東棺（B 棺）



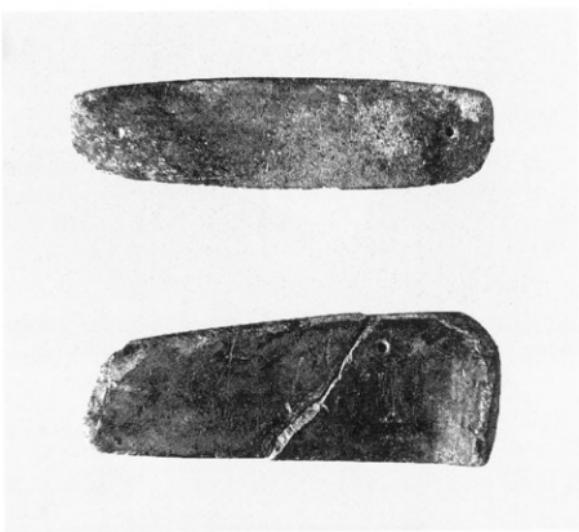
岩崎山第 1 号古墳出土帆立貝製有孔貝製品（表）



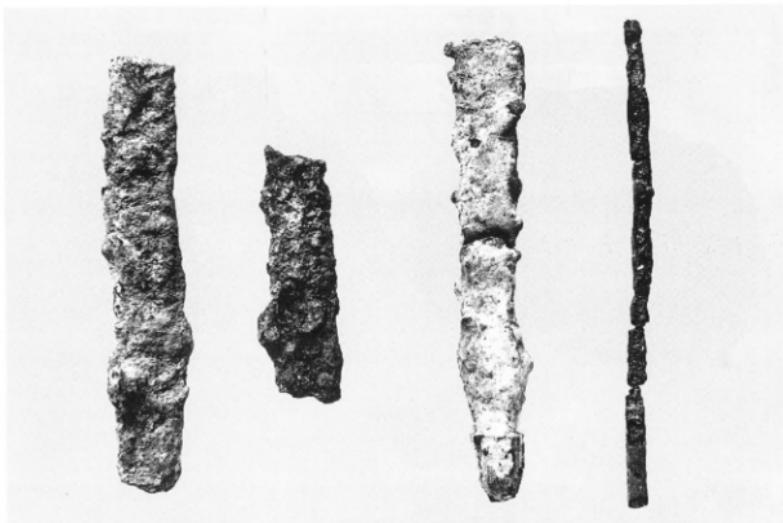
同上製品（裏）



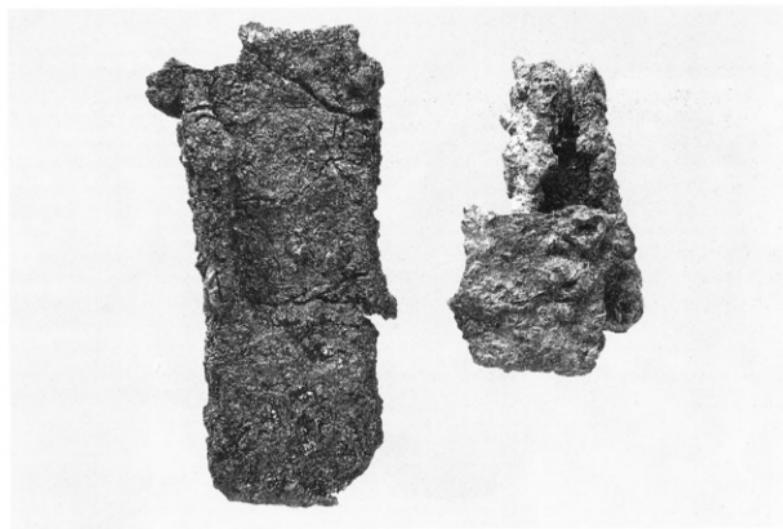
岩崎山第 1 号古墳出土滑石製刀子



岩崎山第 1 号古墳出土滑石製摘鎌（鋸？）・鎌



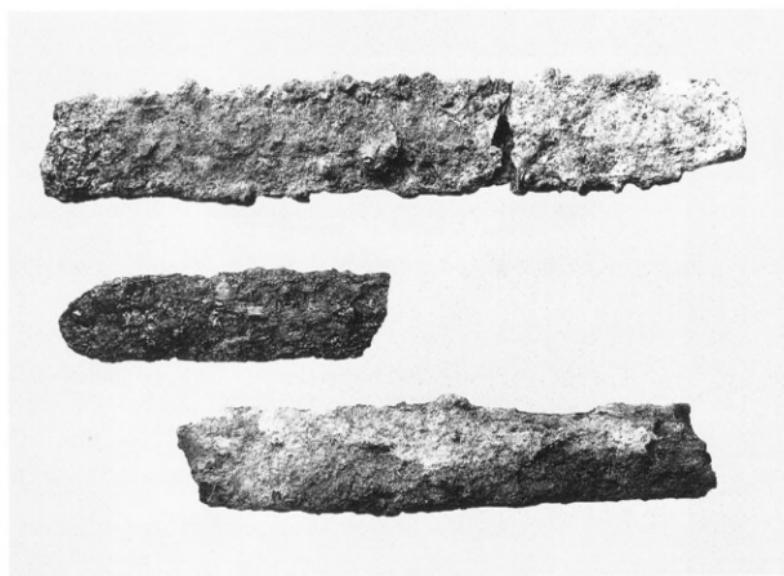
岩崎山第 1 号古墳出土鉈・鑿などの鉄製工具類



岩崎山第 1 号古墳出土鋳造鉄斧と小型有袋鉄斧



岩崎山第 1 号古墳出土鉄刀



岩崎山第 1 号古墳出土鉄劍

香川県綾歌郡綾歌町  
快天山古墳発掘調査報告書

2002

綾歌町教育委員会





快天山古墳近景（右くびれ部から後円部を望む）



快天山古墳出土遺物（銅鏡、装身具類）

## 発刊にあたって

この度、京都大学考古学研究室の調査に基づく『快天山古墳調査報告書』が刊行される運びになりました。大変ありがとうございます、うれしく思っているところであります。

快天山古墳は、古くから地元ではよく知られた古墳であり、部分的な踏査が行われ、記録も残っておりますが、学術的な調査は手付かずのままでありました。昭和20年代に入って、香川県教育委員会によって本格的な調査が実施され、引き続いて昭和26年京都大学考古学研究室の調査が行われたのであります。この両度にわたる調査によって、快天山古墳が3基の割竹形石棺を持つ古墳時代前期の貴重な前方後円墳であることが明らかになり、全国的にその存在が知られるようになりました。

今回、京都大学の調査報告書が刊行されるについては、快く資料を提供され、玉稿をいただいた京都大学名誉教授樋口隆康氏、労をいとわず編集作業を快諾された広島大学大学院教授古瀬清秀氏、石棺を中心として学術的な価値を論じられた香川県歴史博物館学芸課長渡部明夫氏、本年度(平成13年度)墳丘の全面測量をお願いした徳島文理大学文化財学科講師大久保徹也氏のご好意がありました。これらの方々をはじめとする関係者の方々に心から感謝申し上げます。

快天山古墳は、遠い昔、この地に絶大な権力者がいた証であります。同じく町内に位置する県指定史跡「陣の丸古墳」とともに貴重な文化財であり、町の誇りであります。

本報告書が考古学に関心をもつ多くの方々に広く活用されますよう念願いたしますとともに、刊行を契機としてさらに学術的な関心が高まり、将来、快天山古墳が復原された姿で公開できる日の来る事を期待して、ごあいさつとします。

平成14年3月

綾歌町長 二 神 正 國



## 凡　　例

1. この報告書は、昭和 26 年に京都大学文学部考古学教室梅原末治教授が実施した、香川県綾歌郡綾歌町栗熊東字若狭に所在する快天山古墳の発掘調査報告書である。
2. 本文（第 1～4 章）の執筆と図版、挿図の作成は京都大学文学部考古学教室 樋口隆康講師（当時）が行った。今回の報告書作成に当たっては、当初の原稿作成時より相当時間が経過しているが、調査当時の雰囲気をそのまま伝えるため、内容にほとんど手を加えずに収録した。ただし、本文中の遺物解説、図版、挿図の一部については、編集者が支障のない範囲で改変を加えている。挿図の縮尺表示等に不溝いがみられるのもそのためである。
3. 今回の報告書作成に当たって、徳島文理大学文学部大久保徹也講師が中心となって、快天山古墳の詳細な地形測量を実施した。また 3 基の削抜き式石棺についての歴史的位置づけを、香川県立歴史博物館の渡部明夫学芸課長に依頼した。それぞれ今回新たに章を設けて収録した。
4. 出土遺物については今回新たに、編集者と広島大学文学研究科考古学専攻大学院生が香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館に所蔵する銅鏡、鉄器類ほかの資料調査を実施した。
5. 本報告書の編集は広島大学大学院文学研究科古瀬清秀が担当した。図版、挿図の点検と作成は同研究科考古学専攻大学院生打田知之が中心となって行った。

## 目 次

報告書作成に至る経緯	1
第1章 序説	3
第2章 古墳の位置と背景	4
1. 古墳の位置	4
2. 環境	4
3. 付近の遺跡	4
第3章 古墳の構造	6
1. 墳丘外形	6
2. 内部構造	7
第4章 遺物	20
1. 装身具	20
2. 武器	22
3. 農工具	24
4. 土製品	25
付章1 快天山古墳測量調査略報	27
1. 2001年度の墳丘測量調査	27
2. 快天山古墳の墳形に関する既往の理解	27
3. 快天山古墳の墳丘形態と規模	28
付章2 快天山古墳石棺の再検討及び最近の剖抜式石棺の調査例について	33
1. 快天山古墳石棺の再検討	33
2. 岩崎山4号古墳の剖抜式石棺について	37
3. 剖抜式石棺の最近の調査について	38

## 挿図目次

- 第1図 綾川流域の代表的な古墳  
第2図 快天山古墳墳丘地形図  
（昭和26年 横山浩一氏測図）  
第3図 快天山古墳後円部石棺配置図  
第4図 快天山古墳第1号石棺実測図  
第5図 快天山古墳第2号石棺埋置想定復原図  
第6図 快天山古墳第2号石棺実測図  
第7図 快天山古墳第3号石棺埋置状況図  
第8図 快天山古墳第3号石棺実測図  
第9図 快天山古墳出土銅鏡実測図  
第10図 快天山古墳第1号石棺出土の勾玉  
第11図 快天山古墳第1号石棺出土の石劍  
第12図 快天山古墳第3号石棺内出土の鉄劍  
第13図 快天山古墳第1号石棺外出土の鉄鎌  
第14図 快天山古墳第3号石棺外出土の鉄器類  
第15図 快天山古墳第1・2号石棺外出土の鉄斧  
第16図 快天山古墳第1号石棺外出土の鉄器類  
第17図 快天山古墳第3号石棺外出土の土師器  
第18図 快天山古墳出土の鳥形埴輪  
第19図 快天山古墳墳丘測量図（平成13年測図）  
第20図 快天山古墳石棺の形態変化  
第21図 徳島県鳴門市・大代古墳の石棺  
第22図 高松市・長崎鼻古墳の割抜式石棺想定復原図

## 表目次

第1表 快天山古墳石棺3基の計測値

第2表 快天山古墳出土遺物品目

## 図版目次

- 巻頭図版  
上 快天山古墳近景  
（右くびれ部から後円部を望む）  
下 快天山古墳出土遺物（銅鏡・石製装身具類）
- 図版第1  
上 快天山古墳の遠景（北から）  
下 快天山古墳の遠景（南から）
- 図版第2  
上 前方部側から見た後円部  
下 後円部墳頂の快天墓と露出した第1号石棺
- 図版第3  
第1号石棺の出土状況  
（上の左右 石棺身、下 石棺蓋を除去した状況）
- 図版第4  
第2号石棺の石棺蓋と周辺の石積みの検出状況
- 図版第5  
第2号石棺（上 石棺蓋、下 石棺身）
- 図版第6  
第3号石棺（上 石棺蓋、下 石棺身）
- 図版第7  
上 第1号石棺外の方格規矩鏡出土状況  
下 第3号石棺内頭辺部の状況  
（右隅は内行花文鏡）
- 図版第8  
第3号石棺の造り付け枕（下は同上部拓影）
- 図版第9  
第1号石棺外出土の方格規矩鏡（下は同上拓影）
- 図版第10  
上 第1号石棺出土の装身具類（石劍・管玉）  
下、右の上下 第3号石棺出土の内行花文鏡と  
鉄劍
- 図版第11  
上 第3号石棺出土の鉄鎌・鉄矛  
中左 第3号石棺出土の鏡片・鉄鎌  
中右 第2号石棺出土の鏡片・鉄斧など鉄器類  
下 鳥形埴輪



## 報告書作成に至る経緯

1951(昭和 26)年、京都大学文学部考古学教室の梅原末治教授が津田町岩崎山第 4 号古墳および綾歌町快天山古墳の発掘調査を実施した。前者の現場の発掘は樋口隆康講師が担当して、10月 13 日～21日の延べ 9 日間、後者は主に同教室員の横山浩一氏が担当し、3月 10 日から短時日間、出土遺物及び遺構の一部の再調査が行われた。この間、地元から調査に参加した、当時香川大学学生であった六車恵一氏(元長尾小校長、大川町在住)は後に、中学校教員として歴史教育に携わるようになり、香川県の文化財調査と研究に取り組むうちに、両古墳の重要さを改めて再認識し、調査後も未刊のままであった調査報告書が一日も早く出版され、発掘調査の詳細な内容や意義付けが公開されることを望むようになった。ちょうど 1960 年ごろになり、樋口助教授(当時)から諸般の事情から刊行に至っていないが、古墳の調査報告書について原稿がほぼ出来上がっていることを知らされた六車氏はこの後、両町教育委員会に発掘調査報告書の刊行を働きかけるところとなった。この六車氏の奔走と両町の理解によって、ようやく刊行の方向に動き出したのが 2000(平成 12)年のことであった。

同年 6 月 27 日、それまでに六車氏から報告書作成について何度か相談を受けていた古瀬清秀(当時、広島大学文学部助教授)は、綾歌町教育長土岐道憲氏、津田町教育長堀井正和氏、津田町教委課長奥田隆司氏 3 名の広島大学考古学研究室への訪問を受け、報告書の編集作業を担当することになった。同時に、香川県の石棺研究の第一人者である渡部明夫氏(香川県立歴史博物館学芸課長)も報告書作成作業に加わることになった。

同年 7 月 4 日に土岐、堀井、奥田、六車、渡辺、古瀬が京都市にある泉屋博古館に樋口館長(京都大学名誉教授)を訪ね、両古墳発掘調査時の図面類、写真類、原稿、その他一括を借用し、本格的に報告書作成に向けての活動を開始することになった。その後、奥田課長が他部署に移動したので、後任の六車正徳課長が古瀬との交渉を担当することになった。

なお、編集過程で快天山古墳の墳丘測量図が消失していることがわかり、さらに岩崎山第 4 号古墳についても等高線が 1 m 間隔の測量図だったので、両町から調査費補助を受けて、地形測量の再調査を実施することにした。快天山古墳については徳島文理大学の大久保徹也講師が同大学生・大学院生とともに、2001(平成 13)年 4 ～ 5 月の延べ 15 日間、岩崎山第 1・4 号古墳については古瀬が広島大学大学院生とともに、2002(平成 14)年 1 月 24 日～2 月 5 日までの延べ 13 日間をかけて、両者とも 25 cm 間隔の等高線で測量を実施した。また、樋口氏原稿の参考とするために、両古墳の出土資料について古瀬と広島大学大学院生が、快天山古墳関係は香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館において、岩崎山第 4 号古墳関係は津田町立郷土資料館において、実測図作成、写真撮影などを実施した。

報告書作成にあたりましては、泉屋博古館樋口隆康館長、綾歌町土岐道憲教育長・新居 勉同

町教委係長、津田町堀井正和教育長（現収入役）・田中繁則現同町教育長・奥田隆司同町教委課長（現商工観光課長）・六車正徳現同町教委課長、古墳土地所有者の方々、渡部明夫（香川県立歴史博物館学芸課長）、宮谷昌之（香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館館長）・溝淵茂樹同館調査普及課長・松岡宏一同館主任技師、大久保徹也（徳島文理大学文学部講師）・同大学学生諸氏、広島大学大学院学生植林啓介・敦賀啓一郎・打田知之・八幡浩二・加藤 徹・唐津彰治・吉川裕幸・六車恵一（元長尾小校長）、山本一伸（寒川町教委主事）、阿河銳二（大川地区広域行政振興整備事務組合）ほか多くの方々、関係諸機関に大変お世話になりました。記して謝意を表したいと思います。

## 第1章 序 説

香川県綾歌郡綾歌町栗熊の快天山古墳は、その墳頂に石棺蓋の一部が露出していたことにより、早くからその存在が知られていた。しかし、その内部構造については、長い間調査せられないままであったが、戦後になって、全国的に盛んとなった古代遺跡発掘の気運に乘じ、本墳もまた地元の人々によって発掘せられることになった。

すなわち、昭和25年7月、当時の久栄中学校校長大林英雄氏が香川県名勝天然記念物調査委員会の和田正夫、松浦正一氏らと共同で調査を実施し、まず、天井部がすでに露出していた第1号石棺の発掘から始め、棺外から種々の遺物を採集した。その際、別に2つの石棺が埋められているのを見つけ、それぞれからまた各種の遺物が出土した。和田正夫氏は、直ちにこの調査の概要を「香川県教育委員会月報<sup>1)</sup>」に発表した。

梅原末治教授はまたまこの報告を読んで、本古墳の内容の重要さを知り、現地調査の必要を認めたので、昭和26年3月10日、京都大学考古学教室の横山浩一氏を帯同して現地に赴き、県調査会の援助のもとに、出土遺物並びに遺構の一部を再調査する機会を得た。もっとも我々の調査は短時日の滞在であったため、第1号石棺東側を発掘してその構造を確かめ、一部の遺物を採集することにとどまったが、その際、横山氏が墳丘の測量と石棺の実測を行った。

したがって、本墳の現地調査は、大部分が地元の人々によってなされたものであり、その調査の経過と概要是、香川県の報告書<sup>2)</sup>に詳述してある。しかし、該報告書は不備や、一部記述の誤謬や未記録の資料なども認められるので、ここに再録して、本古墳の実態を明らかにしたいと思う次第である。

## 第2章 古墳の位置と背景

### 1. 古墳の位置

香川県の主要部を形成する讃岐平野<sup>3)</sup>は、南の讃岐山脈、北の瀬戸内海に接した複合扇状の沖積平野で、その間に花崗岩層を基盤とした古い地塊が断続して存在し、大川平野・高松平野・丸亀平野・三豊平野の4地形区に分かれている。

快天山古墳は丸亀平野（または仲多度平野ともいう）の東を限る群立する孤峰のうち、城山の南に続く横山山塊の西南方に延びた尾根の先端に位置している。この横山とその南の大高見峰両山塊が相接する部分は、狭い羽床地峠となっているが、この地峠には、古くより金比羅参りで知られた琴平街道が通っていて、高松へ通じる。今は琴平電鉄高松線が走っている。この地峠の西入口の北側、山麓の高添集落背後の松林に覆われた台地上に古墳がある。したがって、古墳の北方は尾根伝いに横山山塊の最高所へ続き、南は狭い低地を隔てて堤山・栗熊の山地へと相対し、東は地峠を抜けて、綾川の渓谷へ通じ、ただ西方のみが開けて、仲多度平野に面している。

今、墳丘の上に3基の無縫塔<sup>4)</sup>が並んでいる。これらは碑銘によって、元この山の南麓にあった円福寺の住職の墓であることが知られるが、このうちもっとも大きな北塔の快天墓にちなんで、この山の名が取られたことが分かる。

### 2. 環境

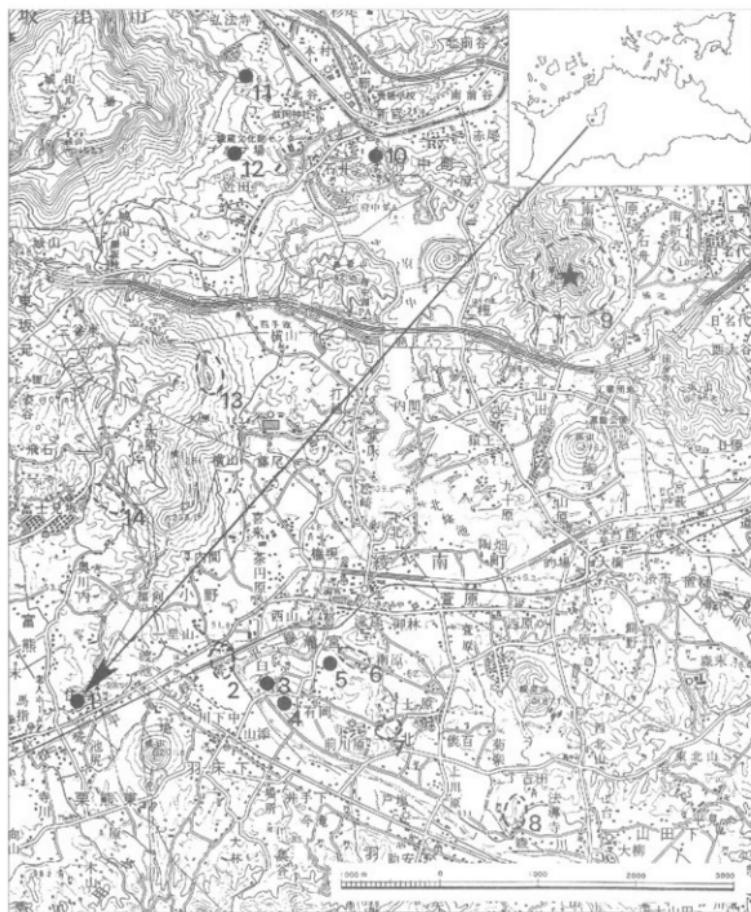
丸亀平野は土器川の氾濫によって形成された沖積平野で、坂出・丸亀・多度津・善通寺・琴平の5市町を含む人口の周密な地域にある。平地には溜池が多く、散村形集落が発達し、全体に条里制の地割りがよく残っていて、古来、早くから開けていたことが知られる。

### 3. 付近の遺跡

北の山塊城山は、天智天皇の治世に対韓政策の防波堤として築かれた山城で、記紀にも録された著名な地である。近年は東の国分台とともに、ここに産する安山岩を使った無土器時代の石器の出土地として、特に注目されている。

本古墳のある栗熊村、およびその北隣の富熊村の丘陵には、弥生時代の石器や土器の出土する地点が散在し、仲多度平野を隔てた西方の大麻山（メサ）や我拝師山（ビュート）にかけては銅剣・銅鐸の出土が著しいところである。

古墳時代の遺跡がまた、この付近一帯の丘陵に多いことは、『県報告書』第3図に示されている通りであるが、その内で、快天山古墳のすぐ北の尾根続きにある薬師山古墳と、東方の住吉神社裏山の古墳は近接のものとして注目され、ともに組合せ式石棺を主体としている。かくて、この地域は早くより人文の発達に恵まれたところとして、本古墳の立つ地理的・歴史的基盤の確かさを理解せしめるのである。



第1図 綾川流域の代表的な古墳

- |             |            |           |            |          |
|-------------|------------|-----------|------------|----------|
| 1. 快天山古墳    | 2. 浦山古墳群   | 3. 津禰西古墳  | 4. 津頭東古墳   | 5. 岡田井古墳 |
| 6. 岡の御堂古墳群  | 7. 滝宮万塚古墳群 | 8. 末則古墳群  | 9. 鷺ノ山石産出地 | 10. 新宮古墳 |
| 11. タイパイ山古墳 | 12. 白砂古墳   | 13. 横山古墳群 | 14. 陣の丸古墳群 |          |

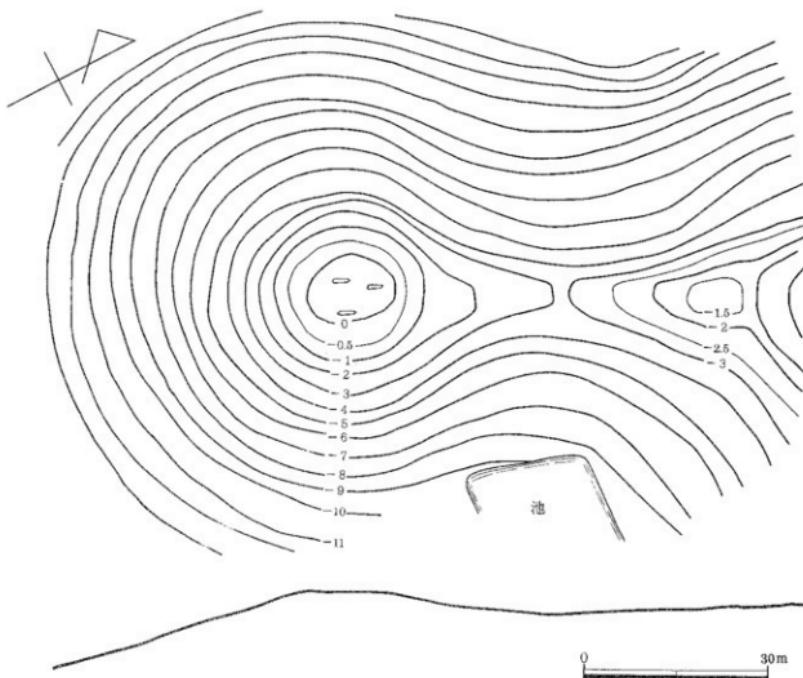
## 第3章 古墳の構造

### 1. 墳丘外形

古墳は丘陵の突端に位置し、稜線上の瘤を後円部とし、北方の尾根の基部の方向に前方部を向けた、いわゆる丘尾切断式の前方後円墳である。

現在、後円部の南斜面と西南斜面、および前方部の前半が開墾されているが、付近一帯は松林と灌木に覆われているので、比較的原形を残していると認められる。

墳丘は尾根の稜線を利用して築かれており、後円部頂部にわずかな土盛りをし、くびれ部は地山を削りなどして形を整えたと思われるが、前方部の先端は、開墾による変形もあって、北方へ続く尾根との区切りが現在では明瞭ではなく、また、山丘を利用して營まれた古墳の通例として、墳丘裾縁を平坦にするという彌域設定に対する地形上の変更を施さないために、外観だけでは、



第2図 快天山古墳墳丘地形図（昭和26年 横山浩一氏測図 写真より作成）

墳丘の形を決定することは困難である。東・西と南方が低いため、南の低地から見ると、隆然として大古墳であることが、一見して知られるが、北方の高所から見ると、単なる円墳と見誤るほどである。ただ、後述するごとく、後円部後方と前方部西側の開墾面において、葺石と埴輪の存在が知られたことから、それを裾縁として、全局の輪郭を推定することができる。

前方部の先端については、平地に築かれた前方後円墳に見るような、直に切られた斜平面をなさないので、これもはっきりしないが、墳丘の主軸線が後円部から次第に下降して、前方部開墾面の北方あたりから、逆に北に向って上昇していき、その変更点あたりに、尾根を東西へ越える小径があって、わずかに低い鞍部をなしているので、そこを一応前方部の先端と見なすことができる。

実測による墳丘の平面図を見ると、正円形をした後円部に対して、強くすぼまつたくびれ部があり、それから前方部は、大きく幅を広げていくが、これは作為された墳形というよりは、むしろ北方の台地へ向って、左右の斜面が広がっていく自然の地形にしたがったものと思われる。

墳丘の東側には、裾縁に沿って、小径があり、その外下方に溜池が1つ存在する。しかし、これを涙と見なす根拠は何もない。

かくて、墳丘の大きさを計測すると、全長100m、後円部径65m、後円部の比高9mあり、前方部はくびれよりやや前寄りのところがもっとも低く、後円部頂より3mの差、前方部先端は少し高くなっている。また後円部頂は、東西16m、南北20mの平坦面をなしていること、一般的の前方後円墳と同様である。

#### 葺石と埴輪列

墳丘の全表面をめくっていないため、葺石と埴輪列の現状を明確にすることはできないが、後円部南斜面と西南斜面の開墾地において認められた知見では、墳頂より9m<sup>9)</sup>下ったあたりを外下縁として、幅5mくらいに、20cm大的の栗石が墳丘の斜面を鉢巻き状に纏っていたことが分かる。また、『県報告書』によれば、前方部西側斜面においても、少量の葺石と、その間に1ないし3mの間隔で、4個の埴輪円筒が並んでいたのを検出している。ただその位置について、記述には、「後円部の頂上から14.5米下った位の高さ」とあるが、同書第1図には8m低い等高線に沿って、図示せられていて、両者の間に食い違いがある。後円部後方で見た実査からすれば、実測図の方が正しいようである。

以上の観察から推して、埴輪は墳丘の裾部に円筒列の存在したことは明らかであり、その量は少なく、一定の間隔を置いて立てられたことが知られる。

墳丘上部の埴輪列については、今日なんらの資料もない。

## 2. 内部構造

本墳の主体については、従来より1つの削抜き式割竹形石棺（以下、石棺とのみ表記する場合はこの形式の石棺をさす）が存在することは、その蓋頂部が露出していたことによって早くより知られていたが、その後の調査によって、後円部には3基の石棺の埋められていることが明らか

となった。その他、前方部の先端に近いところにも、4基以上の組合せ式石棺が、開墾の際に発見されたと報ぜられている。しかし、後者についてはほとんど資料が失われてしまっているので、ここでは後円部に営まれた主体についてのみ記述する。

### 3 棚の配置

後円部に埋められた3基の石棺は、後円部頂平坦面の後方の左右と、前方の中央辺に、一定の間隔をおいて営まれ、しかもその方向は墳丘の主軸線とほぼ平行に置かれているので、3棺の營造の時期には先後があったにしても、当初から計画的に配置せられたものであることを推定せしめる。

すなわち、第1号石棺は後円部平坦面の東南より、既述の3基の無縫塔の列の東側にあり、第2号石棺はその正西方に、4.7mの間隔をおいて平行に位置し、墳丘の主軸線は、ほぼこの両棺の間隙を通過している。第3号石棺は、第1、第2の両棺の北端を結ぶ線から北へ2.7mのところにその南端があるが、主軸線よりも、やや西よりに位置している。ちなみに3棺の中心点間の距離を測ると、次のごとくである。

第1号石棺と第2号石棺の中心距離 5.30 m

第2号石棺と第3号石棺の中心距離 5.90 m

第3号石棺と第1号石棺の中心距離 6.40 m

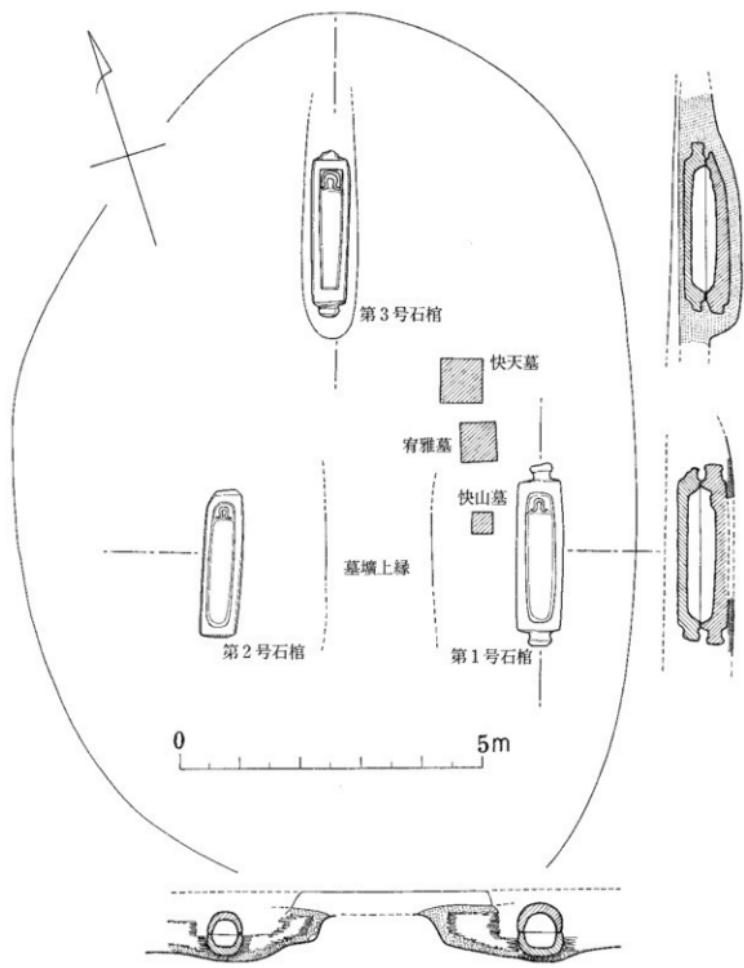
第1表 快天山古墳石棺3基の計測値

		長		幅			高	刺り込み		
		含突起	体部	頭部	中央部	足部		長	中央幅	深
第1号石棺	蓋	290	250	70	80	75	43	215	55 (51)	28
	身	300	255	71	73 (77)	71 (74)	45 (42)	223 (217)	50 (52)	29 (28)
第2号石棺	蓋	266	235	60	63	60	34	210	43	20
	身		233	40 (58)	65	60	36	210	44	21
第3号石棺	蓋	287	239	57	56	46	40—34	207	40	22
	身	275	238	53	55	46	38	205	40	18

( )は県報告書の数値 (単位 cm)

### 1. 第1主体

第1号石棺は地山をうがった土壙内に安置せられ、その周囲に板石をもって築いた石櫻によって被護せられたものであるが、その構造は、上部が何回かの盗掘によってすでに破壊せられ<sup>⑨</sup>、また最初の発掘者がこれらの遺構に対する十分な知識を有しなかつたために、乱掘破壊が著しく、



第3図 快天山古墳後円部石棺配置図

遺存していた下部の構造に対しても不明な点が多い。今、『県報告書』や大林英雄氏の発掘時における観察記録に基づき、推測を加えながら説明してみよう。

現在、遺構は石棺の東側部において、その上半部がすでに破壊せられ、しかも遺構の位置が墳丘頂平坦面の東縁に近いところにあるので、土壙並びに石櫛上方の構造ははっきりしない。しかし、石棺の西側部には、3基の無縫塔が建てられたために後世の破壊が蓋頂部のみに限られ、土壙並びに石櫛の大部分が比較的よく残っていたので、大林氏が棺の南端より北へ80cmあたりのところで試みられたセクションによって、土壙と石櫛・石棺の関係がたどられるようである。

すなわち土壙は、棺の西側において、棺身から1.50mのところに墳壁があるので、棺が土構内の中心に置かれていたと仮定すれば、東側もほぼ同じ間隔があったと見なし、それに棺幅を加えると、東西の幅は3.80m前後となる。一方、南北の長さについては、棺の両端において掘り方の線を検出するに至っていないが、棺身と土壙壁との間に、西側と同じ程度の空間を認めるすると、ほぼ5mぐらいになるのである。

次に土壙の深さは、地山の上面が櫛壁の最高所とほぼ同じ高さにあるので、下底までの深さは80~90cmあったようである。土壙壁は、下底に向って多少傾斜しているがほぼ垂直に近く、底面も周辺部においてやや上がっているが、櫛の壁体の中央辺まで緩く下降して、そこから棺下までほぼ水平である。

この土壙の底面には、粘土が1層張りめぐらされている。それは、厚さ10cmほどで、床面のみでなく、四周の土壙壁面にも及び、さらに石櫛の壁体の上面も包んでいたようである。ただ、櫛壁の外周には、粘土層との間に大型の河原石を一列に敷き、棺底直下には、粘土層内に、棺外底に接して、小型の礫を詰めた部分があったという。これは棺底を縦に走った排水溝の断面であるかもしれない。

石櫛は平板状の安山岩を水平に積み重ねて、棺の四周を開いたものであるが、その構造は古式古墳に通有な、いわゆる竪穴式石室のそれとは多少異なる。まず、棺の西側においては、棺身の外側の曲面に応じて、下方を内方にせり出して棺身に密接して板石を重ね、棺身の上面から3cmばかり下がったところまで積んで、そこに1つの平面を設けて、上部に空間を残している。この石積みの高さは棺底から約30cmほどである。次いで棺側から外方へ30cm離れたところにおいて、さらに上方へ板石が水平に積み上げられていて、ほぼ棺蓋上面の高さまで達し、その石積みの内面はほぼ垂直な壁面をなしている。この壁体は土壙の外周の粘土層までの間に密に水平に積んであり、幅は棺側から1.45mに達する。しかして、櫛壁上半の垂直な壁と石棺の間の空間には、同じ板石が粘土と混じて乱雑に嵌め込んで詰められている。棺の東側においては、棺身に密着して水平に敷かれた石積みは残っていたが、棺とやや離れて棺蓋頂まで築いた垂直な壁面はすでに破壊せられていた。

後述するごとく、棺外の副葬品が、棺身に接して、その上口よりやや下がった石積みの上面に置かれていたことを考え合わせると、この棺身に接し築かれた石積みは壁体というよりは、むしろ床下を構成するものである。すなわち、櫛室の床面は石棺の下方になくて、棺身の上口に近い

上位にあり、したがって、棺身は床の内部に埋まっていることになり、一般の石室の床の概念とは異なるようである。

石槨上方の被覆については、既述のごとく、すでに破壊せられているので、正しく原形を復元することはできない。しかし、竪穴式石室にもっとも多く見られる長方の大石数枚を横架けした式ではなかったことが、その用材が一片も検出されなかつた事実によって推測される。今、槨室内には、槨壁に使われた用材と同じ板石が、乱雑に詰め込まれていたが、これが原初の構造のままだとすれば、このようにして槨室内の空間を填めた上に、同じ板石を敷いて、槨室と石槨の全体を覆うことは可能である。墳頂に並ぶ無縫塔の傍らに後世発掘した際に取り出された同じ板石が積み上げられており、これらは、現在失われている石槨東側の壁体から取り出されたものという推定が当然考えられるが、また被覆部の板石も含まれていたと見なすこともできよう。

石槨西側の観察では、壁体の上面に1層の粘土層が被っていた。したがって、槨室の上面の板石被覆の上も、粘土層で覆われていたことが推測される。とすれば、槨室内の空間を填めていた板石群は、粘土塊を混じえていたというので、あるいは初期の盗掘の際に被覆部の用材をここに遺棄したと見なすこともできる。

#### 第1号石棺

第1号主体内に安置せられた第1号石棺は、身と蓋がほぼ同形・同大に作られ、外方の断面が半円形をなし、両端側が直に切られている点で、剃抜き式割竹形石棺の典型的なものであると見なすことができる。角閃安山岩を用いて、極めて入念に作られている。

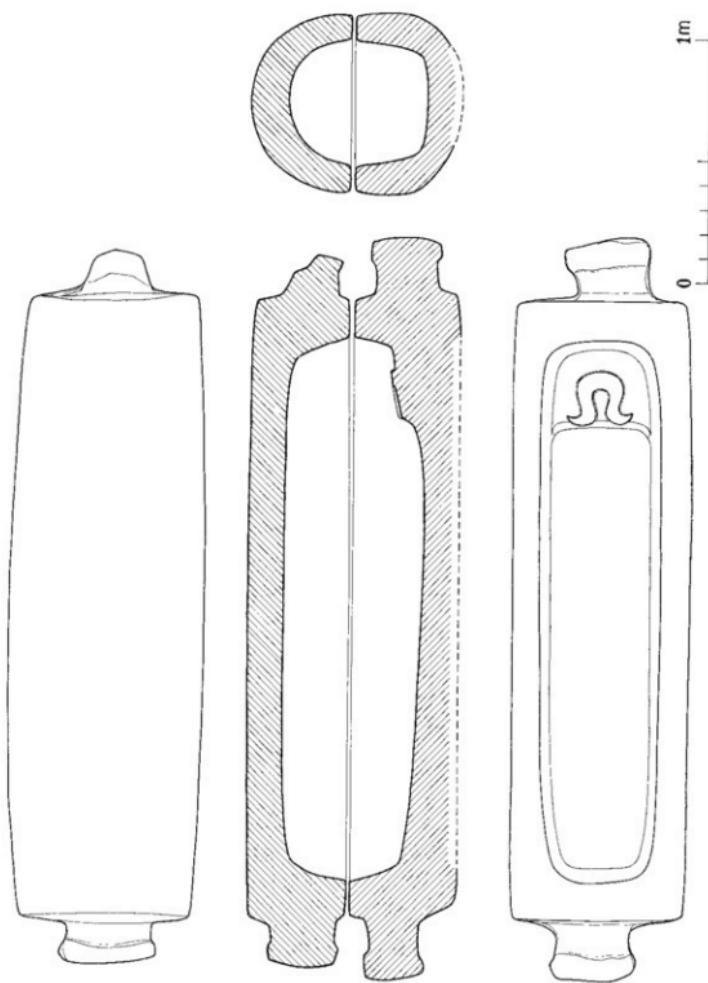
身は中央部で、幅がわずかに広くなっているが、頭部と足部とは同幅である。周縁に長側部で幅12cm、短側部で幅15cmの平面を残して内部を削り抜いてあるが、四隅を丸くし、側壁は多少傾斜している。床面は平直で、足部の方がわずかに浅いが、『県報告書』では逆に足部が深いという記述になっている。

頭部には石枕を彫りだしているが、それは内底の北端より30cmの間を床より7~8cm高くし、その面上に、中心を径8cm、深さ1.7cmの皿状に窪めて、後頭部を受けるようにし、その窪みを囲って、馬蹄形の両端を外方に反転させたいわゆる引手形の突帯を巡らせている。

棺身の繩掛突起は短側外方に1個ずつあり、太く短い式で、基部がくびれており、作りはあまり整正でない。現在、蓋部は折れて3片に分かれている。両端は北側と西側の縁部が多少損じている程度で、ほぼ原形を残しているが、中央の一片は両側縁の中ほどが損失している。幅は中央やや足よりのところが膨らんでいる。内面は身に応じた深い削り込みがあり、同じく太くて短いが、北端のものは損傷が著しい。

#### 副葬品の出土状況

棺内には土砂が充满し、松の細根が蓋・身の合わせ目から侵入して内面全体に広がっていた。この土砂内にはガラスの鏡片、石油ランプのホヤ、茶碗片などが混在していたといわれるが、これらは明治20年頃の発掘に際して破棄せられたものではないかと報告者は見ている。当初の副葬品は棺内には一物も見いだすことができなかつた。



第4図 快天山古墳第1号石棺実測図

棺外の遺物は、次のものが採取された。まず、棺身南の繩掛突起の西南隅辺りで、板石床面の上に鏡が1面背面を上にしておかれ、その上に板石1枚を被せてあった。そのためか、鏡は小さく碎かれ、その3分の2が東の1段低いところにあり、他は西南のやや高い粘土間に挟まれていたという。またこの鏡に接していた粘土や石には朱の付着痕を認めたという。したがってこの鏡は棺内にあったものがここに移されたとみることもできる。

また、北突起の西側では、櫛壁と棺との間の土砂内より石剣の破片1個を見いだしたが、これも棺内から持ち出された可能性がある。

棺の東側では板石床面に鉄器類が並んでいた。棺身北端より60cm南に、扁平鉄斧が刃を棺と反対側に向けておかれ、その南30cmのところに鉄鎌群が一括してあり、さらに、その南15cmのところに有袋鉄斧が刃を東に向け、横にすぐ隣接する板石と板石との間にはまりこんでいた。棺の東南角に近いところでは、鉄短剣片が鋒を南にして、石櫛床面から落ちて、棺身と床の石積みとの間の隙間の中ほどに落ち込んでいた。さらに発掘後ここから取り出された土塊の中から、管玉2個、鉄鎌2本、鉄刀子片4個などを大林氏が採取した。その他、勾玉1個、管玉2個、石剣1個が、棺身の東側の中央部辺りにあった粘土内より出たとあり、これらもまた、副葬品の取りこぼしであろうか。

棺身の西側では、板石床面より鉄器類が出た。棺身の西北隅近く、鉄鎌頭1個があり、それより60cm南に鉄剣1口があって、その上に板石を被せていた。さらに1m離れたところに鎧と整が1本ずつ、その南40cmのところには短剣1本が鋒を南に向けて棺身に接しておかれていた。

それ以外にも、2口分の鉄剣片が西側から出ている。

## 2. 第2主体

これは墳丘の主軸線に対して、第1主体と対称的に西方に営まれているが、現状は、逆にその西半部が破壊され、東側がよく残っているので、それから原形を復元することができる。それによると、細部に多少の相違はあるが、土壙内に石櫛を築き、石櫛を安置した構造は第1主体と同じである。

第1主体の土壙と第2主体の土壙との間は、約2mほどあって、現地表下20cmのところに地山の上面が掘られないままに残り、そこには何らの設備もなかった。

土壙は、棺の東側における観察によれば、棺より1.4m離れて櫛壁があり、現在破壊されている西側も同じ間隔があったと仮定すれば、棺幅を加えて、東西の幅は3.50m前後になる。また南の櫛壁は石棺の南端から1m離れて検出され、北壁は確認されなかつたけれども、同じ間隔をもっていたと見なせば、南北の長さは4.70m近くになろう。

この土壙の床面は第1主体のごとく平直でなく、2段に掘り込まれている。すなわち、東側の断面で見ると、土壙の上口は地表下20cmにあり、そこから50cm垂直に下って第1段目の床面があり、櫛壁の周縁から50cm中心へ入ったところで、第2段目の掘り込みがあり、その壁面は傾斜して30cm下り、最底面に達している。その中央辺りは多少下っていて、地表面から1.10mの深

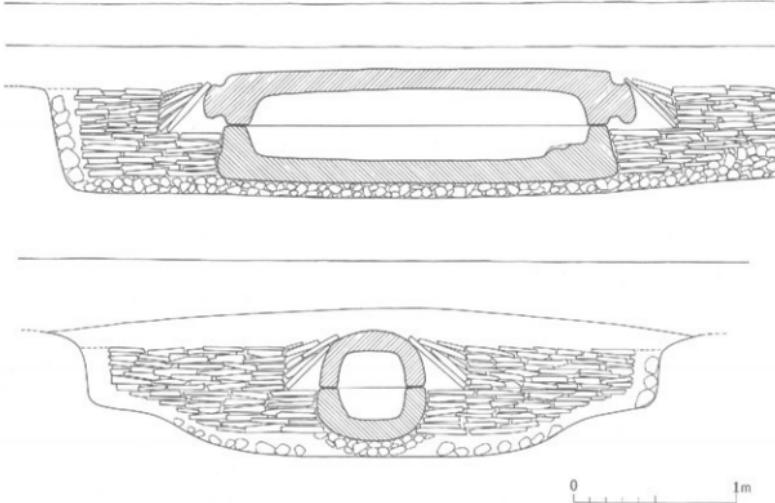
さがある。

この土壌壁面に粘土を1層貼っており、側壁面では厚さ10cmほどであるが、棺身の下位では厚さ20cmくらいになる。この粘土層と石槨の壁体との境目には、大型の栗石を並べており、棺は直接粘土面上に乗っているが、ただ棺底に接するところに、幅20cm、厚さ10cmの間に小型の躰を詰めた層が、断面に検出された。これは第1主体の場合と同様、棺下を縦に走っている排水溝と見ることができるかもしれない。

石槨は、また第1主体と同じ構造である。すなわち、槨室の床は棺身に密接して水平に積んだ板石からなり、その上面は棺身の上口よりわずかに低い所にあって、その石積みの高さは約30cmある。ただこの石積みと棺身の接着面には多少粘土を当てていたという。この板石床面の上には後述するごとく副葬品が置かれていた。

槨壁はこの板石床面の上に、棺から一定の間隔をおいて積み上げられたもので、東側においては現在、棺より1.30m離れた辺りに壁体が残っており、その高さは20cmほどあるが、内壁面は、板石に出入りがあって、本来の垂直な内壁面がどこにあったのかははっきりしない。棺と槨壁との間隔は第1主体の場合よりも広かったのではないかと見られている。槨内の空間には同じ板石を充填しているが、それは棺蓋にもたせかけるように斜めにおいて、槨室の上面を被覆する板石敷きに続いているものと推測されている。

槨の壁体の全幅は1.3mあるが、その下底は水平をなさず、土壤の床面が2段に掘り込まれているのに応じて外方は浅くなっている。

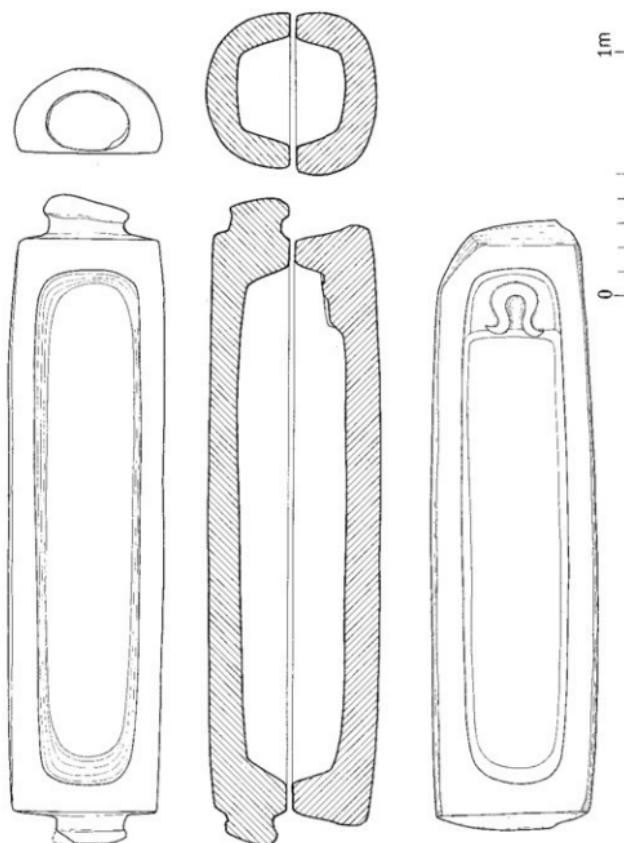


第5図 快天山古墳第2号石棺埋置想定復元図

石櫛並びに石棺上方の被覆については、棺蓋頂面の表土は厚さ 18 cm あり、棺蓋の上には板石を不規則に積み掛けている様子が、第 1 主体の場合よりもよく残っていた。また、東側の壁体の上方では、厚さ 12 cm の粘土層と、さらにその上に厚さ 36 cm の表土層があった。したがって、石棺の上方に板石を斜めに積み上げた上、さらに粘土をまき、土を被せた様子が大体窺われるようである。

#### 第 2 号石棺

第 2 主体の内部にあった石棺は、蓋が割竹形の典型をなしているが、身は中膨らみであるうえ



第 6 図 快天山古墳第 2 号石棺実測図

に、頭部の幅がかなり狭くなり、両端側は繩掛突起がなく、面は下に向って外方に張り出しており、断面もまた、上面よりやや下がった胴部が張り、扁平でむしろ舟形棺身の趣に近いといえる。北東角が大きく面取られていて、全体の作ゆきもそれほど整っていない。

内面の割り込みは整正で、第1号石棺と同じく、隅丸長方形にえぐってあり、周縁の幅は11cmあり、北端下床に彫りだされた石枕も全く同じ形式である。内面には朱が一面に塗られていた。

蓋は今中央で2つに割れているが、整正に仕上げられており、両端についた繩掛突起は太く短く、その基部にくびれがあり、第1号石棺と同じである。ただ、北の突起は斜めに削られている。

規模は第1号石棺よりもやや小さい。角閃安山岩製である。

#### 副葬品の出土状態

棺は蓋が2つに割れて、少し東にずれ、南端において、蓋と身の合わせ目に小石が挟んであつたなどから推して、一度盜難に遭っていたようである。内部には土砂の流入は少ないが、水が充満しており、樹の細根が網を張りめぐらしていた。底部には朱が厚さ1cmも堆積し、人骨は中ほどから北部にわたって残り、頭は枕部のところから床面に落ちて、横倒しになっており、胸部辺りに三角形の板石片が置かれていた。腕や足の位置は乱れているが、足は膝を多少曲げていた様子である。ただこれらの人骨は腐朽度がひどく、触ればぼろぼろに破壊してしまったという。採集せられた歯（下顎の門歯3、犬歯1、小白歯1、大臼歯2、上顎の小白歯1、大臼歯1）を大阪大学弓倉繁家教授の観察した結果では30歳代の女性とのことである。

副葬品として棺内には胸部横辺りから、内行花文鏡片2個、石枕の東よりで鉄刀子片2個が検出された。

棺外の遺物としては、西側において、中ほどからやや北寄りのところにあった粘土塊中より、管玉1個、鉄劍片3個が採集され、棺外東側でも、中央からやや南よりの粘土内から、鉄斧1個が刃を斜めに棺の方に向けて水平に置かれていたといい、また、南の繩掛突起付近から管玉1個も検出された。

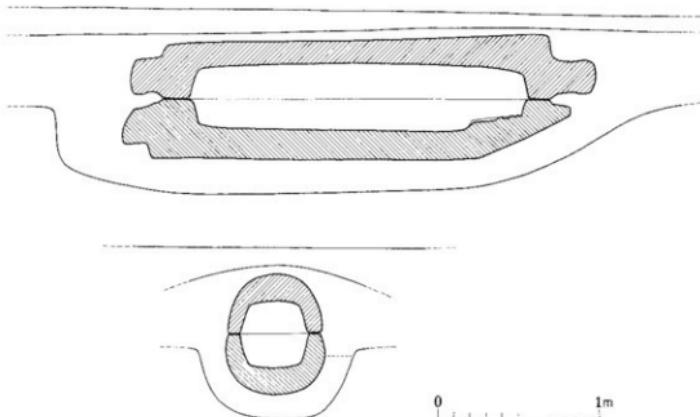
しかし、これらがもともと棺外の副葬品であったかどうかは疑わしいようである。

### 3. 第3主体

これは先の第1、第2主体と異なり、地山に掘り込んだ土壤内に、粘土層で覆われた石棺を直接、安置した式である。

土壤は石棺の身を入れるだけの浅い長方形をしているが、東西の両長側壁は下に向って湾曲しており、南壁はほぼ垂直な壁面をなしているが、北側は壁面をなさず、石棺の北端下辺りから、土壤壁が次第に上昇して、地山の表面に達する斜面をなしている。これは石棺を壙内へ運び込むための通路とされたからであろうか。

壙の大きさは、東西両壁は棺身から15cm（大林図では西40cm、東30cm）離れており、南面では、棺の南壁から20cm（大林図では50cm）離れているので、東西幅約100cm（大林図では130cm）、長さ34～35cmくらいあったと見られる。土壤の深さは、棺身の上面より5～6cm下がった



第7図 快天山古墳第3号石棺埋置状況図

ところに地山の上口面があるので、比較的浅く43cmくらいだったと思われる。したがって、棺身の上面と棺蓋は土壤よりも上に、飛び出していたことになる。

この中に石棺を安置するに当たって、全面を粘土によって包んでいるが、これは營造の際には、棺身の下に敷いた下底部と、棺蓋の上覆部と分かれるようである。全体が同質の粘土を使っていて、両部の界線は明瞭ではないが、棺身の上面から約10cm下がった辺りの粘土層内から、副葬の鉄槍が出土しており、それはちょうど、土壤の上面とほぼ同じ高さに当たっている。したがって、後述のごとき他の古墳の例と考え合わせてみると、両部に分かれて營まれたことが確かである。まず土壤底に粘土を厚さ20cmに敷いて、その上に棺身を安置し、両側にも粘土を詰めた後、遺骸・副葬品の埋葬を行い、棺蓋で蓋をし、さらに全体を粘土で被覆し、盛り土を施したと見られる。

棺蓋上の覆土は現在、棺の南端辺りで厚さ20cmあるが、北端部では5cmしかない。これは北端部が後円部頂平坦面の端近くに当たるので、上部の被覆は多少削られたとしても、当初より浅かったと見ることができる。

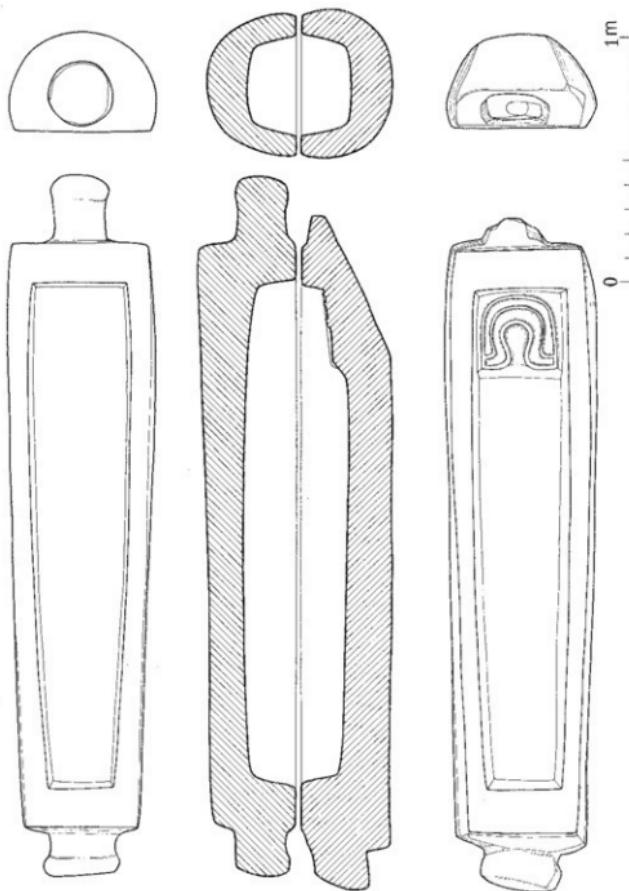
土壤の壁面に沿って、上方の堆積を検すると、両側地山の上面から上に、粘土層が厚さ32cmあり、その上に表土が厚さ15cmばかり認められる。この粘土層は、棺蓋の上を饅頭形に覆った上覆部の両端が垂直な断面に現れているのであろう。

### 第3号石棺

同じ石材を割り抜いて作った割竹形石棺であるが、やや小型であり、身部は多少舟形の趣をもっている。すなわち、上面から10cm下がった中胸部がもっとも幅広く、底は平らに近いので、その断面は半円形というよりは、内湾式口の鉢形を呈しているということができる。しかも底面の

北端は斜めに削られて、船の艤底のような形をなしているので、北面側は高さが小さい。上面の幅は頭部が足部よりも大きい。両端の縄掛突起は同じく太く短い式で、基部にくびれがあることも、他の石棺と同じであるが、北突起は削られて小さくなっている。

外面の作りは粗いのに対し、内面の彫り込みは極めて整正で、四隅は丸みがなくて、角張っており、床面は足部が頭部よりも多少浅くなっている。上面の周縁は両側は7cmしかなく狭いが、南北端は18ないし15cmある。



第8図 快天山古墳第3号石棺実測図

頭部にある石枕は同じく北端より 35 cm の間を 1 段高くして、その上に彫りだされているが、中央の皿状の窪みを囲む引手形の突帯は、その内外両縁に細かい突帯を残して、その間に七面状に凹ませており、さらにその外側にもう 1 本の細突帯を巡らし、引手形の両端をそれに密着させているので、先の 2 棺の石枕よりやや複雑である。

棺蓋は今 4ヶ所で割れ、5 片に分かれているが、作りは整正である。頭部が足部に比して幅も広く、高さも大きいが、内面の彫り込みはかえって頭部の方が浅い。断面では下面よりも、12.3 cm の中胸部がもっとも膨らみをもっていること、身の場合と同様である。彫り込みの周縁は棺身と同じである。

繩掛突起は南のものは同じく太く短い式であるが、北のものはやや幅が狭く、長く飛び出している。

内面には朱が一面に塗ってあった。

#### 遺物出土状態

棺内には多量の朱が遺存していた。人骨は 1 体分が伸展葬され、頭骨は石枕からずり落ちて、棺の内底肩の辺りにあったという。第 2 号石棺内の人骨と同様、弓倉博士の歯牙による鑑定では、30 歳前後の男子とのことである。

棺内の副葬品としては、鏡が 1 面、石枕のある台状の東北隅に鏡背を上にしておかれ、さらに鉄短剣 1 本分の破片が石枕付近に散らばっていた。すなわち、柄と刃元部は石枕の南下方の床面にあり、それに続く刃身部片が石枕の東側に、その他の破片が西側から北端部にかけて並んでいた。

棺外の副葬品としては、南の繩掛突起の西側 6 cm のところ、表土から 39 cm の深さに、土師器壺 1 個が上向けにおかれていた。

そのほか棺の東側で、棺身東南隅より、55 cm 北、20 cm 東に離れたところで、棺身の上面より 10 cm 低い深位から、鉄槍身 1 本、鉄鎌 1 個が出土した。刃を棺側に向け、先端を北にして置かれていたという。

また、同じ棺の東側中央辺りから掘り上げられた土の中より、鉄鎌 1 本、鏡片 1 個が出土したという。ただし、『県報告書』にはこの鏡の記述はない。

以上の後円部に見られた主体構造のほかに、前方部にも別の埋葬が行われたことは既述した通りであるが、昭和 13 年前方部先端付近を開墾したとき、4 基の組合せ式石棺が発見せられたという。そのうち大きな組合せ式石棺内から、小型の珠文鏡（径約 5 cm）が出、もと、同村小学校に保管されていたが、今その所在を失っている。『県報告書』には、その拓影（第 4 図）を載せ、『栗熊村誌』を引いて、昭和 13 年 1 月 21 日、快天山の山頂北約 1 町の南斜面の古墳から出たと記している。

## 第4章 遺 物

本古墳出土の遺物は、何回かの発掘に際して、それぞれ検出され、その大部分については、すでに『県報告書』に解説されている。しかし、それ以外の遺物もあり、また解釈に多少相違も認められる。

まず品目を表示すると次のとくになる。

第2表 快天山古墳出土遺物品目

	第1主体		第2主体		第3主体		その他
	棺内	棺外	棺内	棺外	棺内	棺外	
A. 装身具							管玉1、小玉1 (第1号石棺外出土) 鎌田共済会
鏡	1	1			1	破片1	
管玉	3		2				
勾玉	1						
石鉗	2						
B. 武器							
鉄矛							
鉄劍	4						
鉄刀	破片3		3	1		1	
鉄鎌	20						
C. 農工具							
鉄刀子	3		2				
鉄鎧	2						
鉄斧	2			1			
鉄鎔	1						
鉄鋤	1					1	
D. 土製品							
土師壺						1	

### 1. 装身具

#### 〈鏡〉

##### 獸文縁方格規矩四神鏡 第1号石棺出土

細かく砕けているが、接合すると、内区の約4分の1を欠く程度で、大体の鏡式を推すことができる。径18.5cm。反りはかなりある。全体に銹化が進んでいて、臺蝕斑が認められるが、漆黒色を呈した良質の白銅鏡である。背面の文様は鈕を囲む方格内に、円圏小乳と交互に十二支の文

字を配置しているが、その書体はゴチック体に近く、通有の例とやや趣が異なる。方格と鉢との間の四隅に「長宣子孫」の銘が1字ずつ置かれている。TLVの間に配せられた図像は、四神の内、朱鳥2羽と青龍1とが認められ、他の2神雲は欠けているが、朱鳥と青龍との間には、腰を曲げた怪人の像がある。これは他の四神鏡においても必ず青龍と隣接して配されているので象龍氏を描いたものであろうか。ただこの鏡の図文は細線ではなく、画像鏡的な趣のある表情が特徴である。

外区の平線は比較的幅が狭く、圓帶に鳥獸を継ぎ文として巡らしている。

鉢孔の上辺や図文には手馴れの痕が認められる。中国後漢盛期の作である。

#### 内行花文鏡片 第2号石棺内出土

今、内行花文2個分が残っているだけであるが、復元すると六花文鏡になるようである。黄緑色の銅質、薄手の作りである。

背文は、円座鉢の周りに、櫛目文帶と素文の突帶があり、次の内行花文帶では、内行花文間の空所に、細線で四重山形文を入れている。内行花文帶の外に、今一つの櫛目文帶がある。平素縁部は欠けてしまっているが、推定径12cm内外のものであったと見られる。仿製。

#### 内行花文鏡 第3号石棺内出土

完形品で、径9cm、反りの強い薄手の鏡、鉛黒色をした仿製鏡である。背文は円鉢をめぐって、二重に細線圈があり、その外の6個の花文の間には、3珠文を配し、それをめぐる櫛目文帶があって、素縁に続くが、縁と内区を区切る段は低い。

#### 鏡片 1 第3号石棺外出土

素縁の一部で、内側に櫛目文帶のあったことが知られる。断面形や銅質の特徴から見て仿製で、先の例と同じ内行花文鏡ではないかと見られる。径は復元してみると12cmあり、あるいは第2号石棺内から出土した鏡の縁部に当たるかもしれない。

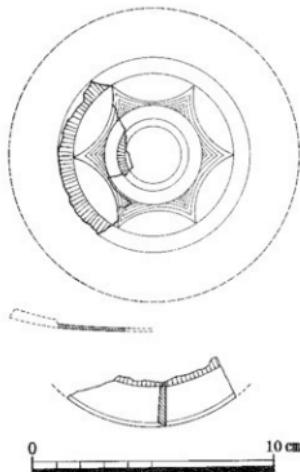
#### 珠文鏡

現存しないが、昭和13年1月21日に前方丘にあった組合せ式石棺の中から出土したという鏡について、拓本1枚が残っている。径5cm内外の小鏡で、その4分の1を残しているが、背文は、幅の狭い素文縁の次に銘文文帶と櫛目文帶があって、内区には多くの珠文が認められる。「栗熊村誌」には質は白銅で、鉢孔に麻紐が付着していたと記してある。

#### 《玉類》

#### 勾玉 1個 第1号石棺外出土

半透明に近い、緑色の美しい色澤をした硬玉製である。片面の頭部に近いところに小さい亀裂

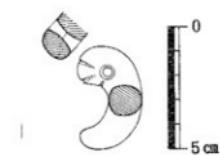


第9図 快天山古墳出土銅鏡実測図  
(上 第2号石棺内出土、  
下 第3号石棺外出土)

があり、同じ面の尾部に近いところに疵痕があるが、頭部から尾部に向って徐々に細くなり、整った半弧形をしている。

長さ 2.1 cm、厚さ 0.65 cm、やや太い頭には、孔に向って 3 本の刻線があり、いわゆる丁子頭をなしている。孔は両側から穿ち、内部の孔径が両端よりも小さくなっている。頭の刻線や孔の所に朱が付着している。

- |    |     |                     |
|----|-----|---------------------|
| 管玉 | 3 個 | 第 1 号石棺外出土          |
|    | 1 個 | 第 1 号石棺外出土 (鎌田共済会蔵) |
|    | 2 個 | 第 2 号石棺外出土          |
| 小玉 | 1 個 | 第 1 号石棺外出土 (鎌田共済会蔵) |
| 石釧 | 2 個 | 第 1 号石棺外出土 (県立図書館蔵) |

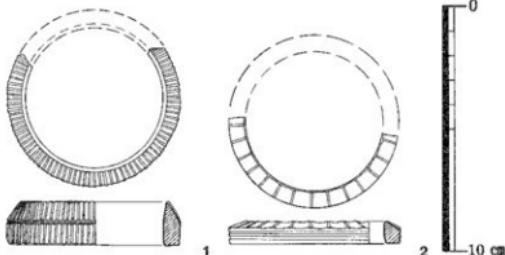


第 10 図 快天山古墳第 1 号  
石棺出土の勾玉

棺外東側に遺棄せられていた粘土塊内より出土したものは、2 片を存しているが、接合すると、円形の環体の 3 分の 2 を残している。全面風化が著しく、緑灰色を呈した碧玉製である。外形 7.5 cm、内径 6 cm、高さは内縁で 1.65 cm を測り、体幅は 0.8 cm ある。外側は傾斜の強い上半部と、垂直な下半部からなり、それぞれを厳密に配列した刻線で飾り、その両面の界には沈線 1 本が水平に走っている。内側の垂直面と下面は、やや膨らみをもった素面である。

第 2 の石釧は棺の北端、繩掛突起の西側から出土したもので、器身のほぼ半ばを遺存している。濃緑色をした光滑度の高い碧玉製品である。円形の環体は外形 7 cm、内径 5.6 cm、厚さは内縁で 1 cm、外縁で 0.8 cm を測る。

また体幅はこの上面で 0.8 cm、下面で 0.6 cm ある。上方の傾斜面には内縁のところで 0.6 ~ 0.8 cm の間隔に刻線 1 本ずつが放射状に刻まれ、その線と線との間はヒ面状にえぐつてある。外側面には、2 本の沈線が平行に走り、内側と下面は素面のままである。

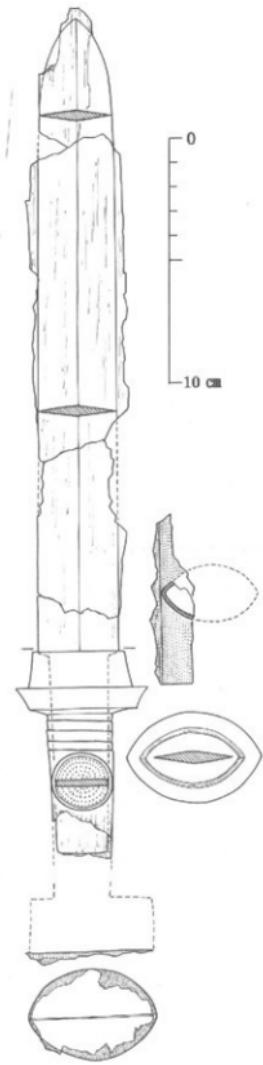


第 11 図 快天山古墳第 1 号石棺出土の石釧

## 2. 武 器

- |        |     |            |
|--------|-----|------------|
| 鉄刀     | 4 振 | 第 1 号石棺出土  |
| 鉄剣     | 5 本 | 第 1 号石棺出土  |
|        | 3 本 | 第 2 号石棺出土  |
| 鉄剣(槍?) | 1 本 | 第 3 号石棺内出土 |

4 片に折れているが接合すると全体が残っている。全長 34.5 cm。剣身は鍔から茎木までの長さ



第12図 快天山古墳第3号石棺  
内出土の鉄剣

26 cm、幅 3.3 cm あるが、厚さは極めて薄く、中央の鎬のところで 0.6 cm しかない。全体に木質が付着し、また別に木鞘の断片が残っている。それは断面が杏仁形をなし、その上を布で厚く巻いた様子が残っている。

茎は幅 2.2 cm、厚さ 0.3 cm あり、長さは関部に鈞があってはつきりしないが、その鈞端から茎尻まで 5.7 cm あり、直に切られている。目釘孔の存在は柄木の付着ではつきりしない。

柄は断面が円形に近く、その長径 2.5 cm、短径 2.4 cm あり、木質の上を、幅 0.4 cm の平紐でコイル巻きにし、その上に漆を塗っている。この拵えは剣とするよりはむしろ槍とすべきものであろうか。別に鞘尻らしきものがある。

#### 鉄矛身 1 第3号石棺外出土

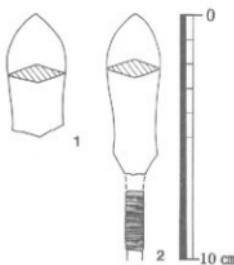
尖端が欠けているが、現長 18.7 cm あり、身の断面は不整方形をなし、基部では袋になって、柄を挿入するようになっている。その端径は 3 cm、内部は 2.5 cm まで中空であるが、その先是詰まっている。

#### 鉄鎌

第1号石棺出土のうち 3 個は、有茎柳葉型式である。もっともよく残ったものは長さ 6.6 cm、幅 2.2 cm あり、断面扁菱形を呈し、鎬がある。茎は欠けているが、折れた破片によると、竹の籠に樹皮を被せ、その上に葛巻きした後、黒漆を塗っている。

他は有茎腸抉柳葉型式で、復元すると、長さ 5.6 cm、幅 2.5 cm くらいある。

第3号石棺出土の1例は、平根腸抉有茎式である。尖端や逆



第13図 快天山古墳第1号石棺  
外出土の鉄剣

刺の部分、茎などを欠いているが、身長8cm、中央幅3.5cm、厚さ0.5cmの大型扁平なものである。

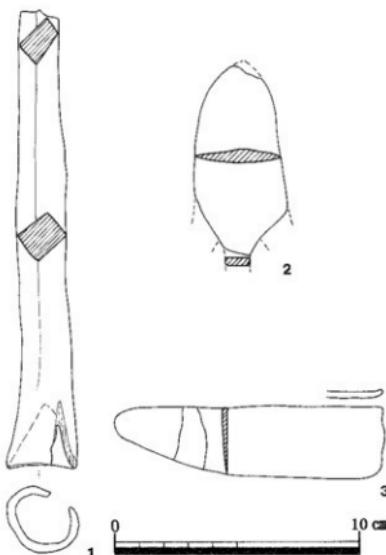
### 3. 農工具

#### 鉄斧 3

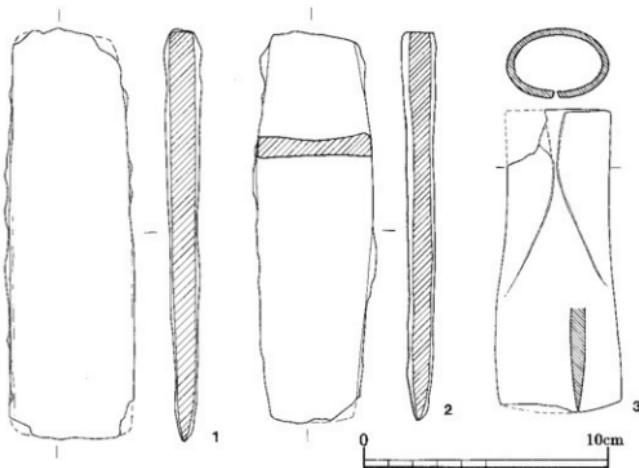
うち2個は扁平型鉄斧である。長方形の鉄板の一端を凸刃、他端を直脊としたもので、第1号石棺外出土品は長さ16.6cm、幅5cm、厚さ0.7cmを測る。

第2号石棺外出土品は長さ15.8cm、幅は中央が膨らんで4.6cmあり、刃部と脊部は多少狭い。横断面において、両側縁がやや厚く、中央部が表裏両面ともわずかにへこんでいる。

他の1個は第1号石棺外出土の有袋式で、袋部と刃部との界をなす両肩がなく、両側は直線状に続いている。長手でやや薄い作りである。袋部は鉄板の両側を折り曲げて、



第14図 快天山古墳第3号石棺外出土の鉄器類  
(鉄矛・鉄鎌・鉄鎌)



第15図 快天山古墳第1・2号石棺外出土の鉄斧

上で合せており、その長径は 4.2 cm ある。

全長 12.5 cm、刃幅 5.1 cm。

鉄鋤 1 第 1 号石棺外出土

ぼろぼろに砕けているが、横長の長方形の鉄板の両端を折り曲げて木柄を挿入するように作り、広い一端を刃にしたものようである。

鉄鎌 1 第 3 号石棺外出土

鉄鏟 1 第 1 号石棺外出土

鉄鑿 1 第 1 号石棺外出土

鉄刀子 3 第 1 号石棺外出土

2 第 1 号石棺内出土

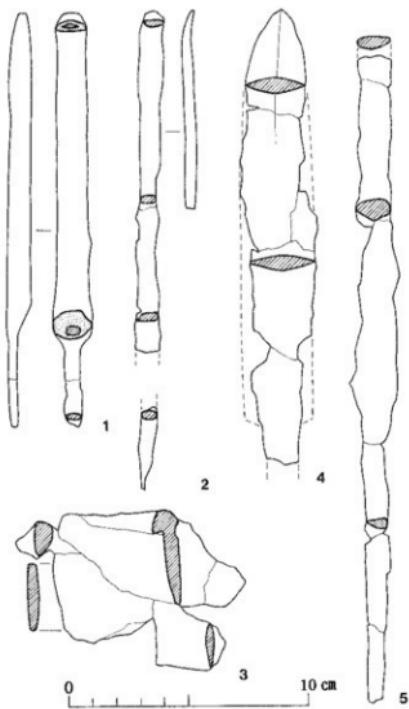
#### 4. 土製品

土師壺 1 第 3 号石棺外出土

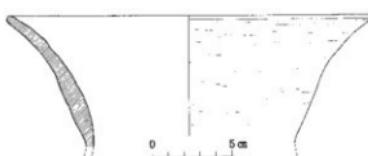
胴部が細かく壊れてしまつておらず、口頭部のみが復元できる。広口の丸底壺で、口径 22.8 cm、頸高 9 cm 内外である。黄褐色をした泥質で、外面は平滑に仕上げているが、内面は凹凸があり、厚さ不定である。表面摩滅して、刷毛目ははっきりしない。焼成は比較的良好である。

#### 埴輪

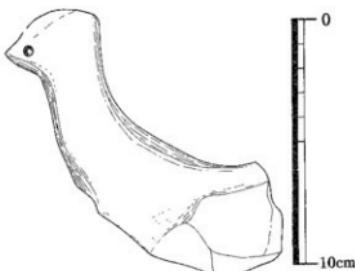
採集せられた埴輪は破片のみであるが、円筒が大部であって、そのうち大きさの知れるものによると、底径 33 cm 大のものと、30 cm 前後のもの 2 種があり、前者は厚さ 1.5 cm、後者は 1.3 cm ぐらいである。この



第 16 図 快天山古墳第 1 号石棺外出土の鉄器類



第 17 図 快天山古墳第 3 号石棺外出土の土師器



第 18 図 快天山古墳出土の鳥形埴輪

ほかに胡顔形埴輪も存在したと『県報告書』には記してあるが、詳細は不明である。

#### 鳥形埴輪

昭和25年10月13日に宇多津中学校の生徒が、後円部東側の基部に近い小径付近で拾得したものという。全長13.5cmの小型品で、簡単な作りではあるが、まっすぐに伸びた頭に丸い顔が付き、嘴は短く、沈線で丸い眼を表している。脚部は径2.8cmの円棒状をなし、今基部で折れてい。これは独立した彫像ではなく、もと、大型の埴輪に飾りとして付着していたものようである。京都府与謝郡作り山古墳や、岡山県金蔵山古墳、三重県石山古墳などから類品が出てくる。

#### 参考文献

梅原末治『古式古墳観』大和文化叢書 昭和36年

#### 註

- 1) 和田正夫「快天山古墳の発掘調査」(香川県教育委員会月報二の十 昭和25年10月)  
同文の記事が香川県立三本松高等学校考古学部発行の全国高・中学校考古学連盟の機関誌『Archaeology』第2号 昭和36年3月刊にも載っている。
- 2) 和田正夫・松浦正一『快天山古墳発掘調査報告書』(香川県史蹟名勝天然記念物調査報告書第15 昭和26年)
- 3) 朝倉書店発行『日本地名事典』第3巻 昭和30年
- 4) 南塔 阿闍梨快山 正徳二年三月(1712年)  
北塔 法印 快天 寛保元年六月(1741年)  
中塔 法印 有雅 寛政十一年十一月(1799年)
- 5) 註2) 文獻第1図によれば、-12mの等高線の辺りに、後円部後方の葺石と埴輪の位置が示されている。
- 6) 売出していた本石棺の蓋の傍らにある無縫塔列の近くに、桟壁に使用されていたと思われる板状の安山岩や河原石が積まれており、また同じ石材が、快天墓の台石の下にも敷かれているので、内部主体の乱掘は、少なくともこの無縫塔建立以前になされたと『県報告書』は見ている。もっとも第1号石棺発掘の際に、石桟西壁の上部に位置していた快天墓を除いたが、その下には快天墓の地下構造はなく、すぐに第1号主体櫛壇の上部にぶつかったという。  
また、第1号石棺は明治20年頃開いたことがあると、土地の人人が伝えているが、今回の発掘に際して、棺内から当時の遺品とおぼしきガラス製の鏡やランプのホヤ、茶碗の破片などを取りだしており、地元の言い伝えを実証している。
- また、坂出市の鍛冶共済会に快天山古墳出土の管玉。小玉の類が保管されており、それらは後円部後方が開墾せられた昭和7、8年頃、石棺発掘の際に出土したものといわれている。

# 付章1 快天山古墳測量調査略報

徳島文理大学 大久保 徹也

## 1. 2001年度の墳丘測量調査

これまで快天山古墳の詳細な墳丘測量図が作成されていなかったため<sup>1)</sup>、今回の報告書作成を契機に、綾歌町教育委員会では今後の快天山古墳保存活用方針を検討する基礎資料として、快天山古墳墳丘および周辺地形の測量図作成を計画した。

測量調査は徳島文理大学文学部講師大久保徹也を担当者として2001年4月～5月にのべ15日間をかけて実施し、同文化財学科学生の他、徳島大学総合科学部考古学専攻学生、九州大学考古学研究室学生、天理大学考古学研究室学生の参加を得た。快天山古墳墳丘および同古墳の規模・形態の検討に不可欠な周辺地形を可能な限り把握することを意図して、同古墳の立地する丘陵先端部の南北約160m、東西100mの範囲を対象に平板測量で縮尺1/100、25cm等高線図を作成した。

測量調査にあたり、石野博信、置田雅昭、岸本道昭、信里芳紀、乗松真也、古瀬清秀、北條芳隆、松本敏三、松本和彦の各氏には様々なご教示を頂いた。付記して感謝したい。

## 2. 快天山古墳の墳形に関する既往の理解

比較的早くから、快天山古墳を前方後円墳とする見解が示されてきたが、一方では根強く大形円墳の可能性も示唆されてきた。1970年代の大規模農地開発事業で前方部が切断された事態は、こうした從来の墳形理解の曖昧さと無関係ではないだろう。

1951年に刊行された県の調査報告<sup>2)</sup>では、相当の躊躇を交えながらも、快天山古墳を積極的に前方後円墳と捉え、その観点から規模・形状の観察を試みている。この調査報告に先立つ1935年の寺田貞次「讃岐に於ける前方後円墳」<sup>3)</sup>では讃岐地域の前方後円墳・双方中円墳計21基と「前方後円墳と思考されるもの」40基を集成し、規模・立地・埴輪の有無・埋葬施設・副葬品など諸要素の概説的紹介を試みている。この中で、快天山古墳は「前方後円墳と思考されるもの」として紹介する。また栗熊史談(1938年)では快天山古墳を「円墳(一説には前方後円墳ともいう)」と記述する<sup>4)</sup>。このような快天山古墳の墳形理解の曖昧さは、何といっても本墳に限らず四国北東部地域の前期前方後円墳の立地及び形態上の特性に由来する部分が大きいと思われる。平野に突出する眺望の秀でた丘陵先端を選び、後円部を先端側に設け、前方部を丘陵基部に向ける立地原則と、さらに後円部墳丘に比べ著しく立体感を欠く低平な前方部の付設という形態上の特性がそれである。また1950年の調査時にすでに前方部北半が畠地に開墾され、ある程度は原形を損なっていたことも墳丘理解の曖昧さを助長するものとなったといえよう。

前述の県報告では、後円部は尾根先端部を利用し、円錐形に加工された円丘部分が明確であるとして、さらに北に連続する尾根線部分の形状や、葺石、埴輪の散乱範囲を根拠に前方後円墳の

可能性を指摘している。また後円部中心より北 62 m 付近で尾根を東西に横断する里道付近を、前方部前端と推定している。以上の理解に基づいて快天山古墳の規模を次のように復元した。

墳長 約 100 m

後円部基底直径 約 65 m

後円部高さ 約 8 m

頂上平坦面 東西 13 m 余、南北 16 m 余の楕円形

後円部と前方部の比高 約 2 m

しかし同時に、前方部前端が明瞭でないこと、更に推定前方部前端付近で開墾時に 4 基の箱式石棺が発見されていることから、この部分に別的小規模墳を想定しうる可能性を挙げて前方後円墳と捉えることに対する躊躇もまた示している。なお前方部前端推定位置付近に別個の墳丘を想定する見解は上述の栗熊史談でもすでに示されている<sup>5)</sup>。

### 3. 快天山古墳の墳丘形態と規模

今回の測量調査の結果、とくに、両側のくびれ部を明瞭に捉えることができた点で、快天山古墳が前方後円形を呈することに全く疑問の余地はなくなったと考えるが、なお前方部前端ラインをはじめ、各部の詳細な規模・形状については確定しがたい部分が残り、今後の確認調査に結論を委ねる部分も大きい。以下、測量調査所見から推測しうる範囲で快天山古墳の規模・形状について簡単に報告する。

#### 〈立地〉

横山山塊から南に派生する丘陵群の南西隅に位置する一支丘先端部を利用し、後円部頂は標高 75.3 m を測り、南方平野部との比高はおよそ 40 m となる。墳丘主軸は N 20°E となる。後円部を南（丘陵先端）に、前方部を北（丘陵基部）に向ける。地形的にみて、丘陵基部に充分な余地が存在するにも関わらず、後円部を“無理に”丘陵先端部斜面にせり出すように設けており、その結果後述のとおり、後円部南端と前方部先端付近では墳丘基底レベルに数 m 以上の比高差が生じている。このような占地上の特性は本地域では前期を通して相当に普遍的に見出されるもので、快天山古墳の位置づけを評価する上で留意しなければならない点の 1 つである。

#### 〈現況〉

丘陵裾部では宅地化が進みつつあるが、南・西面ではまだ相当の間隙があり、本墳の地形条件などの理解を妨げるほどではない。ただし東面では間近に鶏舎などが設置され、それによってくびれ部よりの後円部裾が一部損なわれている。後円部から前方部南半部に至る部分は現在、櫻ほかの疎林に覆われ比較的旧状をとどめる部分であるが、後円部の東～南斜面一帯は 1930 年代の開墾時に形作られた畝が墳頂部まで並ぶ。更に東面では墳丘裾部が削り込まれ 1 m 内外の崖状を呈する。くびれ部西面も以前開墾され、その折に取りのけられた葺石が集積された箇所も見られるが、墳丘そのものの極端な改変は窺えない。同東面は上述のとおり、鶏舎が迫るが墳丘部分は、旧状をとどめているように見える。